

史料研究・成果公開

共同利用・共同研究拠点による研究・成果

特定共同研究

〔古代史料領域〕

研究課題 奈良平安時代の大規模写経群形成に関する史料学研究―小川八幡

神社大般若経を核として―

研究経費 一八〇万円

研究組織

研究代表者

稲田奈津子

所内共同研究者 山口英男・田島 公・尾上陽介・遠藤基郎・藤原重雄・

新井重行・堀川康史・黒須友里江・小塩 慶

所外共同研究者 川尻秋生（早稲田大学文学学術院）・坂本亮太（和歌山

県立博物館）・杉本一樹（宮内庁正倉院事務所）・竹中康

彦（和歌山県立博物館）・西本昌弘（関西大学文学部）・

野尻 忠（奈良国立博物館）・本郷真紹（立命館大学）

研究の概要

（一）課題の概要

和歌山県紀美野町の小川八幡神社が所蔵する大般若経（小川八幡神社経）は、全六〇〇巻（現状は折本六〇〇帖）が現存し、約一二〇巻の奈良時代写経、約三八〇巻の平安時代写経を含むことが知られている。一九七八年に学術界で紹介されて以来、古代の文化史・地域史等に豊かな情報を提供する研究対象として注目され、本格的な研究利用のための詳細な原本調査が待たれていた史料群である。今般、関係諸方面の尽力によって環境が整い、原本調査にもとづく調書作成とデジタル写真撮影を進めているところである。現在、

特に重要な課題として残されているのが、各経巻の時代判定であり、それに基づくと大般若経の成立過程（複数経巻群の取り合わせがどのようになされたか）の分析である。その検討には、料紙・紙質・書風の分析が有効な方法と考えられ、そこで得られたデータは、今後の古写経調査の基準データとしての意味も持つものと予想される。近年、各方面で進展している大規模古写経群の調査成果との比較研究の素材ともなり、幅広い研究発展が期待できる。

（二）研究の成果

六〇〇巻の構成と成立過程を解明するためには、各経巻の時代判定をもとに、とりあわせの状況を検討する必要がある。そこで本計画では料紙・紙質・書風の分析に重点を置き、本所技術部にも調査に加わってもらってデータの収集をおこなった。本年度は奈良時代写経を中心に分析を進め、調査の前後にはオンライン研究会で情報を共有し、調査方針について議論した。料紙調査の過程で、後次のな付着物物質の存在が指摘されたため、非破壊による蛍光エックス線分析を実施し、ヒ素などの有毒物質ではないことを確認した。また紙質の観察結果を共有するため、透過光撮影データの収集も試行的に実施している。書風分析に関しては、奈良朝写経の調査経験豊富な所内外メンバーによる実物調査とあわせ、情報学研究者の協力により文字の自動切り出しによる分析の可能性についても模索している。

〔中世史料領域〕

研究課題 賀茂別雷神社文書・社家文書の調査・研究

研究経費 一五五万円

研究組織

研究代表者

金子 拓

所内共同研究者 遠藤基郎・遠藤珠紀・川本慎自・林 晃弘・石津裕之・木下竜馬

所外共同研究者

伊藤真昭（京都西山短期大学）・宇野日出生（同志社大学）・大山喬平（京都大学）・加瀬直弥（國學院大学）・久留島典子（神奈川大学）・五島邦治（京都芸術大学）・三光寺由実子（和歌山大学）・志賀節子・高橋敏子・竹田和夫（新潟大学）・辰田芳雄（就実大学）・谷徹也（立命館大学）・谷口 央（東京都立大学）・中川 学（東北大学）・野田泰三（京都橋大学）・藤田恒春（賀茂別雷神社史料編纂委員会）・三枝暁子（東京大学）・山本宗尚（宇宙航空研究開発機構）・横井靖仁（関西大学）

研究の概要

（1）課題の概要

これまで史料編纂所では、賀茂別雷神社文書について継続的な調査・撮影をおこない、画像やデータの蓄積とその公開を進めてきた。賀茂別雷神社文書（京都府賀茂別雷神社所蔵）は、近年の京都府による調査で約一四〇〇〇点に整理されたが、史料編纂所ではこのうち二〇二一年度までに四九五八点（二五三三九〇マ）のデジタル化を終えている。

同社文書については、文明八年（一四七六）の賀茂一社争乱といわれる祠官と氏人との争い以前のは少なく、これ以後、江戸初期の寛文五年（一六六五）頃までの文書を非常に多く残している。本研究においては、この期間の文書約八〇〇〇点のうち、中世を中心に調査・撮影をさらに継続し、デジタル化・データベースからの公開（研究資源化）を進めるとともに、これらを用いた賀茂別雷神社、同社の文書、および同社の神事、組織、所領について、また、同社の文書を用いた中近世の政治史、文化史などの研究をおこなう。

（2）研究の成果

以下二回のオンライン研究会を開催し、賀茂別雷神社関係史料に関する研究の共有をはかった。

・二〇二二年七月九日 第一回オンライン研究会開催（報告者…遠藤珠紀・金子拓・志賀節子・高橋敏子）「東京大学史料編纂所所蔵「正伝寺関係文書」の紹介」

・二〇二三年二月一八日 第二回オンライン研究会開催（報告者…谷徹也）「豊臣政権における竹木支配―岩佐家文書を中心に―」

【近世史料領域】

研究課題 史料編纂所所蔵維新関係貴重史料の研究資源化
研究経費 一一〇・五万円

研究組織

研究代表者

小野 将

所内共同研究者

杉本史子・箱石 大・水上たかね・立石 了

所外共同研究者

麓 慎一（佛教大学）・岸本 覚（鳥取大学）・谷本晃久（北海道大学）・白石 烈（宮内庁書陵部）・福岡万里子（国立歴史民俗博物館）・福元啓介（尚古集成館）

研究の概要

（1）課題の概要

本所が特殊蒐書として所蔵する維新関係貴重史料群は、質量ともに国内有数のコレクションでありながら、一部を除き史料学的調査・研究は着手されたばかりである（デジタルアーカイヴ化も未形成）。本研究では対象史料群のうち、維新史料引継本（約二万冊、戦前期の維新史料編纂会が収集した史料群）・外務省引継書類（約三〇〇〇冊、政府から移管された江戸幕府の外国方関係史料）・史談会本（約二〇〇〇冊、旧華族諸家が複製収集した幕末維新史料群）、また、国宝島津家文書や島津家本のうち、幕末維新関係史料を対象とする。当該時期のそれぞれの地域を専門とする共同研究者を募集し、厳密な史料学的検討を加えつつ、各史料の記述内容を確認して解説目録の作成に着手する。明治維新への社会的関心をも見据えて、本研究の成果を公開し、来たるべきデジタルアーカイヴ化に向けての基礎的作業を実施する。

（2）研究の成果

【著作】

麓慎一『一九世紀後半における国際関係の変容と国境の形成 琉球・樺太・「竹島」・小笠原』山川出版社、二〇二三年五月刊、全二一〇頁

【論文】

麓慎一「明治維新と国民国家の形成―千島列島のアイヌを事例に―」(『鷹陵史学』四八号、二〇二二年九月)、一七―三〇頁。

谷本晃久「アイヌの人びとへの「同化」政策」(歴史学研究会編『歴史総合』をつむぐ 新しい歴史実践へのいざない) 東京大学出版会、二〇二二年四月)、四〇―四七頁。

白石烈「孝明天皇紀」編纂資料の構造と来歴」(『書陵部紀要』七四号、二〇二三年三月)、三二―八九頁。

福岡万里子「日本の主権者は誰なのか―幕末駐日外交官の日本認識と外交1868―1892」(『年報政治学』二〇二二―一)「特集・幕末・明治期の国際関係再考」、二〇二二年二月)、一三―四一頁。

【研究発表・報告】

谷本晃久「北の東西交流のはじまり―ラクスマン父子と大黒屋光太夫との出会いの世界史的意義―」(ラクスマン大黒屋セミナー・日フィン友好年二〇二二関連事業、在フィンランド日本国大使館・フィンランド国立公文書館・北海道大学共催、於フィンランド国立公文書館(オンライン参加)、二〇二二年九月一五日)

同「記述されるアイヌの文物―近世の文献資料から考える―」(国立アイヌ民族博物館第5回特別展示シンポジウム「アイヌ資料をコレクションすることを考える」、国立アイヌ民族博物館主催、於同館、二〇二二年一月五日)

・白石論文は、幕末史の基本文献『孝明天皇紀』の編纂過程で用いられた原資料につき検証している。明治期に宮内省先帝御事蹟取調掛のもとに蓄積された編纂材料としての史料群につき、目録の内容を紹介している(目録作成の契機したいが維新史料編纂会との関係にあることも解明されている)。維新史料編纂会との相互貸借、また史談会との関係についても検討を加えており、本研究の成果として貴重なものである。

・福岡論文は、学会誌掲載の論考であるが(日本政治学会編)、開港後の幕府外交にみられる交渉過程につき再検討をおこない、条約相手国の駐日外交代表による日本認識の変遷を追究したものである。本稿での幕府外交関係の史料分析にあたっては、本共同研究の成果が活かされており、とりわけオールコック英国公使についての事例研究に寄与しているといえる。

・谷本・麓両氏の業績は、本研究でも取りくんできた幕末維新期の北方史・蝦夷地研究の着実な進展に貢献するものと評価できる。

*本所出版物の『大日本古文書 幕末外国関係文書』巻之五十四(東京大学出版会、二〇二二年)の刊行にあたっては、史料情報の基盤整備や共有などの点で、本共同研究での蓄積が寄与するところが大きかった。あらためて記しておきたい。

【海外史料領域】

研究課題 本所所蔵在外日本関係史料の多角的利用のための翻訳研究

研究経費 二〇〇万円

研究組織

研究代表者 松方冬子

所内共同研究者 岡美穂子、大東敬典

所外共同研究者 大野晃嗣(東北大学)、イサベル・田中・ファンダーレ

ン、野澤文二(帝京大学)、フォースティヌ・ペイセ

レ(翻訳家)、森田由紀(翻訳家)、久礼克季(川村学園

女子大学)、富田 暁(岡山大学)、中砂明徳(京都大

学)、真下裕之(神戸大学)

研究の概要

(1) 課題の概要

本研究では、本所に所蔵される一六―一九世紀の欧文史料が、刊行・未刊行を問わずその史料価値に応じた十分な活用がなされていない現状に鑑み、その翻訳を通じて、ひろく学界に還元し、多角的な利用を可能にすることを目的とする。扱うのは、ポルトガル領インディア、オランダ東インド会社(VOC)という、広域的な組織の史料である。これらの史料群は、当時の世界を見る際に、貴重かつ豊富な情報を提供するが、今まではおもに日本の対外関係という限られた目的のために翻訳され、利用されてきた。しかし、近年、東洋史、西洋史の研究者も交えて、日葡関係史、日蘭関係史の方法的蓄積をほかに応用する試みがなされており、その需要も大きい。本研究により、本所所蔵欧文史料を利用する研究者が増え、実際に利用されている史料

の幅が広がることが期待される。また、新しい問題群に光が当たり、これま
ではない形で活用も可能になることも期待される。

(2) 研究の成果

①オランダ語翻訳と中国史の知見を総合することにより、イザーク・ティツ
イングの使節が駅通のルートを正確に辿って広州から北京まで赴いたこと
などが明らかになった。

②二〇二〇年度から特定共同研究として実施してきた翻訳研究により、グロ
ティウス研究をオランダ東インド会社文書の観点から批判的に検討するこ
とが可能になった。成果の一部を次の論考で発表した。大東敬典・久礼克
彦・富田暁・松方冬子『蘭領東インド外交文書集』(2)―オランダ東イン
ド会社とグロティウス―『東京大学史料編纂所研究紀要』第三三三号、二
〇二三年。

③今回の範囲では、アラビア半島からグジャラート周辺の海域交通の様子が
明らかとなった。

【複合史料領域】

研究課題 荘園絵図調査方法論の高度化と調査関連情報の学術資源化に関す
る研究

研究経費 一八〇万円

研究組織

研究代表者 井上 聡

所内共同研究者 榎原雅治・藤原重雄・黒嶋 敏・小瀬玄士・畑山周平・

中村 覚・海上貴彦

所外共同研究者 海野 聡(東京大学工学部)・守田逸人(香川大学)・清

水 亮(埼玉大学)・高橋 傑(慶應義塾普通科)・坂本

亮太(和歌山県立博物館)・高田祐一(奈良文化財研究

所)・大邑潤三(東京大学地震研究所)・額田雅裕(関西

大学)・田中水萌(神戸大学)

研究の概要

(1) 課題の概要

史料編纂所では、四〇年以上にわたって古代・中世荘園絵図の調査を実践
し、その成果を『日本荘園絵図聚影』(本編・釈文編)として刊行してき
た。現在、釈文編の最終冊をまとめる段階にあつて、これまでに果たせな
かった絵図原本調査・現地調査等の完遂が目指されている。あわせて従前に収
集した膨大な調査情報のうち、『聚影』に未収載の各種情報(調査記録・各
種地図・航空写真ほか)を整理・総括し、今後の研究進展にむけた学術基盤
を整備することが求められている。本研究においては、西日本地域を中心
に、未完となっている絵図調査を、現地状況に精通した共同研究員と共に実
践することで、研究の精緻化・高度化を図ってゆく。また膨大に蓄積された
調査関連情報の整理・統合を進め、これらが学界共有の学術資源となるよう
整備を行う。情報共有にあつては、各種デジタル技術を援用しつつ、既存
の「史料編纂所蔵荘園絵図模本データベース」や「地理情報システム」に
収載するとともに、様々な機関から発信されている人文地理情報との双方向
性を確立することで、分野を超えた諸研究の基盤となるよう意図している。

(2) 研究の成果

『日本荘園絵図聚影』編纂過程で史料編纂所が鍛えてきた絵図調査手法
に、さまざまな調査経験をもつ共同研究員の知見が加わることで、多角的な
視点に立った調査・踏査を実現することができた。調査にあつては、可能
な限り事前の検討会をリモート開催することで、原本熟覧にむけた調査ポイ
ントを共有し、限られた時間・条件下における観察技術の向上を図った。当
年度調査を許可されたものは、国重要文化財に指定されているものが大半と
なり、極めて貴重な史料を、本研究に集う他分野の専門家が、それぞれの視
点から分析する機会が得られたことは、大変有意義であった。かさねて原本
調査の知見をもとに、絵図の描く現地空間で踏査することで、描かれた図像
や構図が意味するところを多面的に分析・評価しえたことも大きな成果であ
る。調査・踏査を通じて獲得した知見は、『日本荘園絵図聚影 釈文編』に反
映させるとともに、史料編纂所歴史情報システム上にある「史料編纂所蔵
荘園絵図模本データベース」や「地理情報システム」収載データのアップデ
イトへと活用するところである。

一般共同研究

研究課題 松尾大社所蔵史料の研究資源化

研究経費 五〇万円

研究組織

研究代表者 角田朋彦（駒澤大学）

所内共同研究者 畑山周平・山田太造・高島晶彦

所外共同研究者 野村朋弘（京都芸術大学）・佐々木創（京都芸術大学）・坪井剛（佛敎大学）・西山剛（京都文化博物館）

研究の概要

（一）課題の概要

本研究は京都市西京区嵐山宮町に鎮座する松尾大社の所蔵する史料群について、調査・分析を行い、研究資源化をはかるものである。松尾大社は大宝元年に秦氏が社を建てた古社であり、国家祈禱を担う二十二社の中でも上七社に位置する大社である。「賀茂の厳神、松尾の猛神」と称され、賀茂社と並び朝廷をはじめ歴代の幕府から崇敬を受けていた。また京都市の中でも西京区、右京区、下京区など旧葛野郡を中心として民衆から篤い信仰を受けていた。松尾大社の祠官は、明治維新まで秦氏の末裔である東家・南家が勤めており、社家が所蔵していた多くの史料は、現在本社へ寄託されている。他機関での所蔵が僅かにあるものの現存している多くの関連史料は本社が所蔵しており、新出史料も含めて約二五〇〇点となっている。中世期のものを中心として近世・近代までの古文書、年中行事、社家日誌と内容は多岐にわたる。本研究ではこれらの史料群の全体像の把握に努めつつ、神社史料の料紙調査も進め、神社史料及び、中世から近代に至る料紙の基本データを学界共有の財産として公開することを旨とするものである。

（二）研究の成果

本研究の対象である松尾大社が所蔵する史料群は、中世を中心としながらも古代から近代まで幅広い文書を有している。朝廷からの口宣案や繪旨、白川伯家の御敎書、歴代將軍家の発給文書や、奉行人奉書など良質な史料が保

管されている。石清水八幡宮文書など他の神社史料と比しても遜色のない史料群であり、神社史研究はもとより料紙の科学的調査・分析を行うことが可能である。今年度の共同研究では、史料画像のデータ公開を行うべく、目録の校訂作業や史料撮影を実施した。新出史料については新たに目録作成を行った。特に新出史料では、近世の社家ごとの系譜が多く発見された。

なお二〇二三年一月に研究成果として、史料編纂所のデータベース（CAT-Plus）に史料画像のデータ公開を実施した。公開される画像は松尾大社所蔵史料のうち共同研究で二〇一九年度・二〇二二年度に撮影されたものを主としている。

研究課題 東大寺文書の近世・近代

研究経費 五〇万円

研究組織

研究代表者 森 哲也（九州大学）

所内共同研究者 遠藤基郎

所外共同研究者 坂東俊彦（東大寺史研究所）・三輪真嗣（神奈川県立金沢文庫）

研究の概要

（一）課題の概要

本研究課題は、個別文書の活用の際には、現在に至るまでの文書群の形成、伝来の過程を踏まえておく必要があるとの観点に立ち、東大寺文書（東大院文書を含む）を対象として、現状の成立に深く関わる近世・近代の様相を把握しようとするものである。具体的には、史料探訪側（近世では水戸徳川家、加賀前田家等）が作成した点検記録と、東大寺側の記録（『東大寺執行所日記』等）とを照合することで、具体的な探訪過程、書写された文書・典籍を確認する。合わせて各院家・組織の変遷を踏まえながら、現状の成立過程、所属した文書群等を明らかにするための基礎的考察を行う。また、寺外所在の東大寺文書について、伝来に関わった人物の関係史料、状況を記す陳述史料、東大寺内の記録等を分析することにより、寺外流出の事情・背景、伝来過程等を解明する。その成果を公開することで、必ずしも当該分野

に関心が高いとは思われない近現代史研究者の注意をも喚起し、未知あるいは現蔵者不明の文書に関して、所在や関係史料等の情報提供につながるようにする。

(2) 研究の成果

昨年度の成果を踏まえた今年度の調査・研究により、天和元年（一六八一）に実施された水戸徳川家、加賀前田家による東大寺への史料採訪について、その過程と実際に調査、書写された文書・典籍の具体的様相が解明され、東大寺所蔵文書・典籍の伝来過程を考える上で、一つの定点を固めることができた。奈良大学の調査では、上記水戸家の書写活動を裏づける東大寺文書、明治の神仏分離時、手向山八幡宮の東大寺からの分離に際して、過去の東大寺文書がどのように活用されたかを示す文書等を見出すことができ、近世・近代における東大寺文書の歩みを跡づける新たな手がかりが得られた。また、研究会での遠藤報告は、源頼朝文書を対象に、各時期の文書目録・点検記録の記載、それを伝えた寺内組織・保管場所の変遷を踏まえながら、その文書が保持された背景・理由とともに現状成立過程を分析したもので、単なる外形的把握に止まらない史料伝来論のモデルケースを提示した。その他、東大寺の記録中には上記以外の史料採訪に関する叙述が残ることと確認しており（分析は未了）、それらを含めた報告書の刊行を企図している。

研究課題 香川県下所在の中世史料の調査と史料学的研究

研究経費 五〇万円

研究組織

研究代表者 守田逸人（香川大学）

所内共同研究者 井上 聡

所外共同研究者 田中健二（香川大学）・橋詰 茂

研究の概要

(1) 課題の概要

本研究課題は、二〇二一年度採択一般共同研究「香川県下所在の中世史料の調査と史料学的研究」を継続させる形で、香川県下の中世史料群の包括的調査を行うものである。

香川県下に所在する中世文書は、一九九〇年に刊行された『香川県史 第八巻 古代・中世史料』の編纂を機に網羅的な収集・調査が行われた。その後、三〇年あまりの時間が経過し、新たな史料が確認できたり、研究の進展等に伴い再び全体の調査が必要になった文書群も少なくなくない。いま現在、そうした調査の必要がある文書群として、前者でいえば最明寺文書・冠纏神社所蔵文書・多和文庫所蔵文書などがあり、後者でいえば普通寺文書・香川大学図書館神原文庫所蔵文書・本門寺文書・道隆寺文書・金倉寺文書などが挙げられる。

本研究課題では、二〇二一年度に行った県内最大の文書群である普通寺文書の調査を引き続き行うとともに、主に上記の文書群原本の調査・再調査を行うことで、未発掘史料の調査・研究およびその公開、既知の文書群の再評価等の研究を進める。同時に香川県下の中世史料の全体像を把握し、史料編纂所と地域で史料情報の共有化を図っていく。

(2) 研究の成果

本一般共同研究では、香川県下所蔵にかかる中世文書のうち、県西部に散在する寺院・神社文書に焦点を充てて調査・撮影を行ってきた。

比較的小規模な文書群である本妙寺文書・西光寺文書・宝寿院文書・瀬戸内海歴史民俗資料館所蔵文書などについては、『香川県史』編纂以来所在が確認できた。

大規模文書群については、まず昨年度に引き続き普通寺文書の調査を行うことが出来た。本年度は、普通寺土蔵に残された、これまで全く明らかにされていない聖教の調査を行い、多くの中世史料を発掘した。年度内に発掘した全ての史料について撮影と整理を終えることが出来ず、課題を残すことになったが、おおよそ史料点数は二〇〇〇点を見込み、そのうち全ての史料についての番号付け、および一〇〇〇点弱の史料撮影を行うことが出来た。なお、今回撮影した史料からは中世史料一七七点を検出している。

一方、調査に着手することができた大規模文書群として金刀比羅宮文書がある。金刀比羅宮は、これまでほとんど組織的、包括的な史料調査を受け入れてこなかったという経緯があったが、本研究課題終了直前に、今後の継続的かつ組織的な調査を約束することが出来た。本研究では、当面、既知の中

世史料の撮影を行った他、中近世移行期の作成にかかる金刀比羅宮一帯を描いた絵図の他、未確認史料の存在を確認した。

以上、多くの研究成果が得られたが、なかでも普通寺文書については、文書群の性格などこれまで明らかにされなかった多くの事実が判明し、それらの成果は学界に資するところが大変大きいと考えている。できるだけ早い時期に報告書をまとめて刊行し、また個別の成果を論文の形で発表することを予定している。

研究課題 中近世古文書の料紙に関する総合的科学研究

研究経費 五〇万円

研究組織

研究代表者 貫井裕恵（神奈川県立金沢文庫）

所内共同研究者 尾上陽介・山田太造・小瀬玄士・渋谷綾子・高島晶彦

所外共同研究者 天野真志（国立歴史民俗博物館）・小倉慈司（国立歴史民俗博物館）・富田正弘（富山大学）・長村祥知（富山大学）

学）・野村朋弘（京都芸術大学）・柳原敏昭（東北大学）
高橋 修（茨城大学）・大山 恒（茂木町教育委員会）
名和知彦（公益財団法人陽明文庫）・阿部哲人（米沢市上杉博物館）

研究の概要

（１）課題の概要

古文書や古記録類の料紙は近年、自然科学的な知識や手法を応用し、繊維や添加物等の物質的情報の分析、抄紙過程で生じた痕跡の確認などの科学研究が進められている。本研究は、史料の多様な情報を科学的に検証し、古文書料紙の歴史の変遷に関する検討を行う。

研究では、複数種類のデジタルマイクロスコープを用いて料紙の構造を非破壊的に調査する。特に、構成物の種類・量・密度等の質的解析を行い、料紙の製造手法や地域的・時期的特性を抽出、生産・使用の実態を検討するとともに歴史的・社会的変遷の復元を行う。対象史料は、史料編纂所所蔵「島津家文書」、金沢文庫・陽明文庫・松尾大社・仁和寺の所蔵史料、ふみの森

もてぎ所蔵「茂木文書」、東北大学保管「結城白河家文書」、上杉博物館所蔵「上杉家文書」等である。抄紙過程で付与される糸目や簀目、皺などの表面情報も調査し、中世から戦国期における公家・武家文書の地域的特質や歴史の変遷の検討を行う。

（２）研究の成果

今年度は史料所蔵機関との調整の結果、史料調査の実施件数は少なかったが、令和四年度加速器科学総合育成事業や科研費等の共同研究と連携し、九月以降に、松尾大社所蔵史料の調査、石川県や富山県での文化財修復・保存に関する聞き取り調査、なら歴史芸術文化村での料紙復元製作実験、および本所所蔵「島津家文書」の調査を実施した。原本史料調査はこれまでの調査蓄積を踏まえて料紙の顕微鏡撮影を行い、繊維素材や填料の含有量における時代的・地域的変遷を分析するための科学情報を充実させることができた。さらに、料紙分析で獲得された情報にもとづいて復元製作実験を行い、古文書料紙の「モノ」としてのさまざまな特性を検討することができた。聞き取り調査を行った研究機関には今後も研究・調査の協力をお願いしており、多様な古文書料紙の分析の可能性を上げることができた。

本共同研究で料紙の構成物に注目するとともに、他の関連プロジェクトで行われた物理化学分析の結果とを比較したことによって、料紙の製造手法や地域的・時期的特性を中心とした情報抽出を進めることができ、関連する科学研究費と連携して料紙研究の書籍を出版するに至った。調査データの利用・公開に向けた議論も進めており、博物館展示の計画を含めた成果発信も予定している。

研究課題 国宝菅浦文書と関連史料の伝来形態と料紙に関する研究

研究経費 五〇万円

研究組織

研究代表者 宇佐見隆之（滋賀大学）

所内共同研究者 末柄 豊・井上 聡・渋谷綾子・高島晶彦・村岡ゆかり

所外共同研究者 青柳周一（滋賀大学）・水野章二（滋賀県立大学）・大河

内勇介（福井県立歴史博物館）

研究の概要

(1) 課題の概要

惣村文書の代表といえる国宝「菅浦文書」(一二七一点。滋賀県長浜市西浅井町菅浦区所有。滋賀大学経済学部附属史料館(以下、史料館)寄託)は、これまで必ずしもモノとしての検討がなされてこなかった。二〇二一年度、同文書、および菅浦において近年見出された文書の一部について料紙調査を行い、中世なかんずく鎌倉時代の年記を持ちながら近世に作成されたと思われる文書について、中世の作成にかかると考えて問題がないことを確認した。

本課題では、上記の成果をうけ、料紙調査の対象をより拡大し、惣村の基礎研究を深化させたい。すなわち、菅浦には共有文書「菅浦文書」のほか、各家に残った「菅浦家文書」などが伝わるが、両者は内容的に画然とした区分を持つようにはみえない。文書群ごとの伝来形態の相違の由来を理解するためにも、後世の偽作にかかると目されてきた文書をどのように捉えるかは大きな意味を持つ。したがって、近世文書を視野に入れつつ、料紙の検討をすすめるのとあわせて、様式や文字の形状を精査する必要がある。さらに、従来から成立年代が問われている「菅浦与大浦下庄界絵図」についても精査し、多角的な「菅浦文書」の史料学の構築につなげたい。

(2) 研究の成果

新型コロナウイルス感染症に対する警戒が依然必要な状況ではあったが、一二月に滋賀大学経済学部附属史料館において「菅浦文書」原本の調査を実施することができた。作成年代などに疑義が呈されている文書のうち、昨年度に調査を実施した鎌倉時代の年記を有する文書に続いて、南北朝時代の年記を有する文書を主な対象として紙質分析を行った。あわせて、古文書学的な観点からの研究の進んでいない年貢請求状についても紙質分析を中心とする原本の調査を実施した。さらに、昨年紙質を検討した文書の中でも特に疑義が呈されている文書について原本による筆跡確認をおこなった。また、「菅浦与大浦下庄界絵図」についても料紙の紙質や彩色、さらには筆跡の調査をおこなった。

調査結果の詳細な分析と検討は進行中であるが、南北朝時代の文書につい

ても、鎌倉時代の文書についてと同じく紙質の点からは疑義の多くは退けることが可能であるとの感触を得た。また、紙質のみならず、筆跡の観点を加えたことで、村落文書には存在しないはずという予断から偽文書と認定されることが多かった輪旨について、明瞭に真正なものだと認定することもできた。一方、史料編纂所における関連史料の調査として、「竹生島文書」を主対象に、「菅浦文書」においても確認できる支配者層の文書などを検討した。その成果の一例として、「菅浦文書」一二六一号は、これまで「竹生島文書」の写であると考えられてきたものであるが、正文とされてきた「竹生島文書」中の同文の文書は、江戸時代の写とみるべきものであることが判明し、両者の関係を再検討することの必要性が明確に浮上したことがあげられる。こうした成果は、現在刊行準備を進めている『菅浦文書集成(仮)』(吉川弘文館より上下二冊で刊行予定)に反映させる予定である。

研究課題 九州所在中世対外交通関係史料の調査・研究

研究経費 五〇万円

研究組織

研究代表者 榎本 渉(国際日本文化研究センター)

所内共同研究者 小瀬玄士

所外共同研究者 藤田励夫(文化庁)・佐藤健治(文化庁)・岡村一幸(文化庁)・宮田直樹(文化庁)

研究の概要

(1) 課題の概要

九州は大陸に近いという地理的条件もあり、多くの対外交通関係史料が残されている。こうした史料は史料編纂所においても古くから採訪事業が進められてきたが、そのこともありデジタル化については十分ではない部分も多い。昨年度、九州に所在する中世禅宗関係史料の調査を史料編纂所における共同研究として実施したが、こうした大陸との文化的・経済的交流の前提となる対外交通関係史料について、今般のような社会状況にあっても研究を進められるように、デジタル化を中心に詳細な調査を行い、研究資源化を進める必要を改めて感じた。そこで本研究は、鹿児島県下を中心としつつも、広

く九州に所在する対外交関係史料について、デジタル画像のみならず、紙質をはじめとした原史料に関する書誌的なデータの収集を行って研究資源化を進め、対外関係史の研究進展に寄与することを図る。

(2) 研究の成果

新型コロナウイルス感染症の影響により、年度前半に鹿児島で行う予定であった調査計画は変更を余儀なくされたが、流行の減少等、社会状況の好転により、多くの中世対外関係史料を有する青方文書の調査ができる見通しが立ったため、同文書の調査を二回に分けて実施した。青方文書は、瀬野精一郎氏によって花押がある文書についても、基本的には花押影であり、大半が室町期以降の写であるとの評価がなされ、それが通説化していたわけであるが、近年、吉原弘道氏が基本的に正文とみるべきで、花押影と判断する必要はないとの反論を示されていた。今回、研究環境整備の一環として、まずは、花押形や筆跡による比較検討がより簡単にできるように、史料デジタル撮影に習熟している史料編纂所の協力によって、高精細のデジタル撮影を行い、画像を編纂所において閲覧できるようにした。また、料紙を含めた詳細な原本調査を、文化庁の共同研究員によって実施した。その結果、瀬野氏の見解とは異なり、料紙の面からみても、正文については同時代の檀紙や杉原が用いられていること、案文についても、多くの案文が同時代のものとみられる料紙が用いられていることを確認することができた。今回の共同研究によって、多くの文書が写とされてしまったために、その内容の豊富さ、吉原氏の反論にもかかわらず、文化財としての価値が等閑に付されてしまった感のある青方文書の価値について、その高さを改めて確認することができた。

研究課題 高野山子院伝来資料の分野横断的研究―金剛三昧院・西南院を中心に―

心―

研究経費 五〇万円

研究組織

研究代表者 坂口太郎 (高野山大学)

所内共同研究者 渡邊正男・高橋慎一郎

所外共同研究者 大河内智之 (奈良大学)・木本誠二 (高野町教育委員)

会)・桐田貴史 (石水博物館)・小林雄一 (京都先端科学大学)・鈴木智大 (奈良文化財研究所)・高橋悠介 (慶應義塾大学斯道文庫)・土居夏樹 (高野山大学)・花田卓司 (帝塚山大学)・藤本孝一 (龍谷大学)・山本みなみ (鎌倉歴史文化交流館)

(1) 課題の概要

近年、高野山の各子院に伝来した資料について、調査が進展している。しかし、関連する内容を持つ資料が、複数の子院に分散して伝来している例もあり、単一の子院の調査だけでは不十分である。また、聖教・古文書以外の資料にも、調査を進めるべき余地は少なくない。

そこで、本研究では、金剛三昧院・西南院の二子院の資料を視野に収め、歴史学・密教学・国語学・国文学・美術史・建築史などにまたがった、分野横断的な共同調査・研究を行う。

金剛三昧院伝来資料は、現蔵分の文書以外に、高野山大学図書館に寄託中の聖教についても調査・撮影を実施し、重要文書の翻刻、聖教奥書の採集、調点資料・画像の分析を進める。また、西南院伝来資料についても、同様の調査・研究に取り組んでいく。

以上の作業を総合して、中近世の高野山史や真言密教史を解明する手がかりを得る。同時に、子院伝来資料の研究資源化につとめることで、今後の研究基盤の構築に寄与したい。

(2) 研究の成果

まず、金剛三昧院では、メンバーで寺蔵文書の整理・撮影を進める一方、研究代表者の坂口が、『高野山文書第五巻 金剛三昧院文書』(高野山文書刊行会、一九三六年)に漏れた中近世文書の翻刻に取り組んだ。とくに、享徳三年(一四五四)七月一日付「宥尊等寄進状」は、金剛三昧院の経蔵に『類聚名義抄』が奉納されたことを伝えるものであり、「仏本末二帖、同注在之、一帖」という注記とあわせて、国語学史上、注意を引く。また、「仏舍利相伝記」や「金剛三昧院舍利相承次第」といった仏舍利関係の内容を持つ文書が見えることも興味深い。絵画資料では、金剛三昧院の創立に関係した大蓮房覚智(安達景盛)の画像(室町時代)が発見された。

以上の金剛三昧院の調査成果は、共同研究者の山本が展示を担当した「北条氏展」の「北条義時とその時代」（鎌倉歴史文化交流館、二〇二二年七月二日～一〇月八日）にも反映させた。

次に、西南院では、神道史料を中心に調査に取り組んだ。すでに作年度の調査において、共同研究者の桐田が一六世紀の神道印信の存在を把握し、撮影を部分的に実施したが、本年度の調査では、一五世紀に遡る神道印信を多数見出した。また、神道印信とともに伝授された神祇典籍には、俗人への神道伝授を示すものもあった（『三種神祇秘訣』）。総じて、西南院の神道史料は、中世神道思想史に重要な意義を占めており、メンバー外で調査に御協力いただいた伊藤聡氏を次年度の共同研究者として迎えることで、更なる調査の継続や目録化を推進していく。

なお、西南院調査では、共同研究者の小林が、西崎亨著『高野山西南院蔵訓点資料の研究』（臨川書店、一九九五年）に漏れた、平安・鎌倉期の訓点資料を発見したことも成果の一つである。

研究課題 多可町杉原紙研究所蔵寿岳文章和紙コレクションと近世和紙との比較研究

研究経費 五〇万円

研究組織

研究代表者 安平勝利（多可町那珂ふれあい館）

所内共同研究者 山家浩樹・高島晶彦

所外共同研究者 湯山賢一（神奈川県立金沢文庫）・大川昭典（元高知県立紙産業技術センター）・地主智彦（文化庁）・本多俊彦（金沢学院大学）・富田正弘（富山大学）

研究の概要

（一）課題の概要

多可町杉原紙研究所蔵寿岳文章和紙コレクションについては、二〇一九・二〇二〇年度に湯山賢一を研究代表として、紙の縦横寸法・厚さ・重さ・密度、原材料や填料、製紙法など物理的技術的解明を試み、一六〇点について繊維填料等の顕微鏡写真の撮影を行った。これらのコレクションの料

紙データについては、二〇二二年三月に報告書として刊行したところであるが、なお残る分をも継続して調査するものである。旧共同研究では近代のものである寿岳コレクションから近世和紙生産の地域分布の状況を推察しようという狙いであったが、結果は原材料の繊維にパルプが多く配合されること、抄紙技術近代化の進行、紙製品の全国的な均一化も判明した。にもかかわらず、その紙の名称には檀紙・奉書・杉原・美濃・森下・典具帖・鳥の子・間似合・打雲・中折・半紙・延紙・八寸・三栖・宇陀・高野・西ノ内・程村・泉貨など近世以来の伝統的な名称をもつものが少なくなく、できるだけそれぞれの近世和紙の特徴を系譜的に受け継ぐことを目指していることは間違いない。したがって、新共同研究では、加賀藩主前田綱紀が収集した近世前中期の和紙コレクションとして知られる尊経閣文庫所蔵百工比照紙類と寿岳コレクションとを比較検討し、その系譜関係の度合いがいかなるのかを検討してみたい。さらに近世における杉原紙・奉書紙系統の展開をよりよく見通すために、史料編纂所蔵島津家文書の近世部分の料紙調査を加え、もつて寿岳らによって播磨発祥とされた杉原紙の変遷を考えるよすがとしたい。

（二）研究の成果

寿岳文章和紙コレクションの調査については、二〇一九～二〇二一年度の湯山代表の共同研究で調査を行ったうちの二六〇点について、昨年度、解説・調査データ・C染色液検査顕微鏡写真を載せた報告書を刊行し、近代和紙の特徴を明らかにしたが、その調査の残り分について、本年度において調査を行い、その半分を終えた。さらに残った分については、二〇二三年度に調査を終え、同様の報告を行ない、近代和紙の地域的特質も明らかにしたい。百工比照の紙類の調査については、反射光による顕微鏡写真撮影によって、繊維の種類、非繊維物質の状態、填料の有無などがある程度わかることが判明したので、紙質の推定に強力な武器を手にすることができた。これ等については、二〇二三年度に再確認調査を加え、簀目・糸目幅・板目・刷毛目・地色などのデータとともに顕微鏡写真を報告書として刊行すれば、当該コレクションの研究資料として、学会に提供できるようになる。

島津家文書の近世文書の部分については、手始めに、中世の檀紙・杉原紙系統の料紙を使うものと推定した女房奉書・宣旨・老中奉書など調査した

が、現段階の成果として、女房奉書などについては、近世独自の「縮緬奉書」などが使用される傾向があることが判明している。百工比照にみえる「越前縮色杉原」などとの関係を考えていく資料かと思う。

研究課題 大和国宇智郡所在寺院史料の研究資源化—金石文を中心に—

研究経費 五〇万円

研究組織

研究代表者 下村周太郎（早稲田大学）

所内共同研究者 菊地大樹・尾上陽介・木下竜馬

所外共同研究者 高木徳郎（早稲田大学）・佐藤亜聖（滋賀県立大学）・山崎竜洋（五條市教育委員会）・上相英之（奈良文化財研究所）・大久保治（元興寺文化財研究所）・服部光真（元興寺文化財研究所）

研究の概要

（1）課題の概要

大和国宇智郡（現・奈良県五條市）は、大和国の南半分を占める吉野郡と河内国および紀伊国と境を接する「国境地帯」であり、大和街道（古代下ツ道）と吉野川とが交わる交通の要衝ともなっている。平安期には興福寺の影響が強く及ぶほか、近隣の多武峰や金峯山の進出も受ける。さらに、中世に入ると、高野山（真言宗）や葛城山（修験道）とも濃厚に接触するとともに、井上内親王・他戸親王に由来する御霊信仰のメッカともなる。

本研究では、上記の通り宗教的に多様な表情を見せる宇智郡に所在する、栄山寺をはじめとした創建が古代中世にさかのぼる寺院が所蔵する史料の研究資源化を推進する。その際、文書史料や聖教史料に加え、建造物の墨書銘や石造物の銘文など金石文史料についても、調査対象として積極的に取り上げることにする。金石文史料は当該地域の宗教史的動向や信仰形態を復元する上で、文書史料の欠落を補う有用な史料となっているが、経年劣化により判読が困難なケースも少なくない。そこで、本研究ではひかり拓本や赤外線撮影などの専門家にも参加していただき、多角的なアプローチを試みる。

（2）研究の成果

栄山寺の八角堂において、墨書銘の調査を行い、赤外線写真およびひかり拓本による撮影を行った。ただ、当初の予想以上に退色や剝落が進んでおり、十全な資料化のためには改めて機材を見直して再調査する必要性が確認された。引き続き調査・撮影を試みたい。また、栄山寺の境内や裏山を調査した結果、未調査の石造物が複数存在していることを確認できた。これらについても、今後拓本採取などを進めたい。

元興寺文化財研究所において、同所が所蔵する写真帳や調書の調査を行い、旧宇智郡所在寺院にまだまだ十分に調査・研究資源化されていない中近世の文書史料や金石文史料が存在していることが確認できた。その中には栄山寺に関わるものもあった。こうした史料は特定の地域内における寺院同士の関係性を考える素材にもなり貴重である。今後こうした史料について、各所蔵者のご理解もいただきながら、可能な限り調査・撮影を行えればと考えている。

研究課題 史料編纂所所蔵明清中国公文書関係史料の比較研究

研究経費 五〇万円

研究組織

研究代表者 渡辺美季（東京大学）

所内共同研究者 須田牧子・黒嶋 敏・岡本 真

所外共同研究者 荒木和憲（国立歴史民俗博物館）・辻 大和（横浜国立大学）

研究の概要

（1）課題の概要

東京大学史料編纂所には、明清時代中国の公文書ならびにその関連文書が複数所蔵されている。それらは中近世東アジアの国際関係を読み解く際の貴重な史料であり、中近世日本における中国公文書の社会的価値を具体的に検討し得る好素材でもある。すでにある程度、基礎的データの作成や国内の類似文書のデータ集積が進められているが、これらの文書を古文書学的に位置付けるためには、明清国内における様式・形態や作成・発給過程についての制度的研究と、実際に発給された同類文書との比較検討が不可欠である。

そこで本研究ではこれらの文書について、二〇一九―二〇二〇年度一般共同研究「史料編纂所所蔵明清中国公文書関係史料の比較研究」に引き続き、①形式・作成・発給に関わる中国側の諸規定の調査を進め、②それらの規定と編纂所の所蔵史料とを対照した上で、③韓国国立中央図書館・韓国学中央研究院において明清中国から朝鮮に発給された同類文書（原本）との比較検討を実施する。これにより、規定と実態の両面からそれらの文書の古文書学的位置付けを明らかにし、東アジア地域で共有し得るレベルでの「史料の研究資源化」を目指したい。

(2) 研究の成果

韓国調査が出来なかつたのは残念だが、研究計画を見直し、かねてから調査の必要性を感じていた明代の宣徳帝勅諭（一四三三年）・永楽帝勅（一四〇七年）の熟覧調査を実施した。特に前者はこれまでほとんど公開されておらず、高精細の写真もなかったため、熟覧により由来や形状について多くの新たな知見を得ることができた。いずれ韓国調査が実現できたら、その成果と合わせて報告書にまとめたい。

また清代の公文書については、年度末に劉序楓氏を招聘し、史料調査と研究会を実施したことにより、史料編纂所の近藤重蔵関係資料のなかに、これまでほとんど知られてこなかった長崎唐人貿易関係の公文書（清の公文書の形式で作成された文書）を確認するなど、貴重な成果を得た。今後はこれらの文書も検討していきたい。

研究課題 日本史用語グロッサリーの再構築にむけて

研究経費 五〇万円

研究組織

研究代表者 Nadia Kanagawa (Furman University)

所内共同研究者 遠藤基郎・小塩 慶・菊地大樹・西田友広・堀川康史

所外共同研究者 Matthew Felt (University of Florida)・Paula Curtis

(University of California)・黄 霄龍 (日本学術振興

会)・佐藤雄基 (立教大学)・山口えり (広島市立大学)

研究の概要

(1) 課題の概要

日本史研究の国際化、とりわけ外国語による発信は喫緊の課題である。東京大学史料編纂所では、こうした課題への取り組みを支援すべく、史料用語・研究概念の外国語訳を蓄積し、「応答型翻訳支援システム」(Online Glossary of Japanese Historical Terms)を通じて国内外の研究者の利用に供してきた。本DBは二〇二一年八月に休止したが、休止を惜しむ声が多数寄せられ、その有用性が再認識されつつある。そこで本共同研究では、本DBの再公開に備えて、グロッサリー(用語集)データの追加を進めるとともに、翻訳ワークショップを通じて日本史史料翻訳の知見を蓄積する。本共同研究を通じて、日本史研究国際化の基盤整備に資することを目的とする。

(2) 研究の成果

本研究課題の最大の成果は、二〇二一年夏に運用を停止した「応答型翻訳支援システム」の再公開を実現したことである(「日本史用語翻訳データベース」に改称し、二〇二三年度に公開予定)。開発資金は別プロジェクトからの支援によるものであるが、本プロジェクトの取り組みにより同データベースの価値が再認識された結果と考える。

今年度は約二四〇〇件のグロッサリー・データを新規に入力した。国外の共同研究員が登録すべき著書・論文の情報収集や許諾の取得連絡などを務めた。また、共同研究員の人的ネットワークを活かし、所外の各種プロジェクトの研究成果からグロッサリー・データを抽出する許可を得ることもできた。継続課題により引き続き人力を進める予定である。

日本史史料の新たな翻訳については、二〇一七―一八年度の共同研究において一部着手したままとなっていた、『沙汰未練書』の英訳を再開した。今年度は翻訳ワークショップ(ハイブリッド形式)を二回開催し、全体の三分の二の英訳を完成させた。

研究課題 未撮影史料を中心とする陽明文庫の調査・研究

研究経費 五〇万円

研究組織

研究代表者 藤井讓治(京都大学)

所内共同研究者 尾上陽介・遠藤珠紀

所外共同研究者 名和知彦（公益財団法人陽明文庫）

研究の概要

（1）課題の概要

本研究課題は、撰閲家の一つ近衛家の文庫である陽明文庫所蔵史料の調査・研究を行い、さらなる研究資源化を志すものである。陽明文庫には、古代から近代にいたるまで多数の史料が、ほぼ散逸することなく伝来している。史料編纂所では、古くから所蔵史料の調査・撮影を進め、図書室において写真帳などの複本、近年では大型科研の成果によるデジタルデータでの公開を行っている。しかしまだ未撮影、未調査の史料、撮影済みでも十分に利用されていない史料が多数存在する。陽明文庫所蔵史料は複数の目録によって管理されている。その中で「一般文書目録」は、戦前京都帝国大学に寄託されていた折の整理に基づき、分類されたものであるが、陽明文庫所蔵史料の中でも多くを占める。本研究課題では主に「一般文書目録」に分類された史料群を中心に未撮影史料を悉皆調査し、史料群の性格、また個別の史料的性格を検討しつつ、細目録を作成する。また料紙の紙質調査を進めていきたい。

（2）研究の成果

本年度は七月・八月・一〇月・一二月・一月の五回、公益財団法人陽明文庫において史料調査を実施した。陽明文庫には多数の史料が所蔵されるが、調査では、主に一般文書目録「日記・記録・古文書覚」に記される史料を対象とした。この区分の史料は本年度でおおよそ終了したので、さらに他の区分の史料の調査を行う予定である。また三月には史料編纂所において、関係史料の調査および今後の研究課題遂行のための意見交換を行った。

本研究課題での調査により、所蔵史料の発見や再評価、従来不明であった日記の記主の比定、断簡として別々に保管されていた史料の復元などが可能となり、一定の成果を取めた。これは、共同研究として、所蔵者である陽明文庫のご教示を得つつ、専門を異にする複数名で検討したことによって得られたものである。今後、研究資源として広く利用可能となるよう紹介していきたい。

成果の一部は、尾上陽介「僧綱補任」下「寺田無禪書状」「寓記」

（『陽明文庫図録』四、二〇二三年）、遠藤珠紀「近衛信尹書状土代」（『陽明文庫図録』四、二〇二三年）、同「新たな山中長俊書状写と豊臣秀吉の「唐入り」構想」（『古文書研究』九三、二〇二二年）として紹介した。また来年度の『東京大学史料編纂所研究紀要』においても成果報告を行う予定である。

研究課題 蒐集デジタル画像を活用した「魚魯愚鈔」の情報資源化と除目研究の基盤形成

研究経費 五〇万円

研究組織

研究代表者 志村佳名子（信州大学）

所内共同研究者 田島 公・尾上陽介

研究の概要

（1）課題の概要

洞院公賢撰『魚魯愚鈔』は、除目に関する申文や大間書などの諸記録や、関連する儀式書の記事を集成した除目の専門書である。その活字本には、古代学協会編『魚魯愚鈔』（『史料拾遺』第四〇八巻、臨川書店、一九七〇～七七年）があるが、その底本である尊経閣文庫本は、古写本ではあるが、完本ではなく、外題と内容が齟齬するなど、必ずしも善本とはいえない。さらに途中から三条西家旧蔵本を校合に用いるなど、使用にあたって留意すべき点が多い。よって『魚魯愚鈔』（『魚魯愚別録』も含む）の主要写本を精査し、正しい本文を確定させる必要がある。

そこで本研究では、これまで東京大学史料編纂所が蒐集した『魚魯愚鈔』のデジタル画像をもとに、より良質なテキストデータを作成・公表する。除目関係史料は禁裏・公家文庫にも多数収蔵されるものであり、貴族社会の実態を検討するための重要な史料群である。それらの史料を熟知した研究者が集まり調査を進めることで、古代・中世の宮廷儀礼の中でも重要な儀式である除目の研究の推進し、その研究基盤の形成に貢献する。

（2）研究の成果

本研究では、現在史料編纂所が保管している四種類の『魚魯愚鈔』の重要な写本のデジタル画像（①陽明文庫所蔵『魚魯抄』・典籍目録一二一一一）。

二〇一二年—一六年度基盤研究(S)「日本目録学の基盤確立と古典学研究支援ツールの拡充—天皇家・公家文庫を中心に—」で蒐集、②国立公文書館旧内閣文庫所蔵禁裏本『魚魯愚鈔』二〇一七年度一般共同研究課題「近代における京都御所東山御文庫整理事業の研究」で蒐集、③古代学協会所蔵「三条西家本『魚魯愚鈔』二〇一二年—一五年度特定共同研究(古代史料領域)課題「九・一〇世紀古文書に関する史料学情報の総合化研究」及び二〇一二年—一六年度基盤研究(S)「同上」で蒐集、④京都御所東山御文庫所蔵『魚魯愚鈔』勅封36・2・1、二〇一〇—一五年度基盤研究(A)「禁裏・宮家・公家文庫収蔵古典籍のデジタル化による目録学的研究」で蒐集)を活用し、『魚魯愚鈔』のより正しいテキストを確定させるため、まず各写本の特色を比較・整理した。その結果、刊本の『魚魯愚鈔』(史料拾遺)が底本とする尊経閣文庫の二本の写本よりも、上記①④の方が正確な巻編成・外題・内題を持つことを確認した。また、①の写本を精査することにより、より使いやすい本文が得られることを確認し、刊本の『魚魯愚鈔』のデータを作成した上で、①の写本で校訂したテキストデータを作成した。このデータは検索に便利だけでなく、古代・中世にかけての除目の解明に資するとともに、『大日本史料』二・三編の編纂にも貢献するものである。

研究課題 史料編纂所蔵贋写本「児玉韞採集文書」の研究資源化にむけた

調査・研究

研究経費 五〇万円

研究組織

研究代表者 堀本一繁(福岡市博物館)

所内共同研究者 井上 聡・木下竜馬

所外共同研究者 佐藤祐花(福岡市博物館)

研究の概要

(一) 課題の概要

東京大学史料編纂所所蔵の贋写本「児玉韞採集文書」八冊(2071.91-30)は、江戸時代後期、筑前国西部における中世を主体とする古文書を採訪し、一一四〇点を写し取った文書集である。「児玉韞採集」の名称が付与されて

いるが、児玉韞は、内閣臨時修史局編修久米邦武が明治二〇年(一八八七)八月、筑前国怡土郡王丸村(現・福岡県糸島市王丸)に採訪した時点での所蔵者であり、実際に採集を行ったのは韞の祖父児玉琢(一七七三—一八二九)であった。琢は、平安時代末期・戦国時代に怡土郡内を領した原田氏の所伝を叙述した『改正原田譜』一〇卷(末尾二卷は附録として編纂のため採集した中世文書四五二点を収録)を編纂し、青柳種信『筑前国続風土記拾遺』の編纂では助力を行い、当該地域の中世文書に精通した人物であった。収録文書の半数以上は原文書の所在が不明であり、本贋写本の底本が長らく所在不明となっていたこととあわせ、本贋写本の史料価値を高めている。本研究では、収録文書を目録化することで全貌を紹介し、部分的利用に止まっている本贋写本の利用促進を図る。

(二) 研究の成果

贋写本「児玉韞採集文書」収録文書の全点目録を作成し全貌を紹介した。加えて、「児玉韞採集文書」を構成する写本群の成立時期や性格について検討を加えた。

「児玉韞採集」の名称が付与されているように、旧来、児玉琢が筆写した古文書写を基盤として孫の韞が採集したとの理解がなされてきた。本研究では、「児玉韞採集文書」の随所に書き込まれた注記を分析することにより、収録文書を実際に採訪し、あるいは既存の写本を転写した人物は、琢であったことを明らかにした。韞自身による古文書採訪や筆写を「児玉韞採集文書」において確認することはできず、「琢案」等の文言で始まる注記に明らかのように、いずれも琢の編輯にかかるものであった。韞は単に内閣臨時修史局編修久米邦武が採訪した時の所蔵者に過ぎなかった。採訪後、琢作成の写本類を所蔵する韞の名義をもって「児玉韞採集」という名称を付与したことが、本贋写本の性格を見誤らせる遠因の一端となったとみられ、本贋写本は正しくは「児玉琢採集文書」と呼称すべきものである。

本研究を遂行するにあたり、東京大学史料編纂所公開用データベースを大いに活用した。「児玉韞採集文書」収録文書と原文書との校訂を円滑に行うことができ、底本が長らく所在不明となっている本贋写本の原形を推測する手掛かりを得た。また、「児玉韞採集文書」には随所に複数の手による種々

の注記がなされている。書写の際に記されたもの、底本にある注記を写した
もの、あるいは、東京大学史料編纂所の編纂業務のために加筆されたもの等
が混在し、記主を特定したいが、謄写原本をつぶさに調査することでそ
の弁別につながり、上記結論を導き出すことができた。

研究課題 「中井家文書」を中心とする建築関連史料の高度資源化と活用

研究経費 五〇万円

研究組織

研究代表者 海野 聡（東京大学大学院工学系研究科）

所内共同研究者 新井重行・田島 公

所外共同研究者 清水重敦（京都工芸繊維大学）・登谷伸宏（同）・角田真
弓（東京大学大学院工学系研究科）・岸 泰子（京都府
立大学）・加藤悠希（九州大学）・小柏典華（芝浦工業大
学）

研究の概要

（一）課題の概要

主たる研究対象である京都御大工中井家関連史料（宮内庁書陵部図書寮文
庫所蔵）は、主に内裏造営に関する帳簿・図書類からなり、近世の建築生産
および宮殿建築の実態を示す貴重な史料である。同史料は史料編纂所の研究
成果としてデジタル化されているが、建築図面を多く含むため、解釈には伝
統的な木造建築の構造や部材、施工等に関する建築関連の知識が必要であ
る。ゆえにこれらの工匠関連史料の翻刻をするともに、建築史的見地から
分析することで、これらのデジタル化史料を用いた具体的な研究手法の提示
を試みる。

御所造営の詳細な検討は、近世日本における宮殿研究の発展という点にお
いて高い研究意義を有している。また工匠の組織論が中心であった建築生産
研究から作事現場レベルでの実証的な研究に展開する可能性がある。また加
えて、史料に対する文理融合研究の有効性を実証的に示す取り組みである。

（二）研究の成果

史料編纂所による宮内庁書陵部内匠寮本「中井家文書」デジタルデータの

成果をもとに、二〇一九年以降、建築史的視点からの精読による建築情報の
抽出・建築技術の実証的解明という研究手法を提示してきている。

「中井家文書」をはじめとする工匠史料の解説には工学的知見が求められ
るが、この実証的な研究手法と、対象史料の研究におけるこの手法の有用性
を示した。とくにデジタル化史料から得られる濃密な建築情報にもとづく研
究成果は高い価値を有しており、この分野における研究の礎を築くことがで
きた。

日中韓を対象に、文字による工匠史料に加えて、工匠道具を含めて検討す
ることで、工匠史料の枠を広げて東アジアの建築生産を検討した。特に道具
保有と史料保有の観点は建築儀礼の主体者、工匠家による技術保有・継承、
技能者と建築生産全体にかかわる問題である。日中韓の各国で前提となる資
料の残存状況や研究状況が大きく異なるため、その前提の理解のために各国
の研究状況や概要を把握し、最新の研究情報を得た。

また本一般共同研究とともに、基盤研究(A)「東アジアにおける工匠関連史
料にもとづく建築生産史の再構築と技術蓄積・伝播の解明」(研究代表者…
海野聡)のプロジェクトと協業することで、東アジアの視点へも展開してお
り、「中井家文書」の史料価値の顕在化とデジタル化の有用性を示し、中
国・韓国に所蔵される同様の史料群に対しても、本一般共同研究で確立した
研究手法が有効なアプローチであることを示した。

研究課題 愛知県津島市西光寺所蔵地藏菩薩立像(水落地蔵) 胎内納入品の

基礎的研究―諸国勸進地藏菩薩印仏を中心に―

研究経費 五〇万円

研究組織

研究代表者 川尻秋生(早稲田大学)

所内共同研究者 小塩 慶・田島 公・藤原重雄・堀川康史

所外共同研究者 鈴木景二(富山大学)

研究の概要

（一）課題の概要

「水落地蔵」は、現在、愛知県津島市西光寺に伝存する鎌倉時代初期の地

蔵菩薩像(国重文)であるが、もとは京都の水落寺にあり、知恩寺を経て現在地に伝来した。解体修理に際して、胎内納入品があることが判明し、その中に、印仏の表に勸進場所(莊園・宿・寺社名を含む)、勸進した月日などを書き入れ、裏に結縁者の名を一国につき一〇〇名程度、合計四五〇〇筆以上記した交名がある。一部に著名な人物を含むが、大部分は中〜下級の人々と推測される。

勸進は、文治三年(一一八七)二月、近江国から始まり、東山道・北陸道・東海道・畿内、および西国の一部など、三十数カ国にわたる。少なくとも列島の東半分をカバーした大規模な勸進の形態は貴重である。本研究は、人名・勸進場所など、本資料の基礎的な検討を行い、古代・中世史における地域史研究に資することを目的とした。

(2) 研究の成果

当研究プロジェクトには、時代や地域を越えた研究者が集まったため、多角的な共同研究が可能となった。主要な成果として、以下の点が挙げられる。
・武蔵↓常陸↓下総↓上総国のように、勸進ルートに寺院や神社が深く関わっている場合があり、同時代の他史料と組み合わせることによって、中世初期の在地のようすを解明できることが確かめられた。

・房総三国のように、古代氏族が強固に残存している場合があり、当史料は古代の地域史研究に使用することが可能である。とくに上総国では、上海上国造の末裔と推測される氏族が「交名」の中に複数確認され、さらに、同氏族は、「交名」と同時期の『玉葉』の除目にも上総目として見えるため、彼らが在庁官人層として健在であったことが推測できるようになった。この研究は、今後、当資料を古代・中世史研究に用いる際の一つのテストパターンになると考えられる。

・水落寺跡の調査を行うことになり、周辺の水路や橋の跡が現在も残存していることが確認された。さらに、洛中洛外図や江戸時代の地図を用いることによつて、周辺環境を復元的に考察することが可能になった。

・踏査を実施した長野市の富部御厨や清水荘の故地では、灌漑用水路や棚田などが比較的良好に残されており、勸進場所にどのような場所が選ばれたのか、また、中世の景観復原にも、当史料を有効に用いられることが確認

された。

・これまで唯一の活字史料であった「諸国勸進交名」「無量義経」「仏説観音賢菩薩行法経」(日本彫刻史基礎資料集成)鎌倉時代、造像銘記篇16(中央公論美術出版、二〇二〇年)の校正・翻刻を行い、より正確な釈文の作成を行った。

また、当史料をめぐる今後の研究の指針を得ることができたことは、とくに大きな成果である。

研究課題 明智光秀旧臣山崎家伝来文書の基礎的研究

研究経費 五〇万円

研究組織

研究代表者 萩原大輔(富山市郷土博物館)

所内共同研究者 林 晃弘・畑山周平

所外共同研究者 長村祥知(富山大学)・塩崎久代(石川県教育委員会)・佐藤 圭(越前市史編さん委員会)

研究の概要

(1) 課題の概要

明智光秀旧臣で本能寺の変に参加した山崎庄兵衛(長徳)は、もとは越前の朝倉義景に仕え、のち明智家に転じ、光秀滅亡後には前田利家へ仕え、江戸時代には加賀藩士となった。その加賀藩士山崎家に伝来した文書群の一部は現在、金沢市立玉川図書館近世史料館、加賀市文化振興課(加賀市歴史民俗資料館旧蔵)、金沢工業大学ライブラリーセンターなどに分かれて収蔵されているほか、朝倉氏遺跡資料館に関連文書が残る。

本研究課題では、上記の山崎家文書を調査し、その全体像の把握に取り組む。また、金沢市立玉川図書館近世史料館に残る江戸時代の由緒書(当邦諸侍系図)や「加陽諸士系譜」などや侍帳(山崎家譜)や「山崎長門守家来侍帳」などを通覧し、山崎家に関する系譜情報も集成する。これらの作業によつて、光秀旧臣であった山崎家の来歴や性格を可能な限り明らかにするとともに、「戦国の渡り奉公人」とも呼びぶる同家の伝来文書の史料情報を蓄積し、史料の研究資源化と共同利用の促進を図る。

(2) 研究の成果

現在、①金沢工業大学ライブラリーセンター、②加賀市教育委員会、③金沢市立玉川図書館の三カ所に分かれて所蔵される「山崎家文書」について、原本と附属資料の調査を行った。調査にあたっては木越隆三氏（石川県近世史料編さん室長）とも連携し、情報を共有しつつ研究を進めた。

調査を行った「山崎家文書」は、明治期に大聖寺町在住の山崎幽峯家（大聖寺藩最後の家老・山崎志摩之助（長敬））に伝来した古文書の一部であったことを確認しえた。「山崎家文書」は、いずれも山崎長徳の三男光式に始まる本藩人持組山崎家と、長徳の四男庄兵衛に始まる大聖寺藩家老役山崎家に伝来した古文書が混在している点の特徴である。残念ながら、明智光秀に直接関わる文書は含まれていなかったが、中世武士から近世武士へと変容を遂げていく山崎家に迫る材料を蓄積することができた。また、加賀藩初期の藩政や、藩主前田利長・利常の人物像を考えるうえで重要な史料群であることが明らかになった。

これらの成果については、木越隆三氏が「加賀藩重臣山崎長徳の事績と「山崎家文書」の伝来経緯―附「史料紹介」慶長・元和期の山崎家文書―」（『近世史料研究』創刊号、石川県近世史料編さん室、二〇二三年三月）をまとめられ、共同研究員がそれに協力した。

金沢工業大学ライブラリーセンター所蔵「山崎文書」、加賀市教育委員会所蔵「山崎家文書」についてはデジタル撮影を行い、東京大学史料編纂所の図書室にて公開した。また、加越能地域の史料所蔵機関等、東京大学史料編纂所において関連史料の調査を行った。

研究課題 吉野修験関係史料の調査

研究経費 五〇万円

研究組織

研究代表者 服部光真（元興寺文化財研究所）

所内共同研究者 榎原雅治・堀川康史・谷 昭佳・高島晶彦

所外共同研究者 坂本亮太（和歌山県立博物館）・松田 度（大淀町教育

委員会）・三宅徹誠（元興寺文化財研究所）

研究の概要

(1) 課題の概要

本研究は、大和国吉野山を対象に、関係史料の詳細調査および研究資源化を行うものである。吉野山は古代・中世以来の山岳信仰・修験道の一大拠点の一つであり、日本宗教史・寺院史上重要な位置を占めることは言を俟たない。これまでも精力的に史料調査が進められ、関係史料の集積もされている。しかしなお中世に遡る関係史料のなかにも未調査のものや、研究資源化が十分でないものがある。また廃仏毀釈の影響も大きく、個々の史料の伝来や機能に関わる分析についてはなお課題を残しているといえる。本研究では、具体的には櫻本坊所蔵『大般若経』と前坊家文書を対象とし、それぞれについて個別に史料分析を行い、一山寺院史研究、地域社会史研究、『大般若経』研究、寺院史料論、吉野の地域史研究といった視角から検討を行うとともに、調査史料についての報告文の公開や画像公開により吉野修験関係史料の研究資源化を図るものである。

(2) 研究の成果

櫻本坊所蔵『大般若経』調査は全八二〇帖のうち写経全三二〇帖の調査採取を完了し、版経の調査に入った。調査に際しては、共同研究員が各機関でそれぞれ行ってきた『大般若経』調査の知見を踏まえ、調査項目・方法を協議し、多筆経の実態を記録するための調書の様式を独自に策定して調査を進めた。

全帖の詳細調査の結果、既往の概要調査で報告されている以外にも多くの墨書が確認でき、とりわけ新たに確認された巻第一七八の奥書により、この写経の一群が正応二年（一二八九）に「般若寺上人」を勧進聖として発企され、大和国内の寺院の僧侶に呼びかけられて分担写経された一日頓写経であることが判明した。次年度に版経の調査を進めるとともに、写経に関しては調書および撮影写真に基づいて、他の奥書や筆跡、形態論的な分析を進めて、一日頓写事業の背景や実態の分析を進めたい。

また、表紙・裏表紙に別の写経が反故で用いられていることも確認できた。識語などは確認できず歴史学によるアプローチは困難だが、『大般若経』そのものの来歴にも関わるため、仏教学を専門とする三宅を中心に、本

文の系統分析などによってこの写経の性格について検討しうる事が確認された。紙背には吉野山での火事や宝永地震などについての近世の書付も確認された。榎原によって地震史料、松田によって吉野山の地域史料としての意義も確認された。近世・近代の『大般若経』の来歴に関わっては、元興寺文化財研究所に架蔵される櫻本坊所蔵近世・近代文書写真真帳での検討を進めた。前坊家文書は三点の調査をすることができた。但し、所在不明のものもあり、元興寺文化財研究所による過去の調査で確認された中世文書の全ての調査はできなかった。所蔵者との協議を通して所在については見当がついたため、所蔵者と松田で精査を行い、次年度に改めて正式調査を行う見通しができた。

研究課題 ポサドニツク号事件関係史料の研究

研究経費 五〇万円

研究組織

研究代表者 塩谷哲史（筑波大学）

所内共同研究者 松方冬子

所外共同研究者 辻 大和（横浜国立大学）・木村可奈子（滋賀県立大学）
学）・丸山大輝（長崎県対馬歴史研究センター）

研究の概要

（一）課題の概要

一八六一年のポサドニツク号事件（対馬事件）は、約半年間にわたるロシア軍艦の対馬・芋崎の占拠事件である。この事件は、幕末維新期日本における対外危機の表れとしてこれまでの研究で注目されてきた。しかし、①対馬宗家文書中に多数かつ詳細な記録が残されているが、日野清三郎一九六八『幕末における対馬と英露』を除くと、同文書の研究を通じて事件の経過を再構成する新たな研究はほとんどない、②海軍基地建設が目的であったが、なぜロシア海軍が対馬をその対象にしたのか、なぜ約半年で撤退をしたのか、占拠事件が対馬藩にもたらした影響は何かという点は解明されていないか、議論が分かれている。

そこで本研究は、ロシア側文書や在日西欧諸国公使の記録、宗家文書、朝

鮮王朝の史書のうち重要関連史料を翻訳ないし内容を検討したうえで、①日野の成果を批判的に検討しながら、ポサドニツク号事件の経過を再構成する、②ロシアが対馬を選択した理由、撤退した理由、事件が対馬藩政および経済に与えた影響について新知見をもたらす、③代表者がこれまで実施してきた一八四〇～一八五〇年代のロシアの対アジア外交史研究の延長線上に本事件を位置づけることを目指す。

（二）研究の成果

本研究の成果として、①ポサドニツク号事件の経過の再構成に際し、対馬藩側の史料とロシア語史料の記述の間にいくつかの齟齬があることが明らかになった。たとえば、ロシア側史料では、ポサドニツク号船長は一八六一年三月一二日（西暦）直後に対馬藩に対し、浅茅湾の警備やその一角の租借など一ニか条の要求をしたと述べられているが、対馬藩側の史料ではそうした要求について示されているのは五月以降の記事である。こうした齟齬は、ロシア語史料、江戸期の古文書双方に通じた研究者たちが協力をしたことにより発見できたことであり、今後その齟齬の理由を解明し、関係史料の公刊を進めたい（塩谷報告、二〇二二年一月二四日）。②ロシアが対馬を選択した理由や撤退した理由については、イギリスの対馬占領の意図に対するロシアの対抗意識やイギリス艦隊の介入が重要要因であったと考えられている。それは当を得ているが、他方、東アジア（とくに清朝、朝鮮）とロシアとの関係を踏まえると、当時のロシアは、おもに海軍省主導で第二次アヘン戦争（一八五八～一八六〇年）終結前後に極東で獲得した領土（沿海州）や上海などの周辺海域に海軍基地・拠点を次々に建設しており、対馬はその建設対象地の一つであったことが分かる（塩谷報告、二〇二二年一月一四日）。③またロシアの対アジア諸国・地域との対外交渉の過程において、イギリスとの協調と競争のバランスを考慮した意思決定が見られるが（塩谷 *Acta Slavica Japonica* 所収論文）、ポサドニツク号事件においても、ロシア外務省、海軍省の関係官僚、皇帝アレクサンドル2世の発言にそうした性格が見られる。今後本事件を、極東における海軍基地建設を軸に、当時の英露関係の展開とそのロシアのアジア諸国・地域との交渉への影響という面から分析するという新たな課題が現れてきた。

研究課題 兵庫県内外所在播磨国人史料の調査・研究

研究経費 五〇万円

研究組織

研究代表者 前田 徹（兵庫県立歴史博物館）

所内共同研究者 村井祐樹・畑山周平

所外共同研究者 前原茂雄（真庭市蒜山郷土博物館）・山本隆一朗（鳥取県立博物館）

研究の概要

（１）課題の概要

中世における国人の動向は、地域の歴史をあきらかにする上で欠くことのできない重要な研究課題であることは、申請者の近著『中世後期播磨の国人と赤松氏』（清文堂出版、二〇二一）で明らかにしたところである。その究明の基盤となる播磨国人関係史料については、『兵庫県史』等の自治体史の刊行により、その全貌がほぼ明らかになっている。しかしながら、種々の事情により悉皆調査を行ったものではなく、存在は把握していながらも採録ができなかったものや、原本調査に至らず、史料編纂所架蔵影写本に拠らざるを得なかったものも多数ある。また兵庫県外に存在する関係史料も多いが、いまだ十分な調査が及んでいない史料も少なくない。

さらに近年は、かつての自治体史編纂等の時点では存在が確認されていたものの、その後に行方不明となったものや、売却されたものも散見されるようになってきており、それらの再把握も課題となっている。

（２）研究の成果

本年度の研究では、兵庫県内のみならず、県外においても関係史料の調査・撮影を行うことができた。県内では、朝来市における大名山名氏に従属する国人や寺院に関する文書、加古川市の報恩寺や姫路市に寄託されている個人所蔵文書、神河町の法楽寺等では大名赤松氏やその被官に関する史料に多く接することができた。

さらに県外では播磨と深く関わりをもつ岡山県域（備前・備中・美作）において、近年発見された新出史料を含む、多様な史料の採訪を行った。その

結果、タイトルで二三件、カット数で約一八〇〇の新たなデータを加えることができた。

外部資金による研究・成果

科学研究費助成事業

撰閲家伝来史料群の研究資源化と伝統的公家文化の総合的研究

一、研究種目 基盤研究(A)

二、課題番号 一七H〇〇九二六

三、研究期間 二〇一七年度～二〇二一年度（繰越分）

四、研究経費 直接経費一九四万円、間接経費〇円

五、研究組織

研究代表者 尾上陽介

研究分担者 藤井讓治（京都大学）・島谷弘幸（九州国立博物館）・佐藤泰弘（甲南大学）・恵美千鶴子（東京国立博物館）・遠藤珠紀

紀

研究協力者 高島晶彦

六、研究の概要

（１）研究の目的

本研究課題は、平安時代以来、千年以上にわたって我が国の政治・文化を形作ってきた撰閲家に伝来した膨大な史料群について、目録情報とデジタル画像の整備・公開による研究資源化を進め、伝統的公家文化の総合的研究を行うことを目的としている。

具体的には、撰閲家の内唯一関係史料群がほぼ散逸することなく伝来している近衛家を研究対象とし、公益財団法人陽明文庫等に所蔵される近衛家伝来史料群のうち、古文書・古記録や書蹟・絵画等を中心に、網羅的な原本調査により目録情報を精緻化し、重要史料の高精細デジタル撮影と画像データの東京・京都における公開を進める。同時に従来利用されることの少な

った大規模史料群全体を各方面から分析し、伝統的公家文化の諸相について研究を深化させる。また、顕微鏡などを利用した詳細な紙質分析を通して撰閲家を使用した紙の実態を調査し、公家社会における紙の使用法についても考察する。

(2) 研究の実績

二〇二一年度は新型コロナウイルス感染症対策のため、東京から京都市の陽明文庫に出張して原本調査を計画通り進めることが不可能となった。そのため一部経費を二〇二二年度に繰り越して調査を継続し、古文書・古記録・典籍・書蹟などを中心とする近衛家伝来史料の目録情報の精緻化と、重要史料の高精細デジタル撮影を進めるとともに、研究成果の取りまとめを行った。

具体的には、近衛家に仕えた家司により延宝三年（一六七五）から明治五年（一八七二）までの約二百年間に亘って記録され、近世における撰閲家の活動をよく伝える『雑事日記』三三四冊のうち、これまでマイクロフィルムによる撮影も行われていなかった文久元年（一八六一）以降の部分について前年度に引き続き着手し、目録情報の精緻化と高精細デジタル撮影を進めた。その結果、『雑事日記』文久元年春夏冊から同三年春冊までの五点、計一三二六コマについて撮影を行った。なお、これまで五年間で撮影史料の総計は九一〇一点、五五二六七コマである。

これまでに撮影した画像データは、東京大学史料編纂所図書館閲覧室内の端末と、陽明文庫ホームページ内の「陽明文庫デジタルアーカイブ」(<http://ymbksakurane.jp/ymbkda/index.htm>)から順次公開を進めている。

原本の調査・撮影と並行して、他機関所蔵分も含めた撰閲家伝来史料による近衛家歴代当主やその周辺人物の政治的・文化的活動や、伝統的公家文化についての研究を引き続き進め、その成果の一部を学術論文や「陽明文庫講座」をはじめとする市民向けの公開講座等で発表した。

また、これまで継続してきた陽明文庫所蔵史料の紙質調査の成果を利用しつつ、虫損など傷みのひどい原本について、研究協力者高島晶彦を中心に調査・修補を進めて研究資源化に努めてきた。二〇二二年七月には院政期の書写と考えられる『僧綱補任』下（一卷）について修理を完了し、その内容や

性格について分析を進めた。

二〇二三年三月には、これまでの研究成果を取りまとめた尾上陽介編『禁裏・公家文庫研究』第九集（全四五〇頁）を思文閣出版より刊行した。

統合史資料画像データの生成と駆動方式の確立による人文科学研究基盤の創出

- 一、研究種目 基盤研究(A)
- 二、課題番号 一八H〇三五七六
- 三、研究期間 二〇一八年度～二〇二二年度
- 四、研究経費 直接経費四九〇万円、間接経費一四七万円
- 五、研究組織 繰越額二〇万円

研究代表者 山田太造

研究分担者 本郷恵子、尾上陽介、金子 拓、井上 聡（東京大学史料編纂所）、永崎研宣（人文情報学研究所）、山家浩樹（東京大学史料編纂所）、久留島典子（神奈川大学）、馬場 基（奈良文化財研究所）、伴瀬明美（大阪大学）、高田智和（国立国語研究所）、後藤 真（国立歴史民俗博物館）、

連携研究者 西田友広、遠藤珠紀、小瀬玄士、畑山周平（東京大学史料編纂所）

六、研究の概要

(1) 研究の目的

本研究では、長年に渡り蓄積してきた目録、画像、本文、文字など大量かつ多様な人文科学データに対して、横断検索や画像アノテーションでは実現し得なかった有機的かつ意味的なデータ表現・提示を行うために、史資料の性格・種類・形態をも考慮しながら人文科学研究の実利用に耐えうる統合史資料画像データの生成手法を確立し、格納・管理・検索・提示を行うためのシステムを構築する。統合史資料画像データを作成・共有していくための史資料画像データキュレーション機能を、特定の機関やシステムのみではな

く、ユニバーサルに利用可能な機能として提案し、本システムにこれを組み入れていく。統合史料画像データを利用することで潜在的に関連する史料を検出していく手法にも取り組んでいく。これらにより、統合史料画像データ駆動型人文科学研究基盤の確立につなげていく。

(2) 研究の実績

二〇二一度までの成果にもとづき、以下に示す三課題を実施した。

1. 統合史料画像データ生成手法の確立・統合史料画像データの構造化をさらに洗練し、生成方法の確立を進めた。下記を重点的に実施した。

1-1. くずし字等の文字画像データ・「史的文字データベース連携検索システム」における文字属性にもとづく分類手法および可視化手法について検証を進め、「歴史資料・古典籍の字形探索」サービスとして公開した。

1-2. 史料画像とそれに紐づくデータの統合・新たに柳川古文書館での調査・撮影を開始するなど、九州における史料を中心に調査・撮影を行った。これまでに取得してきた実データを用いて史料と多様なデータの関連付け手法の検証を進めた。

2. 統合史料画像データ管理システムの構築：SHIPS DBにおけるHIT-CAT Plus について『岩倉具視関係史料』『松尾大社所蔵史料』のデータを公開するに至った (JSPS 科研費 19H01303・19H00549 などと連携)。検証をしてきた統合史料画像データ管理手法にもとづく新たな画像ビューアの開発を行った。国際ワークショップ「Workshop of Frontiers in Humanities research Data Management in conjunction with DH2022」を開催し、人文科学における研究データとしての史料等のデータ管理に関する議論を日本で初めて行った。

3. 潜在的関連史料の検出：『後愚昧記』および『建内記』での人名抽出を行い、これまでの手法の利用可能性について検証を進め、歴史情報リポジトリの拡充に務めた。『後愚昧記』など南北朝期の史料を対象としたトピックモデルSTMを用いた史料分類手法を実施するなど、潜在的関連史料の検出手法および可視化手法の深化に努めた。

日本中近世寺社〈記録〉論の構築―日本の日記文化の多様性の探究とその研究資源化

- 一、研究種目 基盤研究(A)
- 二、課題番号 一八H〇三五八三
- 三、研究期間 二〇一八年度～二〇二二年度
- 四、研究経費 直接経費一〇万円、間接経費三万円
繰越額四八万円

五、研究組織

研究代表者 遠藤基郎

研究分担者 高橋慎一朗・菊地大樹・藤原重雄・川本慎自・大田壮一郎
(立命館大学)・藤井雅子(日本女子大学)・横内裕人(京都府立大学)

連携研究者 大藪 海(お茶の水大学)・貫井裕恵・三輪眞嗣(以上神奈川県立金沢文庫)・林 晃弘・高橋敏子

研究協力者 関口真規子(埼玉県立歴史と民俗の博物館)・西 弥生
(綜芸種智院大学)・松村和歌子(春日大社)・坂東俊彦
(東大寺図書館)

学術専門職員 比企貴之

六、研究の概要

研究の実績
科研最終年度にあたり総括となる研究成果報告として『東京大学史料編纂所研究成果報告二〇二二―一八日本中近世寺社〈記録〉論の構築―日本の日記文化の多様性の探究とその研究資源化』を刊行した。その目次は左記の通りである。

遠藤基郎「中世後期東大寺「記録」「日記」序論」・横内裕人「東大寺法華堂要録」小考―僧団「記録」の覚書」・三輪眞嗣「史料紹介新禅院公物方新古道具資財注文書」・藤原重雄・土山祐之「史料紹介寛正五年中臣祐識記」(上)(再掲・改訂版)・藤原重雄・土山祐之「史料紹介寛正五年中臣祐識記」(下)(再掲・改訂版)・藤原重雄・土山祐之

「史料紹介 春日大社所蔵『文正元年中臣延祐記』(再掲・改訂版)・土山祐之「法隆寺による春日神木動座・帰座への供奉について―暦応年間を事例として―」・高橋慎一朗「醍醐寺史料にみる太元帥法の(記録)・関口真規子「太元帥法血脈」・西弥生「大元法理性院相承次第」・藤井雅子「太元御修法雑々記」・高橋慎一朗「太元護摩次第」・貫井裕恵「東寺執行阿刀家とその伝来史料について」・貫井裕恵「史料紹介 國學院大學図書館蔵「仁平三年御齋会記(紙背康応二年(明德元年) 観智院賢宝日記)」」・高橋敏子「史料紹介「宝泉院快玄日記」・高橋敏子「史料紹介「見聞雜記」(欠落部断)」・林晃弘「一音坊顕證日記」について」・川本慎自「史料紹介 仁和寺所蔵「聞書」」

なお本書は東京大学学術レポジトリから公開している。

この他、『東寺執行日記』第二冊刊行にむけて錯簡関係の再検討・再修正などを行った。馬田綾子氏の全面的な助言・協力を得た。その実務には学術専門職員比企が当たった。最後に、本プロジェクト各方面において、各種便宜を図っていたいただいた各所蔵機関には感謝申しあげる。

データ繋留型編纂支援・資源化システム構築と歴史情報データベースの次世代展開

- 一、研究種目 基盤研究(A) 一九H〇〇五三三
- 二、課題番号 二〇一九年度～二〇二二年度
- 三、研究期間 直接経費八三〇万円、間接経費二四九万円
- 四、研究経費
- 五、研究組織

研究代表者 山口英男
研究分担者 末柄 豊・稲田奈津子・新井重行・黒須友里江・大隅清陽
(山梨大学)・伴瀬明美(大阪大学)

六、研究の概要

(1) 研究の目的

本研究は、データベース(以下、DB)の存在が日本史研究にとって不可

欠となりつつある状況を受け、混成・並列的に集積された多元的情報を連携・統合する点に歴史情報DBの特質があるという観点から、単なるデータ量の拡大だけでなく、研究・解析の支援に画期的な効果をもたらし、すぐれた研究利便性の提供を可能とする歴史情報DBの次世代展開を構想しようとするものである。そのため、基礎作業を効率化することで研究・解析を支援し、同時に史料解析の新たな成果と従来の蓄積との融合的な公開・発信を実現する「データ繋留型編纂支援・資源化システムMIDOH」の構築と、一定量のデータの充足が実現された現時点において電子媒体でこそ可能となる研究利便性を提供する「歴史情報コールシステムHICAL」を、史料編纂所歴史情報処理システムSHIPS上に開発・構築する。これによって、a 史料の編年解析(編纂)・研究支援、b 従来から蓄積されてきた成果と融合させた形のデータ公開、c 電子媒体でこそ可能となる研究利便性の提供という三つの効果の実現をはかる。そして、そのシステムの効果を検証する意味から、時代を連続的に縦貫する歴史情報の提供が可能となる点で学術的意義が高く、研究者の需要の強い平安時代史料を対象として、史料編年解析の作業を実際に進行させ、既存の成果と融合させた運用・公開をはかることで、平安時代史の研究環境高度化を実現することを目的とする。

このため、①MIDOH及びHICALの構築・運用、②平安時代編年体史料集のデジタルデータ化とMIDOHによるその公開・発信、③MIDOH・HICAL及び関連システムを利用した平安時代史料の編年解析の拡張と解析成果の公開・発信を実施する。

(2) 二〇二二年度の研究実績概要

システム関係では、二〇二一年度までにMIDOH本体の入力校正・公開検索システムの構築を終えたのを受け、付加機能となるHICALの開発に着手し、これを完了した。HICALは、SHIPSを構成するフルテキスト系データベース等と連携させ、史料に記述されている語句をマウスで指定することで、ワンクリックで出典史料の全文を呼び出すシステムで、史料解析の作業効率を飛躍的に向上させることが狙いとしている。語句を直接入力して検索することも可能な仕様としている。稼働状況の調整が済み次第、併用の予定である。

本課題の重要な目的であるデータベース公開に関しては、六月にMIDOHの所内限定公開、一二月に一般公開を実施した。https://www.wap.hi-to-kyo.ac.jp/ships/w28/search 一般公開したデータの内容は、①『大日本史料』第一編・第二編・第三編合計八九冊（網文三六五〇〇件、書目一〇〇一〇〇件）、②『史料総覧』二・三のうち『大日本史料』未刊範囲（網文一八五〇〇件、書目四二六〇〇件）、③MIDOHを利用して編纂・公開を行う新規の編年史料集である『九世紀編年史料（貞観―仁和）』の第一期公開分（網文三八六件、書目八一七件、『東京大学史料編纂所報』本号の「史料編纂」の項参照）、④自治体史編年史料二九種（網文二一五〇〇件、書目二九〇〇〇件）、⑤その他編年史料一種（網文二五〇〇〇件、書目三五〇〇〇件）である。このうち、①の一六冊分（第一編第一一〇冊、第二編第二八一―三一冊、第三編第二八・二九冊）の書目二八一〇〇件、③の全書目八一七件、④の『山梨県史』資料編三（古代編年史料・駒牽編年史料）の書目一二〇〇件は史料本文テキストを、①・③は全五〇二〇〇頁の版面画像（ないし代替のプリント形式画像）をあわせ公開した。合計して網文データ七九三〇〇件、書目データ一七六九〇〇件、史料本文テキストデータ三〇一〇〇〇件、版面等画像データ五〇二〇〇〇件（総計三三六五〇〇〇件）である。これとは別に所内限定利用のデータも搭載している。公開後のデータベースアクセス数は三月末までに七二〇〇〇件に達した。（以上、一部概数）

このほか、自治体史及びその他の編年史料集・年表等から平安時代編年史料データを生成し、平安時代史料の編年解析を進行させてデータを蓄積する作業を継続した。MIDOHを通じて公開する『九世紀編年史料』の編纂・公開は、後者の具体的な成果である。また、関係研究者を対象とした意見交換を九月及び一月の二回にわたり実施した。

なお、研究期間（二〇一九―二二年度の四年間）全体の実績報告は、科研費データベースに登録の研究成果報告書をあわせ参照されたい。

デジタル技術による金石文史料の研究資源化と学融合的歴史叙述への応用研究

- 一、研究種目 基盤研究(A)
- 二、課題番号 一九H〇〇五三六
- 三、研究期間 二〇一九年度～二〇二三年度
- 四、研究経費 直接経費七六〇万円、間接経費二二八万円
- 五、研究組織

研究代表者 菊地大樹

研究分担者 井上 聡（史料編纂所）、七海雅人（東北学院大学）、佐藤 亜聖（滋賀県立大学）、榎本 渉（国際日本文化研究センター）、上相英之（奈良文化財研究所）

研究協力者 阿部龍一（ハーバード大学）、泉田邦彦（石巻市教育委員会）、櫻井成昭（大分県教育委員会）、高橋敏子（元史料編纂所）、田中則和（東北学院大学）

六、研究の概要

(一) 研究の目的

本研究課題は、選択集中的な現地調査を実施するとともに、地域に蓄積された拓本・写真などの研究資源を整理公開し、新たな歴史叙述の開拓を目指す。そのために、デジタル技術による拓本作成および拓本撮影方法を研究開発し、金石文史料の研究資源化を図る。さらに、東京大学史料編纂所公開の金石文拓本史料データベースの改良により、他機関との連携も視野に入れた研究資源活用・分析の高度化を目指す。並行して、伝統文化的景観の保護や地域復興に資する歴史研究の方法を核としながら、文化財から歴史研究の素材へと金石文活用に向けた史料学的研究を展開し、歴史地理情報にも注目して従来の書誌情報とともに登録を進める。最終的に、歴史学全体が依存してきた「文献史料」中心の歴史叙述から脱却し、一九八〇年代以降活発になってきた「モノ史料」を活用した歴史叙述の方法を、欧米におけるマテリアル・カルチャー研究の動向にリンクさせた国際的な日本研究の視野から展開し、情報発信しゆく。

(二) 研究実績

COVID-19感染拡大が落ち着く状況が増えていたことから、研究計画の遂行がある程度見込めるようになった。まず年度初めにオンライン会議によ

り、参加者相互の連携体制を確認し、全体計画のもと班単位を中心とした具体的計画を相談した。①東日本班は、引き続き宮城県石巻市教育委員会と連携し、同市博物館において企画展を共催した（東京大学史料編纂所他後援）。準備の過程で多くの自治体史編纂関連資料を発見し、また市内の板碑所在確認調査も実施した。企画展では、とくに関連企画でひかり拓本の実演、調査に関するシンポジウムを実施し、広く市民に研究成果を還元した。同市保管の東日本大震災被災レスキュー資料中の『石巻の歴史』編纂資料のブローニー版については、すべてのデジタル化を完了した。②西日本班は、引き続き高野山町石研究会との協力により高野山町石調査を実施、すべての町石の正面の拓本採集を完了した。高野町と協力して成果報告会を開催し、広く市民に研究成果を還元した。③デジタル技術・DB技術開発班は、史料編纂所所蔵整理済拓本すべてのデジタル化を達成するとともに、あらたに高野山町石拓本のスキヤニングを試みた。上相英之はひかり拓本技術の実用化を進め、引き続き各班のフィールドワークに帯同してデジタルデータを収集した。金石文拓本データベースの抜本的改良を完了し、あらたなシステムを完成させた。④歴史地理情報研究班は新データベースに連動し、歴史地理情報掲載についての研究に着手した。⑤歴史叙述・国際日本学研究班は、Reischauer Institute of Japanese Studies, Harvard Universityにおいて開催された研究会に参加、英語による研究発表を行い国際的な成果公開を促進した。⑥その他、書籍購入・史料写真デジタル化・拓本装備等によって研究推進の基盤整備を進めるとともに、各メンバーが論文執筆・研究発表等によって成果を発信した。

(三) 進捗状況

今年度は、過去三年間の調査研究成果の蓄積についての公開、市民への還元を意識し、当初の研究計画を効率的に進めることができた。東日本班では、宮城県石巻市博物館において企画展「石巻の板碑」を共催する過程で、同市内の板碑確認調査がやや進捗し、またあらたに過去の自治体史編纂資料の発見に至った。『石巻の歴史』編纂資料デジタル化もすべて完了し、来年度以降の活用および成果還元の見通しが立った。西日本班はフィールド調査を積極的に進め、高野山町石正面のすべての拓本調査を完了したことは画期的

的であり、最終年度に側面等の拓本採集に注力できる前提を形成した。さらに、高野町と協力して報告会を実施、市民に成果還元できたことはおおきな成果であった。デジタル班は、東京大学史料編纂所一九九九年以前収蔵金石文拓本のデジタル化を完了した。あわせて、金石文拓本データベースの抜本的改良も完了し、最終年度に新たなデジタルデータの搭載を待つのみとなった。また、外部業者との共同により高野山拓本のスキヤニング方法を検討し、実施した。ひかり拓本技術については、一般市民から文化財関係者まで幅広く利用できるよう実用化を進め、企画展「石巻の板碑」関連企画としてワークショップを行い、実証実験および成果還元を実施した。また、デジタル化の前提となる拓本裏打作業について、史料編纂所修補室の指導のもと、同室と外部業者および研究所内プロジェクトとの共同で収集拓本の装備を着実に進めた。歴史地理情報班は、他の研究グループとの連携等により、あらたな金石文データベースに即した歴史地理情報システムの高度化と実装について検討を開始した。国際班は、海外との往来が再開したことを受け、アメリカ・ハーバード大学において国際的な研究成果発信を行ったことは画期的であった。

分散型大規模大名家史料群の高度学術資源化と地域還元

- 一、研究種目 基盤研究(A)
- 二、課題番号 一九H〇〇五三七
- 三、研究期間 二〇一九年度～二〇二二年度
- 四、研究経費 直接経費二八〇万円、間接経費八四万円
- 五、研究組織

研究代表者 鶴田 啓

研究分担者 古川祐貴(弘前大学人文社会科学学部)、木村直樹(長崎大学多文化社会学部)、石津裕之、須田牧子、荒木裕行(以上、東京大学史料編纂所)、村 和明(東京大学大学院人文社会学系研究科)

六、研究の概要

(1) 研究の目的

本研究では、データベースシステムの整備および史料画像の撮影・公開を行うことによって、分散して現存している大規模名家史料である対馬藩宗家文書の効果的な研究資源としての利用環境を整備する。それとともに、幕藩制国家を構成する要素としての藩の性格や日朝交渉における対馬藩の役割および幕府・対馬藩関係が日朝関係に与えた影響を解明する。あわせて、研究成果を研究者以外に公開するための効果的な方法を実践的に研究し、これらによって歴史学の現在の課題への効果的な貢献方法を構築することを目的とする。

(2) 研究実績の概要

二〇二二年度は、二〇二一年度までの研究成果についてシンポジウムを実施した。本研究は、歴史学研究と研究者以外の一般社会との間で、溝が大きく開いてしまっているといった現状を改善する必要があるという問題意識にもとづいて開始したため、日本史学の研究成果を研究者以外へ公開するという目的を持っている。そのため、シンポジウムも研究者対象ではなく、一般市民を主な対象として実施し、日本史学研究を一般市民にも理解しやすく説明するという点を重視した。シンポジウムの詳細は以下の通りである。

タイトル・シンポジウム「広がる！ 対馬歴史研究―対馬藩から見る江戸時代の日本―」、日時：二〇二二年二月一日（土）、場所 対馬市交流センター三階大会議室（対馬市厳原町今屋敷六六一番地）、共催：東京大学史料編纂所・長崎県対馬歴史研究センター、プログラム：鶴田啓「挨拶・趣旨説明」・丸山大輝（対馬歴史研究センター）「宗家文書データベースの構築とその意義」・古川祐貴「対馬に帰ってきた宗家文書」・木村直樹「目撃された朝鮮の人々―長崎・長崎街道―」・荒木裕行「対馬藩史料から解明する綱吉將軍就任の政治変動」・質疑応答、参加者数：五四名、その他・オンライン配信を実施した。

また、二〇二一年度までに作成したデータベースは、対馬歴史研究センターに設置したサーバより試験運用していた、科研終了後に活用するため、対馬歴史研究センターへ譲渡し、同センターのウェブサイトに公開できるように準備中である。

「国際古文書料紙学」の確立

- 一、研究種目 基盤研究(A)
- 二、課題番号 一九H〇〇五四九
- 三、研究期間 二〇一九年度～二〇二二年度
- 四、研究経費 直接経費八一〇万円、間接経費二四三万円
繰越額九〇万八千円

五、研究組織

研究代表者 渋谷綾子

研究分担者 石川隆二（弘前大学）・高島晶彦・尾上陽介（以上東京大学史料編纂所）・後藤 真・天野真志・小倉慈司（以上国立歴史民俗博物館）・野村朋弘（京都芸術大学）

研究協力者 山田太造・中村 覚（以上東京大学史料編纂所）・上條信彦（弘前大学）・富田正弘（富山大学名誉教授）・湯山賢一・貫井裕恵（以上神奈川県立金沢文庫）・名和知彦（公益財団法人陽明文庫）・鍾 國芳（台湾・中央研究院生物多様性研究中心）・國府方吾郎（国立科学博物館）

六、研究の概要

(1) 研究の目的

本研究では、古文書などの料紙情報の標準化を通じ、「国際古文書料紙学」の確立を行う。これまでの古文書などの物質的研究では、素材となる繊維などの検討による料紙の種類の特定や使用方法の分析、墨や朱など使用素材の分析が主たるものであった。しかし、本研究は、先行研究の成果をふまえてつ以下を実施する。①考古学や植物学の手法を応用した料紙の科学研究方法の標準化、②大量かつ多様な研究データを作成・共有していくための基盤の構築、③特定の機器やシステム、機関に依存しない科学研究コミュニティの形成。これらを達成することによって、料紙情報の国際標準化を進め、日本だけでなく東アジア全体における古文書や古記録などの紙媒体歴史資料の科学研究を展開させることができる。

(2) 研究の実績

本研究では、①料紙の科学研究方法の標準化、②科学研究データの共有管理システム構築、③研究データ共有管理システムを用いた科学研究コミュニティの形成、という三つを軸とする。料紙研究情報の国際標準化によって、歴史学の情報をより豊かにするとともに、国際的な歴史資料研究の基盤となるしくみを作り上げる。

二〇二二年度は以下の研究活動を実施し、研究の総括を行った。①歴史資料の現況の分析・精査と結果の検証（高島）、②料紙構成物の種類・量・密度の分析と結果の検証（渋谷）、③DNA分析による料紙の識別実験・成分特定と結果の検証（石川）、④科学研究データから標準的データを抽出し情報化、情報基盤との連携を検討・試行（渋谷・後藤）、⑤科学研究データから歴史資料の修理・保存に関する課題を検証し、研究成果の情報化を実践（天野）、⑥科学研究データと古文書の内容・様式との対応関係を検証し、成果公開を実践（野村・尾上・小倉）。①・②・③については、国内の研究機関および海外の研究者たちの協力を得て実施し、得られた研究成果は随時国内外の学術誌へ査読付き論文として発表した。④・⑤については、東京大学史料編纂所の情報基盤と連携させる準備を進めた。⑥では、全体の研究データと統合して検証を進めた。

すべての研究成果は、Digital Humanities 2022 (DH2022) や近江貝塚研究会など国内外の各種学会・研究会で報告を行った。さらに、「料紙研究の新常識の提唱」を目的として、自然科学的な観点を導入した古文書研究入門の書籍『古文書の科学 料紙を複眼的に分析する』（渋谷綾子・天野真志編、出版・文学通信）を二〇二三年三月末に出版した。本書は、二〇二一年度に作成した史料調査ハンドブック『古文書を科学する―料紙分析はじめの一步』の内容をふまえ、調査・分析に関わる基礎的な情報を紹介するとともに、関連する共同研究プロジェクトで進めてきた研究データの共有化・連結化・国際化についても展望を示したものである。

コンテキストに応じた人文科学データパッケージ化に関する研究

一、研究種目	基盤研究(A)
二、課題番号	二〇H〇〇〇一〇
三、研究期間	二〇二〇年度～二〇二四年度
四、研究経費	直接経費六七〇万円、間接経費二〇二万円
五、研究組織	

研究代表者 山家浩樹

研究分担者 本郷恵子、尾上陽介、井上 聡、山田太造、小瀬玄士、林晃弘、中村 覚、渋谷綾子（以上史料編纂所）、阿見雄之

（東京国立博物館）、馬場 基（奈良文化財研究所）、

六、研究の概要

(1) 研究の目的

本研究は、長年に亘り逐次的に蓄積されてきた史資料に関する諸データを対象として、

- ①多様かつ大量なデータを統合し、永続的な提供を可能にする環境を整備すること
- ②膨大なデータ群を利用するにあたり、ユーザーが求めるコンテキストに応じた必要データのパッケージ化を確立すること
- ③紙史資料以外の人文科学研究資源への適用可能性の分析・検証を行うことを目的とする

これらの実現により、人文科学研究資源のあり方を一新してゆく。

(2) 研究の実績

二〇二二年度までの成果にもとづき、以下に示す三課題を実施した。

1. 多様かつ大量なデータの統合と永続的な提供を可能にする環境整備

史料編纂所における基幹である所蔵史料目録DB (HI-CAT) と史料の物理的データ（紙質・状態・修理履歴など）を集約する「史料情報統合管理システム」との連携方式を確立していくため、昨年度までに開発を進めた「caid」に蓄積してきたデータを共有し永続的に管理するためのサーバ「caid server」をプロトタイプングした。

2. データのパッケージ化と提示手法の確立

引き続き、1の成果をもとに、史料に関わるさまざまなデータの収集していくコンテキストに基づいたパッケージ化方式の確立につとめた。この結果に対して、史料データの分類や可視化の手法を確立していくため、トピックモデルLDA・STMといったAI・機械学習手法の適用を進めることでデータ駆動型データ提示モデルの検証を進めた。

3. 紙史資料以外の人文科学研究資源への適用可能性の分析・検証

これまでに引き続き、奈良文化財研究所が行っている出土木簡や東京国立博物館蔵ガラス原板をもとにした史料画像の利活用を前提とした適用手法についても検証を進めた。

筆跡・花押情報の高度利活用研究―収集スキームの錬成と関連歴史情報との統合による―

一、研究種目 基盤研究(A)

二、課題番号 二〇H〇〇〇二二

三、研究期間 二〇二〇年度～二〇二四年度

四、研究経費 直接経費五九〇万円、間接経費一七七万円

五、研究組織

研究代表者 末柄 豊

研究分担者 井上 聡・川本慎自・遠藤珠紀(以上、史料編纂所)・久

留島典子(神奈川大学)・林 譲(駒澤大学)・大山 航

(東京電機大学)・未代誠仁(桜美林大学)・村川猛彦(和

歌山大学)・桑田訓也(奈良文化財研究所)

六、研究の概要

(1) 研究の目的

本研究は、これまで整備してきた筆跡・花押画像の安定的な収集環境を前提に、データ蓄積の質・量を一層拡大していくのと同時に、人文学的な手法にとどまらない多様な方法論を援用することで、筆跡・花押研究の新たなステージを招来することを旨とするものである。筆跡・花押を正確に読む・理解

するための学術基盤をすることにとどまらず、筆跡・花押画像の典拠となった原史料に関するメタデータほか膨大な関連情報を十全に活用することで、それらの形象が帯びた歴史的メッセージを最大限に汲み上げてゆきたい。

(2) 研究の実績

本研究は前年度と同じく次の五つの観点から研究を進めた。

① データ収集の拡充と収集方針の高度化においては、史料編纂所所蔵の貴重史料のほか、オープンデータとして公開されている各種史料を対象に収集を進めた。当年度収集データは、筆跡が約一三万七千件、花押が約一万八千件を数え、その結果、データ総数は筆跡が約五二万件、花押が約一一件を数えている。

② 公開による社会的発信の強化という点では、他機関との連携による「史的文字データベース連携システム」の強化に努め、①の新規情報を反映させた。当該システムおよび史料編纂所の「電子くずし字字典データベース」の年間総アクセス数は、一〇〇万件を超える規模になっている。また奈良文化財研究所と共同開発する字形解析システム「MOJINO」のリニューアルを進め、二〇二三年三月に一般への供与を開始した。リニューアルにあつては、深層学習を用いた新たな解析モデルを導入し、精度の向上を図った。なお「花押データベース」についても、年間約三五万回のアクセスを数え、筆跡同様に広汎な利用が確認されている。

③ 人物情報を媒介とした筆跡・花押分析の高度化研究においては、前年度に引き続き、新規登録データの人物情報を、史料編纂所歴史情報処理システム内にある人物レポジトリへと移行し、他データベース群との参照連携を進めた。

④ 史料学的情報との統合による筆跡・花押情報の高度利用研究においては、蓄積データを対象とする深層学習を引き続いて実践した。②に掲げたMOJINOのリニューアルはこの成果によるものである。また、筆跡・花押の分析精度を高めるために、筆路を復元して、電子的に記録するシステムの開発をすすめた。

⑤ 史料学的情報との統合による筆跡・花押情報の高度利用研究にあつては、前年度につづき文書様式ごとの字配りや花押配置について特徴を抽出

し、電子的なデータとして蓄積することに努めた。

在外日本関係史料の調査と貴重史料の研究資源化による維新史料研究国際ハブ拠点の形成

- 一、研究種目 基盤研究(A)
- 二、課題番号 二〇H〇〇〇二二三
- 三、研究期間 二〇二〇年度～二〇二三年度
- 四、研究経費 直接経費七四〇万円、間接経費二二二万円
- 五、研究組織
研究代表者 保谷 徹
研究分担者 岡美穂子・小野 将・箱石 大・水上たかね(以上、史料
編纂所)・谷本晃久(北海道大学)
連携研究者 杉本史子・山田太造・立石 了(以上、史料編纂所)
研究協力者 有泉和子・犬飼ほなみ・及川将基・加藤絵里子(以上、学
術専門職員)

六、研究の概要

明治維新一五〇年を契機に、①在外日本関係史料の調査・収集と研究資源化を推進し、実績のあるロシア調査をはじめ、四つの重点研究チームを設置して補充調査と史料研究をおこなう。②幕末維新関係貴重史料コレクションのデジタルアーカイブ化と史料研究を進める。③維新史料研究国際ハブ拠点形成プロジェクトと連携し、幕末維新関係史料の基幹的データベース英訳事業の推進・研究用語や史料用語の英訳グロッサリー研究をおこなう。この三つのプロジェクトを有機的に連携し、世界史の中の明治維新研究を進める。幕末維新関係史料のデジタルアーカイブ化による公開や研究成果の国際発信につとめ、維新史料研究の国際ハブ拠点形成を目指す。

以下、研究実績の概要をかかげる。

(一) ロシア所在日本関係史料調査と所蔵史料についての共同研究(ロシアI・II)については、翻訳作業を進める一方、引き続きいたコロナ禍と昨今の国際情勢のもとで研究会や調査事業の実施は先延ばしにせざるをえなかつ

た。これに代わって、ロシア史研究者保田孝一氏(故人・岡山大学名誉教授)旧蔵の日露関係史料等複製コレクションの整理などをおこなった(全一六一冊)。

(二) コレクション形成史からみる一九世紀日露関係史に関する調査研究(ロシアIII、研究分担者・谷本晃久)班も現地調査等を断念し、共同研究の素材としてのアイヌ・北方史関係史料のデジタルアーカイブ化に注力した。今年度は「蝦夷地全図手書」・「蝦夷図手書」・「松前蝦夷地絵図」など、北方関係の地図・絵図類二三点の高精細データを作成した。ここには、三・五メートルを超える「東西蝦夷山川地理取調図(一枚軸バージョン)」や、昭和一六年写しではあるものの、原図がライデン大学図書館にあるとされる「黒竜江中州并天度(間宮林蔵)」を含んでいる。いずれも北大附属図書館「北方資料データベース」で公開。

(三) 南欧班(研究分担者・岡美穂子)では引き続き、イタリア人による日本・シベリア訪問記「日本とシベリアージェノヴァ公殿下随行時における極東の旅の覚書」(ルキノ・ダル・ヴェルメ著、一八八五年改正第二版(初版は一八八二年)、ミラノ)の翻訳・研究を進めた。とくに外務省外交史料館が所蔵するイタリア皇族来日関係史料の調査・収集を実施した(二三四〇コマ)。

(四) 横浜開港資料館と連携したフランス外務省史料画像データ(約八万コマ)の連携公開については、フランス外務省文書館との協議を継続し、覚書締結などが最終段階にいたっている。

(五) 維新史料研究国際ハブ拠点形成プロジェクト(小野将代表)と連携して、「維新史料綱要」データベース英訳事業と英訳グロッサリー作成を支援し(データ項目約二万件の英訳を完了)、一月二七日、オンライン国際研究会「維新史料研究と国際発信」を共催した(東京大学史料編纂所主催)。詳細は研究会報告参照。

(六) 維新関係貴重史料の調査と研究資源化の課題では、「岡谷文書」・「北門史綱」・「萩廻落葉」・「青山家書類」・「津和野藩記」・「新谷藩記」・「戸田家記録」・「時勢叢談」・「時勢秘録」・「時勢雜記」・「風説集」・「見聞集」・「常州事件」など、史談会本七三四冊、三万九八〇〇コマ(一部は連携プロジェクト

の経費)をデジタル撮影し、ウェブ公開・発信の準備をおこなった。
(7) 明治維新史学会第五二回大会で「在外日本関係史料の調査と幕末維新史研究」と題してオンライン講演をおこなった(保谷、六月一日)。(保谷 徹)

外交の世界史の再構築―一五〇―一九世紀ユーラシアにおける交易と政権による保護・統制―

一、研究種目 基盤研究(A)

二、課題番号 二一H〇四三五五

三、研究期間 二〇二一年度～二〇二四年度

四、研究経費 直接経費六七〇万円、間接経費二〇一万円

繰越額四二万円

五、研究組織

研究代表者 松方冬子

研究分担者 森永貴子(立命館大学)、塩谷哲史(筑波大学)、彭浩

(大阪公立大学)、菊池雄太(立教大学)、岡本隆司(京都

府立大学)、松本あづさ(藤女子大学)、辻 大和(横浜国

立大学)、大東敬典(東京大学史料編纂所)、木村可奈子

(滋賀県立大学)

六、研究の概要

本研究では日本史研究の蓄積を他地域の事例と比較することで、新しい世界史像を構築しようとする。最終的には、ヨーロッパ中心主義を克服し、より平らかな世界史を描くことを目指す。

本研究は、「交易や人の移動に対する権力のコントロール」の、ユーラシア各地におけるあり方を実証的に検証し、多角的に比較する独創的・先駆的研究である。以下の三つの指標を用いる。

①外国人や外国人との取引は、どのように統制されているか。政権の発給する外国人統制法(約条、規條、条目など)と商人間の契約の組み合わせか、政権間の条約か。

② 政権は国際交易からどのように利益を得ているか。広く浅くとする関税か、コミッション(手数料)、贈物(貢物)、賄賂などによるか。

③ 居留民の長は誰のためにいるのか。居留民自身のためか、送り出した国の政権のためか、あるいは滞在国の政権のためか。

一九世紀後半以降、①は「通商条約」、②は「関税」、③は「領事」の問題として整理され、世界のどこでも一元的に理解されるものとして、整理されていくようである。しかし、本研究では、その前史を、各地、各政権、各交易集団の固有性と多様性を踏まえつつ、実証的に明らかにする。

本年度は、下記の活動を行った。

〇七月三十一日～八月一日、藤女子大学において第五回研究会を開催した。ラインアップは下記の通り。

(第一部)

趣旨説明・松方冬子「外交の世界史の法的側面」

皆川卓報告「三十年戦争期神聖ローマ帝国の領邦における占領と外交権の変容―ホーエンローエ伯領とミュンスタール教領の場合から―」

松方冬子報告「『論書』をめぐって―約条再論―」

(第二部)

松方冬子報告「カール・ポランニー『経済と文明』と坂井信三『イスラームと商業の歴史人類学』を読む」

松本あづさ報告「沖の口役と沖の口口銭―松前藩における船・人・積荷への課税―」

塩谷哲史報告「条約条文を読む」

その後、国立アイヌ民族博物館見学と厚岸、根室の巡見を行った。

〇一月一四～一六日、塩谷哲史が、スペイン・マドリッドの国立人類学博物館で開催された国際学会「間接外交―宮廷を越えた帝国間の交渉―」に参加・報告した。

〇二月二四日～二六日、東京大学史料編纂所において、第六回研究会を開催した(JSPS科研費20K01004と共催)。ラインアップは下記の通り。

(第一部 読書会「中国の関税と領事」

彭浩報告「青山治世『近代中国の在外領事とアジア』を読む」

松方冬子報告「本野英一『伝統中国商業秩序の崩壊』を読む」

森永貴子報告「岡本隆司『近代中国と海関』を読む」

(第二部) 松方冬子報告「一九世紀言語を使わない方法―誤読されないための一つの試案―」

(第三部) 読書会「交隣と東アジア」 書評：辻大和、吉岡誠也、川口洋史

(第四部) 書評会「華夷変態の東アジア」

趣旨説明：岡本隆司、書評：岡本隆司、木土博成、石川亮太

(第五部) 菊池雄太報告「『関税』概念の整理―ヨーロッパ篇」

その後、横須賀の安針塚(国指定史跡・三浦安針墓)、テイボディエ邸等を巡見した。

○二三年二月四日～二二日に、原田亜希子がイタリア・ローマでの史料調査を行った。

○二三年二月二一日、「英語によるオンライン・プレゼンテーション講習会」を開催した。

○二三年三月三日科研費学術変革領域研究(A) 20H05827との共催で、国際ワークショップ “Trade, Diplomacy and Capitulations in the Early Modern World” を開催した。大東敬典が報告“Trade, Consumption and Diplomacy in the Indian Ocean” を行った。

○二三年三月五日、京都府立大学において第七回研究会「オスマン帝国の外交」を開催した。ラインアップは下記の通り。

彭浩報告「Ortega, Negotiating Transcultural Relations in the Early Modern Mediterranean を読む」

松方冬子報告「Tabot, British-Ottoman Relations, 1661-1807 を読む」

木村可奈子報告「尾高晋己『オスマン外交のヨーロッパ化』を読む」

さらに、岡本隆司が条約検討会に向けての問題提起を行った。

○二三年三月一日～二二日に川口洋史が、オランダのライデン大学図書館に出張し、一八世紀末から一九世紀初頭にシヤム(タイ) 宮廷の高官がバタヴィアのオランダ領東インド総督に宛てた漢語の書簡群を調査した。

○さらに、ウェブサイトのレスポンスシブ化、及び試みとしてパワーポイントのスライドに用いるキャラクターのデザインを行った。

本研究については、以下のウェブサイトを参照されたい。

http://www.hi.u-tokyo.ac.jp/personal/fuyuko/kaken/gaikou_sekaiishi.html

断片的史料情報の集積と歴史知識情報の相互参照体制の確立による新たな史料学構築研究

一、研究種目 基盤研究(A)

二、課題番号 二一H〇四三五六

三、研究期間 二〇二一年度～二〇二五年度

四、研究経費 直接経費一一四〇万円、間接経費三四二万円
繰越額一〇〇万円

五、研究組織
研究代表者 西田友広

研究分担者 井上 聡・堀川康史・山田太造・中村 覚(以上東京大学史料編纂所)・貫井裕恵・三輪真嗣(以上神奈川県立金沢文庫)・佐藤雄基(立教大学)・高田智和(国立国語研究所)・高橋悠介(慶応義塾大学)・深川大路(同志社大学)・守田逸人(香川大学)

六、研究の概要
(1) 研究の目的

本研究は、古文書学にもとづく史料批判の対象から漏れてきた、断片的史料・逸失史料をあまねく学術資源化することで、中世史料学を根本的に見つめなおすことを目的としている。これまでも断簡・破損汚損文書・無年号文書といった多様な形態をとる史料が、古文書学的検討の対象から外れてしまふことへの批判はあったが、それらを積極的に活用するための具体的方策・提案は提出されずにきた。本研究では、隣接諸科学を含めたあらゆる方法論を援用することで、かつ情報化されたデータ群をあまねく参照しうる環境を整備することで、こうした史料の持つ可能性を徹底的に追究し、批判に足りうる有効な研究資源とすることを目指している。併せて、かつて確かに存在していた文書の痕跡を伝来史料から抽出・集約することで、残された文

書の背景に広がる浩瀚な史料世界の復元を目指すものである。残存史料が持つ情報を最大限有効化するとともに、残されることのなかった史料存在をあまり多く検出することによって見えてくる像を析出することで、従前の中世古文書研究の限界を突破し、新たな研究の地平を見出してゆく。

(2) 研究の実績

前年度にひきつづき、計画調査に記した4つの観点から研究を進めた。

①断片化した史料を対象とする調査情報の高度化研究では、史料の体裁情報・テキスト情報に関する構造化実験を進め、「史料情報統合管理システム」を介することで、さまざまな情報と汎用的に連携しうる環境の整備に着手した。

②蓄積された知識情報の参照によるテキスト解析の高度化研究においては、前年度に引き続き、人名・地名を中心に史料編纂所歴史情報処理システム内のデータベース群から抽出・蓄積をすすめ、AIをもちいたデータ参照・解析を可能とする環境整備を推進した。

③中世逸失史料情報の復元研究では、前年度から継続して『鎌倉遺文』『南北朝遺文』を対象として、史料テキスト上に引用される逸失史料の情報検出・蓄積に努めた。なお『南北朝遺文』（九州編・中国四国編・関東編の計20巻）については、史料編纂所歴史情報処理システムのうちにフルテキストデータベースを構築し、一般公開を見据えた調整を進めている。

④課題解決にむけた分業体制の確立と拠点機関間の連携研究では、前年度にリニユール公開を実現した神奈川県立金沢文庫国宝金沢文庫文書データベースにつき、その機能強化を進めると同時に、史料編纂所歴史情報処理システムとの連携性をさらに高めた。両研究機関をつなぐ研究基盤が安定化したことで、①から③に掲げる研究課題の効果的推進が実現しつつある。また研究者のみならず市民から注目も集めたことで、金沢文庫データベースのアクセス件数は飛躍的に拡大したところである。

神社所蔵文書・私家文書の一体把握による中近世賀茂別雷神社の総合的研究

一、研究種目 基盤研究(A)

- 二、課題番号 二二H〇〇〇一五
- 三、研究期間 二〇二二年度～二〇二六年度
- 四、研究経費 直接経費六〇〇万円、間接経費一八〇万円
- 五、研究組織

研究代表者 金子 拓

研究分担者 加瀬直弥（國學院大学）・野田泰三（京都橘大学）・藤本仁文（京都府立大学）・石津裕之（東京大学史料編纂所）

六、研究の概要

本研究は、中世から近世にかけての賀茂別雷神社（上賀茂神社、以下賀茂社と略記する）について、賀茂県主一族により構成される氏人物中により支えられるという宗教領主のなかでも特徴的な人員構成のもと、中近世を通じて膝下地域を支配した賀茂社の所領支配・収取制度の特質と歴史の変遷、および氏人たちにより運営された祭祀神事の実態と歴史の変遷、また神事を通じて明らかとなる信仰文化の特質、宗教領主が時代を通じて存続するために行った政治権力者との交渉・接触など、多様な側面から賀茂社の歴史の実態を明らかにすることにより、比較的長期にわたって存続した宗教領主を祭祀、政治、経済の面から総合的に明らかにするための研究の方法を構築するものである。

これを実現するために、賀茂社が所蔵する史料にとどまらず、同社を構成する氏人の家（社家）に伝わる史料を合わせ、総合的に調査・撮影およびそのデジタル化を行い、それらの目録を作成して、東京大学史料編纂所のデータベースから一体的に公開することにより、中近世における神社のなかでも稀にみる質と量を誇る賀茂社関係史料について、研究環境の基盤を構築する。本年度は、史料編纂所特定共同研究と合同で、賀茂別雷神社に三度出張し、賀茂別雷神社文書の撮影をおこなった。また、株式会社堀内カラーに賀茂別雷神社文書の撮影を委託し、デジタル画像の収集を進めた。

さらに、賀茂別雷神社に関わる重要な史料群である國學院大学所蔵「座田家文書」の研究利用促進のため、マイクロフィルムのデジタルスキャンをおこなった。

また学術専門職員二名を雇用し、史料編纂所データベースにおける賀茂別

雷神社文書の目録整備を進め、国会図書館所蔵「賀茂社記録」の目録作成をおこなった。加えて、賀茂別雷神社文書に含まれる武家文書の年次比定、および賀茂社氏人の花押画像の整理も進めている。

今年度は、特定共同研究との合同で、オンラインでの研究会を二回開催した。

荘園絵図調査・解析方法に関する総括的研究と汎用的な歴史地理情報への応用研究

- 一、研究種目 基盤研究(A)
- 二、課題番号 二二H〇〇〇一六
- 三、研究期間 二〇二二年度～二〇二六年度
- 四、研究経費 直接経費八三〇万円、間接経費二四九万円
- 五、研究組織

研究代表者 井上 聡

研究分担者

榎原雅治・藤原重雄・岡本 真・山田太造・菊地大樹・中村 覚(以上史料編纂所)・守田逸人(香川大学)・渡辺晃宏(奈良大学)・高田祐一(奈良文化財研究所)・関野 樹(国際日本文化研究センター)

六、研究の概要

(1) 研究の目的

本研究は、東京大学史料編纂所が『日本荘園絵図聚影』編纂事業のなかで蓄積した古代・中世絵図情報をもとに、絵図史料群の総体が、いかなる歴史的展開を遂げたのかを明確にすること、および総体としてどのような空間認識に規定されていたのかを究明することを目的としている。また近年関心の高まる環境史・災害史等からのアプローチも踏まえて、新たな調査・分析方法の創出・提示を行うこと、あわせてこれまでに収集した膨大な絵図関連情報を、ネットワーク環境のもとで学界共有の研究基盤とすることも目指している。

(2) 研究の実績

研究実施計画にもとづき、以下の三つの観点から研究を推進した。

① 荘園絵図調査・分析に関する新手法の提案と絵図群総体の展開過程に関する研究・荘園絵図研究の蓄積をふまえ、中世荘園絵図に共通する構図・空間認識を析出する目的のもと、典型的な絵図を選択し、原本調査ならびに現地調査を実践した。具体的には、大分県宇佐市の宇佐神宮関連絵図群、香川県善通寺市の善通寺伽藍竝寺領絵図などを対象とした。

② 蓄積された調査情報の保全・秩序化と史料編纂所歴史情報処理システム(SHIPS)内のデータベースを活用した発信・共有研究・荘園絵図研究の実践のなかで蓄積された歴史地理情報をより高度に、汎用的に活用するための第一段階として、SHIPS内にある「地理情報システム」の高度化にとりくんだ。関連して同システムと連携している「金石文拓本データベース」の更新に協力し、地理情報の汎用的運用の実践を進めた。

③ オープンデータ環境における絵図情報の発展的活用と新たな研究資源の創出研究・歴史地理情報を有する諸研究機関において、相互にデータ運用を実現することを目指し、双方向性確立にむけた具体的仕様にむけて、奈良文化財研究所ほか関連する自治体などと協議・検討を進めた。

明治太政官文書を対象とした分散所在史料群の復元的考察に基づく幕末維新史料学の構築

- 一、研究種目 基盤研究(B)
- 二、課題番号 一九H〇一三〇三
- 三、研究期間 二〇一九年度～二〇二二年度
- 四、研究経費 直接経費一三〇万円、間接経費三六万円
- 五、研究組織

研究代表者 箱石 大

研究分担者

村 和明(東京大学大学院人文社会系研究科・准教授)、宮間純一(中央大学文学部・教授)、水上たかね(東京大学史料編纂所・助教)

研究協力者

白石 烈(宮内庁書陵部編修課・主任研究官)、長坂良宏(国立公文書館・公文書専門官)、石田七奈子(東京大学史

料編纂所・学術専門職員)、柏原洋太(千葉県文書館・主事)、寺島宏貴(国立国語研究所共同利用推進センター・プロジェクト非常勤研究員)、高島晶彦(東京大学史料編纂所・技術専門職員)、佐藤大悟(青山学院大学附置青山学院史研究所・助手)、渋谷綾子(東京大学史料編纂所・特任助教)、天野真志(国立歴史民俗博物館研究部・准教授)

六、研究の概要

(1) 研究の目的(『所報』第五五号、一六七―一六八頁参照)

(2) 研究の計画・方法(『所報』第五五号、一六八頁参照)

(3) 二〇二二年度の研究実績

〔東京大学史料編纂所・国立公文書館・宮内庁が所蔵・管理する明治太政官文書の調査・研究〕

①東京大学史料編纂所所蔵「復古記原史料」の詳細目録データ二二七〇件を作成し、その内容分析を行なった。②国立公文書館所蔵「記録材料・御沙汰書御附昏之留」慶応四年六月分のデータ三〇二件の入力と、「復古記原史料」との比較検討を行なった。

〔前記以外の明治太政官文書及びその関連文書の調査・研究〕

分散所在する岩倉具視関係文書について、二〇二二年一〇月三日、海の見える杜美術館と連携し、東京大学史料編纂所のデータベースHi-CAT Plusより、同館所蔵「岩倉具視関係史料」の画像(Monochrome)をダウンロードし、同館所蔵「岩倉具視関係史料」のうち「功臣遺墨」(第三十一巻―第六十巻)の調査及びデジタル撮影を実施した。

〔研究成果の公開〕

①公開研究会「明治太政官文書の史料学」(オンライン開催、二〇二三年一月二八日)を開催した。報告内容は以下の通り。

箱石 大 研究概要説明

柏原洋太 「留守官文書」の来歴と機能について―国立公文書館所蔵分を

中心に―

白石 烈 岩倉具視関係史料(海の見える杜美術館所蔵)にみる署印と検印
宮間純一 三条美美関係文書にみる「明治太政官文書」

村 和明 復古記原史料中の旧朝廷関係文書の性格について

②東京大学史料編纂所研究成果報告二〇二二―七として『明治太政官文書を対象とした分散所在史料群の復元的考察に基づく幕末維新史料学の構築』JSPS科研費(課題番号一九H〇一三〇三)研究成果報告書(二〇二三年三月三十一日、A4版・一九三頁)を刊行した。内容は以下の通り。

研究の概要

〔研究報告〕

箱石 大 維新时期明治太政官文書の史料学

柏原洋太 留守官文書の来歴と機能について―国立公文書館所蔵分を中心
に―

佐藤大悟 国立公文書館所蔵「多聞櫓文書」のなかの「明治太政官文書」

白石 烈 京都御所由来の明治維新関係史料

白石 烈 岩倉具視関係史料(海の見える杜美術館所蔵)にみる署印と検印

宮間純一 三条美美関係文書にみる「明治太政官文書」

〔調査報告〕

石田七奈子 弁事役所の受領文書処理について―国立公文書館所蔵文書と
復古記原史料の比較から―

〔史料紹介〕

村 和明 「復古記」原史料中の近世朝廷文書について 議奏役所と天皇・非蔵人

皇・非蔵人

柏原洋太・佐藤大悟 東京大学史料編纂所所蔵「正院記録課書目」

③他に公表した研究成果は、以下の通りである。

〔論文・その他〕

村 和明 「近世朝廷の日記の世界―伝統と新展開」(福田千鶴・藤實久美

子編著『史料で読み解く日本史4 近世日記の世界』ミネルヴァ書房、

二〇二二年三月)

水上たかね 「明治二年の軍務官再編―本部・出張所体制と会計・艦船―」

〔日本史研究〕第七一八号、二〇二二年六月)

箱石 大「海の見える杜美術館所蔵「岩倉具視関係史料」画像のウェブ公開」(『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』第九九号、二〇二三年一月)

白石 烈「幕末政治史研究(中央政局分析) 入門」(『歴史評論』第八七五号、二〇二三年三月)

箱石 大「明治太政官文書の史料学的研究―現状と課題―」(『中央史学』第四六号、二〇二三年三月)

〔研究報告〕

箱石 大「明治太政官文書の史料学的研究―現状と課題―」(第四七回中央史学会大会シンポジウム「近代政治史研究の現在―明治太政官制研究から―」、オンライン開催、二〇二二年七月二日)

〔原本史料情報解析〕の方法による中世西国武家文書の研究と展開

一、研究種目 基盤研究(B)

二、課題番号 二〇H〇一三〇七

三、研究期間 二〇二〇年度～二〇二三年度

四、研究経費 直接経費三一〇万円、間接経費九三万円

五、研究組織

研究代表者 本郷恵子

研究分担者 木村直樹(長崎大学)・小瀬玄士・渋谷綾子・西田友広・

野村朋弘(京都芸術大学)・長谷川博史(鳥根大学)・畑山

周平・村井祐樹(幹事)

研究協力者 寺尾美保(学術専門職員)

六、研究の概要

本研究は二〇二五～一九年度に実施した、「島津家文書」の修理・研究を中心事業とする「原本史料情報解析による複合的史料研究の創成事業」において培った原本史料情報解析の方法を用いて、原本史料についての研究的側面をいっそう深めることを目的としている。中世の西国武家文書へと対象をひろげ、文字テキストの読解から史実を確定するだけでなく、数百年にわた

って伝来してきた原本史料の軌跡をさまざまな角度から検証し、史料の持つ豊かな情報を最大限あきらかにしようとするものである。

コロナ禍が収束に向かっているとの認識のもと、ようやく通常に近い調査・撮影等が可能となり、個人所蔵の史料の調査等も再開した。広島県三原市の①市所蔵村上文書②個人所蔵文書③仏通寺文書、同県市の個人所蔵文書、福岡県久留米市の①大善寺玉垂宮文書②隈文書③梅津文書④御船文書⑤小川区有文書⑥高良大社文書、同太宰府市の①九州国立博物館所蔵文書②小早川文書、長崎県長崎市の青方文書(長崎歴史文化博物館所蔵)、同平戸市の①松浦文書②相知文書、熊本県益城町所蔵文書、大分県竹田市歴史文化館所蔵文書、同臼杵市の安養寺文書、同佐伯市の個人所蔵文書、京都府京都市の清水寺文書、同大山崎町の個人所蔵文書、鹿児島県鹿児島市の①黎明館所蔵中世史料②谷山文書③霧島神宮文書④三角文書⑤柏原文書、山口県山口市の①山内首藤文書②冷泉文書③内藤文書(山口県文書館所蔵)等の調査・撮影を実施した。

また、「湯原家文書」九巻の解体・養生などの修理作業、中世史料原本の購入などを行った。湯原氏は戦国期出雲の住人で、毛利氏に臣従し、後に萩藩士となって幕末を迎えた一族である。関係文書が『萩藩閥閥録』に収載されているが、今般、これまで不明だった同家所伝の史料原本を発見した。永禄～天正期というわずか三〇年余りの短い期間に、二〇〇通を超える文書が集中的にのこっており、毛利輝元・吉川元春・小早川隆景という重要な人物が発した書状類が大半を占めるものである。内容が具体的かつ豊富で、戦国期における大名家と被官(小武士)との関係が明らかに示されている。使用されている料紙は楮紙・雁皮紙・米粉入り楮紙等、形態は縦紙・折紙・切紙・小切紙で、戦国期中国地方～畿内地方に典型的であり、総じて戦国期西国武家文書のサンプルとして最適な史料群ということが出来る。状態が悪かったので、借用して修理をほどこすとともに、内容の検討を進めている。

さらに、継続中の史料編纂所所蔵「島津家文書」のなかの「薩藩勝景百図」(薩摩藩内の名勝・旧跡を描く五巻の絵画史料)の解説テキストである「薩藩勝景百図考」の翻刻について、一応の完了をみた。今後、絵画との対照や校正作業を進めていく。

ほかに以下の原本史料を購入した。

①羽柴秀吉書状（一通・天正十年）

天正十年七月に、秀吉から毛利輝元に出されたもので、畿内静謐を輝元が祝ったことに応えたもの。料紙は雁皮紙。

②横浜茂勝書状（一通・天正十八年）

秀吉の弟秀長の直臣横浜茂勝が慶満なる人物に出した書状。秀長の容態が回復したので見舞いは不要と伝えているが、秀長は翌月死去する。料紙は米粉入り楮紙。

③近衛植家書状（一通・戦国期）

前関白近衛植家から近江甲賀の国人頼宮因幡守に出された書状。頼宮が植家に詠草を送り、和歌の添削を依頼していたことがわかる。料紙は雁皮紙。

④大村純忠・信顕連署書状（一通・戦国期）

キリシタン大名として著名な大村純忠とその息信顕の連署書状。純忠発給文書の原本は 現在一通しか確認されておらず、親子の連署状は本文書のみである。充所は欠けているが、一族内あるいは家中の人間に出されたものと考えられる。料紙は楮紙。

これらの史料については、撮影のうえ、内容・来歴等を検討して研究資源化を図る。

以上の活動を通じて、西国武家の権力構造や相互の連携状況等の分析を進めた。

近世書状史料群の研究と歴史情報資源化

- 一、研究種目 基盤研究(B)
 - 二、課題番号 二二H〇〇六九一
 - 三、研究期間 二〇二二年度～二〇二五年度
 - 四、研究経費 直接経費六三〇万円、間接経費一八九万円
 - 五、研究組織
- 研究代表者 松澤克行
研究分担者 荒木裕行（東京大学史料編纂所）／畑山周平（東京大学史

六、研究の概要

料編纂所）／山本一夫（東京大学史料編纂所）

本研究は、近世の主要な文書史料であり、大量に残されていないながら、相対的に利用されることが少ない書状について政治史的・史料学的研究を行い、十七世紀を中心とする近世史研究の進展を目指す。具体的には、東京大学史料編纂所に所蔵される島津家文書のうち、書状を中心とした文書を巻装した「御文書」と、公益財団法人陽明文庫が所蔵する近衛家文書など、群として伝来した近世の武家・公家の書状を、それらが属する史料群との関係に留意しながら政治史的・史料学的に研究する。また、「御文書」の近世部分のほか、未調査の書状史料群（個人コレクション）をデジタルデータ化し、画像のデータベース公開や目録作成・研究・紹介などの歴史情報資源化と研究を行い、学会・社会への提供を目指す。

今年度の実績は次の通りである。

①「島津家文書 御文書」（東京大学史料編纂所所蔵）のうち、近世分でデジタル化されていないもののデジタル撮影を行った。「島津家文書 御文書」は、第二番箱（S島津家文書4―1）から第四十八番箱（S島津家文書19―15）までの一八二巻が、デジタル撮影されていなかった。そこで、今年度は、そのうちの近世期のものについてデジタル撮影を行い、歴史情報資源化に向けた作業を行った。具体的には、「御文書 家久公九 卷十四（三十三通）」（S島津家文書5―9）から「御文書御添書（二十一通）」（S島津家文書18―12）までの一四一巻（四三四四カット）について、一億五〇〇〇万画素の高精細デジタル撮影を行った。

②「島津家文書 御文書」と密接な関係のある『旧記雑録』に収録されている文書一九〇八点について、史料研究に向けた目録データ化作業を行った。

③都城島津邸、山口県文書館・広島県立文書館、鳥取県立博物館に出張し、都城島津家伝来史料・毛利家文庫史料など近世史料の調査を行った。

④来年度、デジタル撮影による史料蒐集と歴史情報資源化事業を行う予定である、個人所蔵文書群の事前調査を行った。

なお、研究代表者・研究分担者による主な研究論文等は以下の通りである。
①松澤克行「徳川家康と天皇」堀新他編『家康徹底解説 ここまでわかった

本当の姿」令和五年二月

②荒木裕行「幕藩関係―幕府と藩はどのように政治交渉していたのか―」岩城卓二他編『論点・日本史学』ミネルヴァ書房、令和四年八月

③荒木裕行「ペリー来航時の江戸飯米確保策」『古文書研究』九十四、令和四年二月

④山本一夫「萩藩の越荷方と地域経済」『ヒストリア』二九三、令和四年八月

⑤山本一夫「米切手による年貢代納―萩藩を事例に―」『東京大学史料編纂所研究紀要』三十三号、令和五年三月

日本近世史料学の再構築―基幹史料集の多角的利用環境形成と社会連携を通じて

一、研究種目 基盤研究(B)

二、課題番号 二二H〇〇六九二

三、研究機関 二〇二二年度～二〇二四年度

四、研究経費 直接経費四九〇万円、間接経費一四七万円

五、研究組織

研究代表者 杉本史子

研究分担者 母利美和(京都女子大学)・稲葉継陽(熊本大学)・鶴田

啓・箱石 大・林 晃弘・中村 覚・立石 了(以上東京

大学史料編纂所)

研究協力者 山田太造(東京大学史料編纂所)・渡辺恒一(彦根城博物

館)・林 大樹・菊地智博・高垣亜矢・黒滝香奈・岡島

翔・竹澤 翔(以上東京大学史料編纂所学術専門職員)

六、研究の概要

(一) 研究の目的

古文書学が権利文書の真偽判定と切り離せないかたちで形成されてきた西
欧諸国に対し、日本においては、近代的古文書学の構築が、近代国家をはじ
めとする公私の史料編纂と一体不可分のかたちでなされ、発展してきた。こ

こでいう史料編纂とは、史料の収集と解析の上で研究活用可能な状態に整え
た史料集の刊行に至る、一連の過程のことである。近代日本の史料編纂事業
では、史料の収集・解析作業、及び研究活用に資する史料集としての版面校
正作業などを通じて、史料そのものの緻密な分析が行われ、その知見が経験
知という形で膨大かつ精緻に蓄積されてきた。しかしそれが体系化されて、
学会・社会に示されたことはなかった。

また、近世古文書学構築における固有の困難さとして、古代国家がまがり
なりにも公式様文書の体系に依拠し、中世以降武家様文書が登場していくと
いう、古代・中世の古文書学の見方では、近世の、質的にも身分的にも拡大
し多様化した史料を体系化できない点があげられる。

本研究の基軸にすえるのは「近世史編纂支援データベース」の拡充・発展
である。このデータベースは、第一に文書の作成主体と文書蓄積との関係に
ついての史料学・アーカイブズ研究成果をふまえ、第二に多様な刊行史料
集の特性を十分考慮しながら、日本近世史の基幹的史料集について効果的に
検索できることをめざし開発されたものであり、これ自身が研究成果の結実
といえる。本研究においては、次の視点から、この研究成果を次の段階へと
深化・発展させることを企図している。紙媒体の史料集は、その編纂者が掲
載内容を「選択」し、史料名称・掲載順序・掲載体裁の整理・決定といった
一連のモノ化のプロセスによって「構成」したものであり、史料集はその編
纂者の史料理解を示したものである。一方で、「選択」されなかった史料
情報が必然的に生じてしまうことや、編纂者による「構成」以外の視点での
史料検討が難しくなってしまう側面がある。そのような紙の史料集の内容を
デジタルデータとすることで、この「選択」の限界を打ち破り、「構成」に
規定されたものを超えた多角的・複眼的な情報をそこに付加することができ
る。本研究では、このレベルを実現したうえで、研究・討論・再解釈化を
行う。この過程では、紙媒体の史料集の「選択」「構成」の再解釈も図られ
る。すなわち、本研究では、単なるデジタル化ではなく、紙史料集とデジタ
ル化されたデータのふたつを両輪のように動かしていくことにより史料研究
を深化することを目指していく。本研究でのデジタルライゼーションとは、こ
の研究過程全体を指す。

具体的には、①データベースの整備と歴史資料のデジタル公開を通じたデジタルイノベーションによる史料研究、②史料所蔵機関と連携を強化していくことによる社会連携、③研究成果を発信するシンポジウムや公開研究会の開催による研究交流、の三つの柱を立てて研究を進める。本研究では、これらの作業を通じて、近世史研究全体に共通する研究基盤としての近世史科学の整備・提供を目指す。

(二) 研究の実績

本年度は、前述の三つの柱について下記の活動を行った。

- ① 学術専門職員の協力を得て、『大日本維新史料 類纂之部 井伊家史料』八〇十・十四巻の索引データを作成して近世史編纂支援データベース索引型に六九一八件のデータ登録・修正・公開を行ったうえ、『井伊家史料』十一・十二・十五・二十巻についても索引データの作成を進めた。さらに、『井伊家史料』未刊行原稿について三八一件のデジタルデータ化を行った。また、『大日本近世史料 細川家史料』一八の本文データ作成を業者に依頼したうえで近世史編纂支援データベース本文型へ登録し、二〇二三年一月から公開開始(所外環境)した。
- ② 学術専門職員の協力により、永青文庫所蔵史料を本所データベースより公開するための準備作業としてデータベース登録用目録の作成を進めた。
- ③ 二〇二二年一〇月一日に『井伊家史料』完結記念国際研究集会「幕末維新史研究と井伊家史料」(主催:史料編纂所)をオンラインにて開催し、一三八名もの参加者を得たほか、同年二月一七日開催の国際研究集会「維新史料研究と国際発信」(主催:史料編纂所・維新史料研究国際ハブ拠点形成プロジェクト)を共催し、開催準備に協力した。また、本研究のメンバーおよびゲストメンバーにより構成されるデジタルライジング研究会(デジ研)を四回開催し、デジタル技術やその課題といった知見を共有して、本研究で行っていくデータベース改修の方向性を協議した。このデジ研での報告を契機として、分担者・中村覚は、明治維新史学会例会やNDLデジタルライブラリーカフェにて研究報告をかさね、「幕末維新史料・横断検索システム」を構築・公開した。

最後に、本研究の成果として発表されたものを示す。

○書籍

- ・杉本史子『絵図の史学―「国土」・海洋認識と近世社会』、名古屋大学出版会、二〇二二年
- ・稲葉継陽・清水克行共編『村と民衆の戦国時代史―藤木久志の歴史学―』、勉誠出版、二〇二二年
- ・熊本大学永青文庫研究センター編『永青文庫叢書細川家文書災害史料編』、吉川弘文館、二〇二三年

○論文

- ・杉本史子「書評と紹介米家志乃布著『近世蝦夷地の地域情報―日本北方地図史再考』」、『日本歴史』八九七、二〇二三年
 - 学会発表
 - ・中村覚「OCRテキストを用いた幕末維新史料・横断検索システムの開発」(明治維新史学会例会、二〇二二年一〇月二九日)
 - ・林晃弘「近世前期における熊本藩の真宗統制」(第七十二回佛教史學會學術大會、二〇二二年一月六日)
 - ・中村覚「東京大学史料編纂所出版物を用いたNDLOCRの応用事例紹介」(二〇二二年度NDLデジタルライブラリーカフェ、二〇二三年一月一八日)
 - ・箱石大「OCRテキスト横断検索システムへの期待と今後の幕末維新史研究」(二〇二二年度NDLデジタルライブラリーカフェ、二〇二三年一月一八日)
 - データベース
 - ・中村覚「幕末維新史料・横断検索システム」(<https://isnrlab.h.u-tokyo.ac.jp/>)
- ## 一四世紀日本における紛争解決過程の変容に関する実証的研究
- 一、研究種目 基盤研究(C)(一般)
 - 二、課題番号 一六K〇三二五七
 - 三、研究期間 二〇一六年度～二〇二二年度(繰越)
 - 四、研究経費 (前年度より繰越)

五、研究組織

研究代表者 渡邊正男

六、研究の概要

裁判前後の地域社会の状況、裁判外の利害関係者・周辺地域社会の動向をも含む、紛争解決過程全体の具体的解明によって、非局所的法に基づく裁判が地域社会の日常的秩序形成・維持構造において果たした役割の変化、非局所的法と日常の行動規範との関連性の変化、すなわち、一四世紀日本における紛争解決過程の変容を実証的に明らかにすることが本研究の目的である。

新型コロナウイルス感染症拡大による繰り越しを経て最終年度となった今年度は、これまでに行った、一三世紀後半から一四世紀を対象とした非局所的法に関連する史料の収集、事例の集積及び個別の検討を踏まえて、これらの事例相互間の比較検討に加えて、類似の事案でありながら法の適用が求められない事例、さらに、一三世紀末から一四世紀初頭の「徳政令」「神領興行法」等の事例との比較も行い、この間の変容について検討を行った。

今年度も関連史料の補充調査及び史料編纂所未調査史料の調査として、神宮文庫・岩瀬文庫・三重県総合博物館等において史料の調査・撮影を行った。撮影史料のうち、所蔵者の許可を得られたものについては、史料編纂所のデータベースを介して順次公開される予定である。また、未紹介の重要史料については、引き続き個別に史料紹介を行いたい。

中世後期日明関係の人的基盤の研究―「初渡集」「再渡集」を中心に―

一、研究種目 基盤研究(C)

二、課題番号 一七K〇三〇五八

三、研究期間 二〇一七年度～二〇二二年度

四、研究経費 (二〇二〇年度より期間延長)

五、研究組織

研究代表者 須田牧子

研究分担者 岡本 真・山崎 岳(奈良大学)

六、研究の概要

本研究の目的は、第一に一六世紀の遣明船の副使・正使を務めた禅僧・策

彦周良の旅日記「初渡集」「再渡集」を精読し、そこに登場する約四〇〇人の人物像を検討し、中世社会のなかでどのような立場にある人間がいかなる形で遣明船派遣事業に関与していたかを解明すること、第二に日記の筆者である策彦の履歴、特に帰国後の実績を復元し、彼が海外経験をいかに自らの価値としていたのかを追究することにある。そのための具体的な研究活動は下記の三つの柱で構成される。①「再渡集」の精読・策彦周良が正使を務めた時の日記である「再渡集」の講読会を行って精読し、翻刻と訳注を作成する。②「初渡集」「再渡集」の登場人物の研究・上記「再渡集」と、策彦周良が副使を務めた時の日記である「初渡集」の登場人物リストを作成し、彼らに関わる日本側史料を探索し、人物像とその国内社会における地位を明らかにすることを通じ、遣明船経営を支えた人的基盤の分析を行う。③策彦周良関係史料の収集・策彦周良自身の履歴の復元をめざし、史料を収集する。

今年度においては、「再渡集」の訳注原稿をとりまとめ、『訳注『再渡集』(稿)』と題して東京大学史料編纂所研究成果報告書シリーズの一冊として刊行した。「再渡集」の翻刻・読み下しと注釈・現代語訳に、解説・人名索引・参考史料を付したもので、A4版、全三五〇頁からなる。本研究課題の主たる研究成果は概ね本報告書に盛り込んだ。

漢籍書き入れの日本中世史料としての活用をめぐる研究

一、研究種目 基盤研究(C)

二、課題番号 一七K〇三〇六〇

三、研究期間 二〇一七年度～二〇二二年度

四、研究経費 (前年度より繰越)

五、研究組織

研究代表者 川本慎自

六、研究の概要

本研究は、日本国内に現存する漢籍に記された書き入れについて、とくに中世の漢籍講義や注釈活動に遡るものに着目し、そこに含まれる広範な知識

の内容を検討するとともに、そのあり方を史料学的に位置づけることによって、中国文学や日本文学の分野にとどまらず、日本中世史研究の史料として活用する方法を確立しようとするものである。

本年度の研究においては、前年度までに引き続き、寺院・史料所蔵機関において漢籍等を含む広範な史料の調査を行い、中世に遡り得る漢籍書き入れの有無を確認した。具体的には、前年度に引き続き埼玉県に所在する禪宗寺院について調査を行い、とくに近世初期の版本への書き入れや写本作成の状況の検討を行った。また、京都・仁和寺に架蔵される漢籍・禪籍についての調査も行った。

また、これらの調査を踏まえて、漢籍から得られる知識についての研究を行った。本年は、禅僧の漢籍をめぐる講述活動のなかでも、とくに室町期の相国寺周辺で見られた唐物「鄴瓦硯」に関する言説を検討し、それが北山殿（金閣）を漢・建章宮と重ね合わせる認識を支える文物の一つとなっていることを考察した。また、仁和寺所蔵史料のなかに、「四十九院」と呼ばれる石造物への梵字書き入れをめぐる戦国期東国の曹洞宗と真言宗との間で宗論があったことを示す史料があることを検討し、その史料紹介を行った。なお、コロナ等による史料調査の遅れが生じたため、所定の手続きを行って研究期間を延長し、次年度に引き続き調査を行うこととした。

近世大名家臣史料の共同分析―多久家史料の読み直しを中心として―

- 一、研究種目 基盤研究(C)
- 二、課題番号 一七K〇三〇九五
- 三、研究期間 二〇一七年度～二〇二二年度
- 四、研究経費 延長による前年度からの繰越予算八六万一千五百円
- 五、研究組織

研究代表者 小宮木代良
研究分担者 及川 亘、石津裕之
研究協力者 佐藤孝之（東京大学名誉教授）、大平直子（佐賀市文化財課）、志佐喜栄（多久市郷土資料館）、清水雅代（佐賀県立

図書館）、田久保佳寛（小城市教育委員会）、藤井祐介（佐賀県立佐賀城本丸歴史館）、本多美穂（佐賀県立図書館）、松田和子（佐賀県立図書館）

六、研究の概要

本研究は、佐賀藩家臣多久家文書の共同研究（東京大学史料編纂所共同利用・共同研究拠点における特定共同研究経費二〇一四年度～二〇一七年度）が終了するにあたり、それを継承発展させていくことを目的として、当該共同研究の最終年度にあたる二〇一七年度から開始された。研究会では、メンバー〇～一一名（研究代表者・研究分担者・研究協力者）であらかじめ分担しておいた個別史料一点ずつの年次比定・人物比定・解釈等について、事前に *teanfile* 上での検討結果を共有しておき、原本史料もしくは、精細画像を前にした研究会の場で集中的な共同分析を行うことを継続してきた。二〇二二年度は、二〇二一年度に引き続き、延長を含む五年間の間に読み合わせを進めてきた約七〇〇通の成果を報告書にまとめるために、体例を統一しつつ、全点について史料本文と年次比定を中心とした一点毎の解説を全参加者により確認する作業を進めた。読み合わせのための研究会は、コロナ禍のため、Zoomにより設定し、期日の二週間前までに *Word* の *file* 形式で *teanfile* へ各自の分担分をあげておき、*Word* の校閲機能により、相互の修正意見を書き込み、研究会当日に最終的に確定させていった。研究会は、四月九日・五月一日・六月一日・七月九日・八月三日・八月二〇日～二二日の延べ七日間行った。このうち、最後の二日間のみは、対面形式による研究会とした。その結果、研究成果の報告書として、『多久家文書の「読みなおし」』（多久家文書研究会編、東京大学史料編纂所研究成果報告二〇二二―一、二〇二二年一月）をまとめることができた。同報告書には多久家文書七四六通とともに、人名一覧、鍋島勝茂花押一覧、解題、論説等を収めた。

高精細デジタル画像解析による幕末明治初期ガラス原板の史料学研究

- 一、研究種目 基盤研究(C)

二、課題番号 一九K〇〇九三四

三、研究期間 二〇一九年度～二〇二三年度

(二〇二二・二〇二三年度は補助事業期間延長による)

四、研究経費 直接経費二七二万円(繰越経費)、間接経費〇万円

五、研究組織

研究代表者 谷 昭佳

研究分担者 箱石 大・保谷 徹

六、研究の概要

前年度までと同様にコロナウィルスの感染拡大の影響を受けつつも、年度前半から国内での幕末明治初期写真史料の調査研究を順次推し進めた。また年度後半には、当初二〇一九年度に計画していたが、実施が困難な状況となっていた海外所在の日本関係古写真史料の現地調査について、可能なものから調査を再開した。主な調査研究と成果の公表は、以下であった。

①彩色写真技法「写真油絵」の復元調査…横山松三郎の弟子の小豆澤亮一が明治一八年(一八八五)に特許を取得し、僅か数年間だけ用いられた日本独自の技法である「写真油絵」の復元に取り組んだ。小豆澤が申請した特許には、二種類の「写真油絵」技法があり、いずれも画像層の裏から油絵具で彩色することにより、変色の無い高い保存性と表現性を謳っていた技法である。しかし、現存する制作から約一四〇年を過ぎた「写真油絵」にはひび割れなどの劣化が目立ち、保存修理法の確立が急がれている状況にある。そこで、日本の伝統的な文化財修理を行う京都の修復工房の協力を得て、制作工程と作品の復元を試みた。工程を再現した成果は、二〇二二年九月にイタリアで開催された国際カンファレンス“Colour Photography and Film, 2nd edition”にて研究代表者・谷が報告し、研究成果を公表した。

②木村芥舟関係写真資料調査…幕末期に幕府の要職を歴任した木村芥舟関係写真資料(横浜開港資料館所蔵)について、二〇二二年一月に高精細デジタル撮影(一三〇カット)を中心とする調査研究を行った。

③本山家伝来古写真調査…長崎本石灰町乙名であった本山家伝来の古写真資料群(東京大学史料編纂所寄託)の調査および撮影・目録整備(写真一〇一点、関連附属品四件五点)を行った。調査で得られた知見および目録と画

像(サムネイル)は、研究代表者・谷が、「長崎本石灰町乙名・本山家伝来古写真史料の概要」(『長崎学』長崎市長崎学研究所紀要第七号、六六～九三頁、長崎市、二〇二三年三月三十一日)にまとめ、広く一般に公表した。

④イタリア所在日本関係古写真調査…二〇二二年九月に、ローマ市内にある文明博物館およびフィレンツェ市内にある軍事地理研究所にて、一八六六年来日のイタリア遣日使節団関係写真について調査および画像収集(二六〇カット)を行った。成果の一部は、研究代表者・谷により「海外所在日本関係古写真史料の調査研究の概要―在イタリア、在オランダを中心に―」(東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター・東京大学史料編纂所古写真研究プロジェクト・JSPS科研費(P19K00934)共催『国際研究集会「海外所在日本関係古写真の史料学研究」』)のなかで報告し、研究の展開について公表した。

日本中世古記録・文献史料の史料学的研究による朝廷制度史・政治史の考察

一、研究種目 基礎研究(C)

二、課題番号 二〇K〇〇九三三

三、研究期間 二〇二〇年度～二〇二四年度

四、研究経費 直接経費五〇万円、間接経費一五万円

五、研究組織

研究代表者 遠藤珠紀

六、研究の概要

本研究課題は、鎌倉期から室町期を中心に、古記録の収集及び総体的な検討を行い、トータルな形で中世朝廷における情報の流れや政務運営システムの検討を試みるものである。その遂行のため本研究課題の研究計画は大きく二つの柱をたてた。まず古記録の所在(原本・写本の所在)を調査し、特に重要なものは史料の性格を明らかにし、翻刻・フルテキストデータベース作成などの歴史情報資源化を行うこと。二つ目として、これらの知見を生かして当該期の政治史・制度史等の考察を行うことである。

本年度は、国立歴史民俗博物館・早稲田大学・公益財団法人陽明文庫など

に赴き調査を行った。各調査先には、ご高配を賜り感謝する。これらにより早稲田大学図書館所蔵『宣教卿記』紙背文書、国立歴史民俗博物館所蔵『綱光公記』などの翻刻、紹介を行った。

史料調査を踏まえた政治史的検討としては以下のものなどがある。新出の『明月記』断簡を検討し、承久の乱直後の公武関係を検討した(「北条政子危篤の報と公家社会」『書物学』二〇、二〇二二年)。公益財団法人陽明文庫所蔵史料に、従来別の写しで知られていた文書の案文があることを見出し、豊臣秀吉の唐入り構想につき検討した(「新たな山中長俊書状写と豊臣秀吉の『唐入り』構想」『古文書研究』九三、二〇二二年)。

公家法・公家家法・寺社法を中心とした中世法制史料の高度研究資源化

- 一、研究種目 基盤研究(C)
- 二、課題番号 二〇K〇〇九五六
- 三、研究期間 二〇二二年度～二〇二五年度(二三年度まで延長)
- 四、研究経費 直接経費七〇万円、間接経費二二万円
- 五、研究組織

研究代表者 前川祐一郎

研究協力者 遠藤基郎・西田友広・本郷恵子

六、研究の概要

本研究は、佐藤進一他編『中世法制史料集』全七巻(岩波書店)のいわば増補版に相当するものを、本所のデータベースシステム上で作成し、日本中世の法制史料を高度研究資源化することを第一の目的としている。同時に、その高度化の試みの過程で、関連づけるべき史料は何かという問いかけを通して、日本中世の法制史料という史料のあり方や性格そのものを捉え直すことを、もう一つの研究目的としている。校正作業のうち、データベースとしての公開が実現すれば、文字列検索や関連史料との相互参照による研究上の同書の活用が格段に向上し、学界における今後の研究の進展に大きく寄与することが期待される。

本年度は、本所データベースシステム登録のための改修の必要性などの問

題が浮上したため、データベースの校正と公開は延期せざるをえなかった。また、新型コロナウイルス感染症の影響から史料調査を十分に実施できなかったが、本所と奈良文化財研究所合同の薬師寺の史料調査に参加し、近世・近代にいたる同寺史料について知見を得ることができた。

一方、法制史料の高度研究資源化を通じた、日本中世における法制史料のあり方の再検討の一つとして、前年度につづき、武家家法(戦国法)に関する研究をすすめた。その成果として、武家家法(戦国法)・室町幕府法などに関する既発表の論文に二本の新稿(戦国大名伊達氏の分国法「塵芥集」に関する論文と、中世から近世初期にかけての盗品法に関する論文)を加え、論文集『室町戦国法史論』として刊行する準備をすすめ、科学研究費補助金研究成果公開促進費(学術図書)に応募した。

なお、本研究は本年度が最終年度であったが、右の進捗状況に鑑み、二〇二三年度まで補助事業期間延長を申請し承認された。

東アジア墓葬文化の伝播と展開―金石文資料の形態的分析を中心に―

- 一、研究種目 基盤研究(C)
- 二、課題番号 二二K〇〇八三七
- 三、研究期間 二〇二二年度～二〇二五年度
- 四、研究経費 直接経費九〇万円、間接経費二七万円
- 五、研究組織

研究代表者 稲田奈津子

六、研究の概要

本研究は墓誌・買地券といった金石文資料を中心に、その形態的特徴に注目しつつ、墓葬文化の東アジア世界への伝播と受容・変容の過程について考察するものである。

本年度は、比較的点数が限られる買地券の検討に注力することとし、各所蔵機関の協力のもと、研究協力者と共同で、五月に九州国立博物館における宮ノ本遺跡出土買地券の調査・撮影と出土地踏査(福岡県太宰府市)、六月に倉敷考古館における矢田部益足買地券の調査・撮影と出土地踏査(岡山県

倉敷市)、一月に東谷博物館(韓国全羅南道光州広域市)における兎山郡買地券の調査を実施した。また近郊の所蔵機関における調査も随時実施した。中国の事例については王海燕氏・榊佳子氏とともに検討を重ね、関連する科研究学会において稲田「新出高麗買地券の紹介と釈読」・王「浙江・江蘇両省の買地券事例の紹介と釈読」と題した研究報告をおこない、関係諸分野の研究者からの教示を得た。また成果の一部は東京大学ヒューマニティーズセンター第六九回オープンセミナー「黄泉の国との契約書―東アジアの買地券―」において、王「中国の買地券―呉越地域の事例を中心に―」・稲田「朝鮮と日本の買地券」と題して報告し、国内外の研究者や学生・一般市民など一八名にのぼる参加者を得ることができた。最終的な成果は、稲田・王・榊編著『黄泉の国との契約書―東アジアの買地券―』にまとめ、三月に出版した。

そのほか、古代日本における東アジア世界との文物交流をめぐり、「国際都市平城京」を執筆するとともに、内容を増補して「平城京の国際性」と題する講演をおこなった。また国際学術会議における広開土王碑や韓国木簡をめぐる研究報告に対するコメントもおこなった。

徳川政権による公儀の確立と城郭建設―無年号文書から公儀普請を読み解く―

- 一、研究種目 基盤研究(C)
- 二、課題番号 二二K〇〇八七二
- 三、研究期間 二〇二二年度～二〇二四年度
- 四、研究経費 直接経費一三〇万円、間接経費三九万円
- 五、研究組織

研究代表者 及川 亘
研究協力者 宮脇 啓(東京大学大学院人文社会系研究科博士課程・学術専門職員)

六、研究の概要

(1) 研究の目的

本研究は、徳川家康・秀忠・家光が諸大名を動員して実施した公儀普請による城郭建設に関連する慶長・元和・寛永期の無年号文書の研究資源化を通じて、個別の城郭建設の具体的な経過における諸大名の対応、大名相互の関係について新知見を得るとともに、それぞれの城郭建設を相互に関連するものとして政治・社会史の文脈上に位置づけ、徳川政権が自らの公儀を確立する過程における公儀普請の実態と意義を解明することを目的とする。

(2) 研究の実績

本年度は本研究に先行して実施した基盤研究B「近世統一政権の成立と天下普請の展開―中近世移行期史料の研究資源化を通じて―」(一七H〇二三八二、研究代表者・及川亘、二〇一七～二〇二一年度)によって『大日本古文書』・『大日本近世史料』等から抽出した公儀普請関係史料リストのうち、「吉川家文書」・「小早川家文書」・「益田家文書」の分を対象として、無年号文書の年次比定等についてリストの点検を行った。また佐賀藩重臣家に伝わった「坊所鍋島家文書」(佐賀県立図書館所蔵)について、原本調査を行い、史料画像から佐賀藩祖鍋島直茂・同初代藩主鍋島勝茂等の花押・印章画像の切り出しを行った。これらの作業には研究協力者の協力を仰いだ。そして上記作業の成果も利用して、以下の論文を発表した。

先ず「公儀御普請―現場監督する大名―」(『城郭史研究』四一号、二〇二二年二月)は、慶長・元和期に江戸幕府が諸大名に軍役として賦課した公儀普請(城郭建設)について、大名本人の出役状況を大名書状などの一次史料により分析したもので、軍役としての公儀普請における大名本人出役の原則を明らかにするとともに、普請現地における大名相互、または大名と幕府普請奉行の人的関係や、公儀普請における軍役と夫役の関係についても関説した。公儀普請における大名本人の出役は従来あまり注目されてこなかった視点であるが、幕府が大名に賦課する公儀普請の本質に関わる論点として意義がある。

次に「鍋島勝茂の居所と行動について」(『多久家文書の「読みなおし」』、二〇二二年一月)では、佐賀藩初代藩主鍋島勝茂の全生涯にわたる動静をできる限り一次史料に基づいて跡付けた。公儀普請の一方の主役である大名の居所と行動の確定は、当該期の関連史料(特に書状などの無年号文書)を

分析する上でも不可欠の作業である。

預人の政治史的分析による近世中期幕藩国家政治構造の研究

- 一、研究種目 基盤研究(C)
- 二、課題番号 二二K〇〇八九一
- 三、研究機関 二〇二二年度～二〇二四年度
- 四、研究経費 直接経費六〇万円、間接経費一八万円
- 五、研究組織
- 研究代表者 荒木裕行
- 六、研究の概要

近世政治史研究においては、近世日本は強大な権力を持つ幕府を中心とした中央集権的性格が強かったのか、もしくは自立的な政治権力である藩の連合体としての性格が強かったのかという問題が重要なテーマとして分析されてきた。この問題は換言すると、幕府と藩とがどのような関係にあったのかということになる。本研究はこの問題について、幕藩国家の政治構造が確立した一七世紀末から一八世紀初頭の時期を対象として分析することを目指している。右の目的を達成するため、弘前藩の預人をめぐる、幕府と藩、藩と藩の間で行われた政治交渉を取り扱う。預人は幕府から処罰され、藩に預けられていた人物であり、それに関わる幕府と藩との交渉、赦免後の預人が弘前藩において果たした政治的役割を解明する。それによって近世中期の幕藩関係の構造を明らかにする。

二〇二二年度は、弘前藩の預人となっていた柳川調興について検討するため、対馬藩の藩日記（「江戸藩邸毎日記」東京大学史料編纂所蔵「宗家史料」）を主に分析した。

足利義満期武家政治史の研究―義満の権力確立過程の再検討を中心に―

- 一、研究種目 若手研究(B)
- 二、課題番号 一七K一三五二六

- 三、研究期間 二〇一七年度～二〇二二年度（期間延長）
- 四、研究経費 （前年度より繰り越し）
- 五、研究組織

研究代表者 堀川康史

六、研究の概要

最終年度にあたる本年度は、個別の調査を行う一方、研究成果の総括を旨として、「遠国」「地方」の視点から見た足利義満期の評価について、室町幕府支配体制の形成・展開過程のなかに位置づけながら検討を進めた。その成果の一端については、来年度の歴史学研究会大会報告「室町幕府支配体制の形成と展開」にて報告予定である。従来、幕府権力・將軍権力の最盛期・確立期と高く評価されてきた義満期を、九州・東国の「遠国」化が決定づけられた時期と位置づけ直し相対化したことは、本研究課題の最大の成果と考える。

・神奈川県立金沢文庫の特別展図録『法会への招待』に「紙背文書にみる室町幕府政治史のひとつま」を寄稿したほか、中世日本とマムルーク朝を比較する国際研究会にて「The Nanbokuchō War and Loyalty in an Age of War: The Struggle and Failure of Kyushu Deputy Imagawa Ryoshun, 1370-95」と題する口頭報告を行った（出版予定）。また、「室町幕府と全国秩序・中世後期の中央と地方の関係をどのように考えるか」と題する研究案内を寄稿した『論点・日本史学』（ミネルヴァ書房）、「吉田家日記」に関する二〇二〇年の報告を掲載した *Studies in Manuscript Cultures*, 三〇号がそれぞれ出版された。

・今後発表予定の成果として、昨年度報告した国際シンポジウム「海外の日本中世史研究・『日本史』・自国史・外国史の交差」の書籍化に共編者として携わることになり、英語圏における南北朝・十四世紀史研究の紹介のほか、外国語著作の書評を執筆した。また、中世の起請文・誓約に関する昨年度の口頭報告が現在印刷中である。このほか、本研究の成果も取り入れた、南北朝期の今川氏に関する論文の執筆を進めている。

近世における朝廷中枢による門跡統制の解明

- 一、研究種目 若手研究
- 二、課題番号 一九K一三三二九
- 三、研究期間 二〇一九年度～二〇二二年度
- 四、研究経費 (前年度より繰越)
- 五、研究組織

研究代表者 石津裕之

六、研究の概要

本研究の目的は、朝廷中枢が実施していた門跡（天皇家・親王家・摂家などの子弟が入寺する格式の高い寺院、もしくはその住職のこと）に対する統制の具体像を解明することにある。本来の研究期間は二〇二一年度までであったが、新型コロナウイルス感染症の流行により十分な研究遂行ができなかったため、二〇二二年度まで延長した。

近世の門跡に存在した格式（宮門跡、摂家門跡、准門跡）のうち、二〇二〇年度までは宮門跡を対象として肝煎や御世話人などについて考察し、二〇二一年度には摂家門跡にまで分析対象を広げたが、その過程で、近世後期の准門跡に御世話人がいたことが判明した。そこで、最終年度となる二〇二二年度には、その顔ぶれや役割について、主に公家の日記・記録から考察を加え、論文化の準備を進めた。

従来 幕末期の准門跡に御世話人がいたことは指摘されていたが、近世後期に存在していたことは知られておらず、したがってその様態も不明であった。かかる研究状況に対し、近世後期の実態解明を進めた二〇二二年度の研究成果は、近世の門跡研究や近世朝廷の職制研究の進展に寄与するものであると考える。なお、関連する研究成果として「書評 林大樹著『天皇近臣と近世の朝廷』」（『歴史学研究』一〇二二号、二〇二二年五月）を発表した。

平安時代後期政治構造の史料学的研究

- 一、研究種目 若手研究

- 二、課題番号 一九K一三三三〇
- 三、研究期間 二〇一九年度～二〇二三年度
- 四、研究経費 直接経費三〇万円、間接経費九万円
- 五、研究組織

研究代表者 黒須友里江

六、研究の概要

撰関政治と院政についてはその連続性がたびたび指摘されるが、両分野の研究状況の違いにより院政期研究の立場から論じられることが多かった。しかし、近年の研究の進展により撰関期の政治構造の詳細が明らかになっていくことを踏まえると、撰関政治から院政への移行について撰関期の側から改めて検討することが必要である。そこで障壁となるのが、藤原頼通・教通・師実の時期の史料が前後の時期に比べて少なくテキスト研究が充実していないという環境である。よって本研究では、当該期の古記録（具体的には『左経記』『春記』『水左記』）の写本調査により研究基盤を固めるとともに、それに基づき撰関政治から院政への政治構造の連続・変容の様相について検討する。

今年度は、『左経記』写本の調査を完了し、諸写本全体の分析結果を論文化した。「史料紹介 佐藤道生氏所蔵『左経記』断簡」（『古文書研究』九三）では、当該断簡が『左経記』古写本の一つ「守屋本」の欠失部分の一部であることを指摘した。また新写本には錯簡および脱文が存在しており、現在広く使用されている刊本『増補史料大成』の訂正が必要であることも指摘した。さらに古写本と新写本の関係について、守屋本は同じく古写本である九条本・谷森本とともに本来九条家所蔵の一具を成していたとされるが、比較的早く流出し新写本の祖本となった可能性が高いことを述べた。『左経記』諸写本に関する基礎的検討」（『東京大学史料編纂所研究紀要』三三）では、全国に存在する『左経記』新写本が内題・構成・体裁によって九群に分類できることを示し、あわせて四八写本の書誌をまとめた。さらに、新写本どうしで内容に大きな違いはないものの、古写本の体裁を維持していると思われる一群が存在し、テキスト研究においてはまず参照すべき写本であることを指摘した。

『水左記』については、二〇二二年度に引き続き若手研究「『水左記』註釈の作成による古代・中世移行期の研究」(課題番号二〇K一三一七八)の研究會に参加し(一二回)、その成果を磐下徹・久米舞子・宮川麻紀・堀井佳代子各氏との共著「『水左記』註釈(治暦元年正月〜四月)」(『人文研究 大阪公立大学大学院文学研究科紀要』七四)にまとめた。

IIIFとTEIを用いたオンライン翻刻支援システムの開発

- 一、研究種目 若手研究
- 二、課題番号 一九K二〇六二六
- 三、研究期間 二〇一九年度〜二〇二二年度(期間延長)
- 四、研究経費 (前年度より繰り越し)
- 五、研究組織
- 研究代表者 中村 覚
- 六、研究の概要

本研究の目的は、オンライン上で複数の利用者が協力して史料を翻刻可能なシステムを開発することである。特に、画像共有のための国際標準であるIIIFや、人文学資料向けの構造化ルールを定めるTEI等の国際規格に適合させることで、幅広い用途・国際的に活用可能なシステム構築を志向する。この目標を達成するために、オープンソースのデジタルコンテンツ管理システム「Onaka」及びその翻刻用のプラグインである「Scripta」を基盤とし、IIIF準拠の画像データを入力として、オンライン上で複数人が翻刻作業を行い、翻刻成果をTEI準拠形式でエクスポートできるシステムを構築した。加えて、国立国会図書館が提供するオープンソースのOCRソフトウェア「NDL OCR」や、人文学オープンデータ共同利用センターが公開するくずし字認識サービス「KuroNet」等のOCRソフトウェアを利用し、翻刻対象史料の下書きテキストを組み込む手順を実装した。

この成果として、画像と多様なテキストデータを関連付け、「源氏物語」の本文研究支援を目指すウェブサイト「デジタル源氏物語」を公開した。また、翻刻した『校異源氏物語』のテキストデータを公開する「校異源氏物語

テキストDB」、くずし字OCRと編集距離を活用し、テキストデータが類似する写本・版本の画像の推薦機能を提供する「デジタル源氏物語(AI画像検索版)」の公開も行った。

これらの取り組みが評価され、二〇二一年にデジタルアーカイブ学会から実践賞、二〇二二年に情報処理学会から山下記念研究賞を授与された。

日本中近世外交文書写本および外交文書集の史料学的研究

- 一、研究種目 若手研究
- 二、課題番号 二〇K一三一七二
- 三、研究期間 二〇二〇年度〜二〇二三年度
- 四、研究経費 直接経費八〇万円、間接経費二四万円
- 五、研究組織
- 研究代表者 岡本 真
- 六、研究の概要

本研究は、中近世に日本が諸外国とのあいだでやりとりした外交文書のうち、原本が今日所在不明で、写本の形でしか伝わっていないものや、複数の文書写本を収録した外交文書集を対象に、史料学的研究を実施するものである。具体的には、写本をできる限り幅広く調査・収集したうえで、同一の外交文書や外交文書集の諸写本同士を比較対校することにより、それらの史料の原態を可能な限り復原することをこころみる。そして、それによって、当該期の日本の対外関係史をあらたな視点から研究することを企図している。

三年目にあたる令和四年度には、主として三つのテーマについて、研究を推進した。ひとつめは、豊臣秀吉関係外交文書の諸写本の比較検討である。特に一五九二年の小琉球宛豊臣秀吉文書については、原本が所在不明で、漢文写本とスペイン語訳写本がいられているが、従来、写本間の位置づけが明らかでなかった。これについて本研究で検討をすすめ、使用言語においては前者の方が後者よりも原態に近いものの、内容においては、前者は草稿であり、後者の方がより最終版に近いと考えられるとの結論に至った。そして、このことを、一二月に台湾で開催された国際シンポジウムにおいて報告した。

ふたつめは、永楽五年五月二六日付足利義満宛明永楽帝勅論の写本の調査と検討である。同勅論についても原本は所在不明で、模刻の拓本や写本が複数伝来している。今年度には、他の研究課題と連携しつつ、そのうちのいくつかを調査し、従来知られていなかった特異な写本を見いだし、所在不明の原本を復元する手がかりを得るに至った。これに関しては、次年度も引き続き調査検討を実施し、成果を論文として公表することを計画している。

みつつめは、瑞溪周鳳撰『善隣国宝記』の諸写本の校異情報の電子テキスト化である。これに関しては、前年度にTEI (Text Encoding Initiative) のガイドラインに則した、テキスト構造化の国際標準に準拠したXMLデータとして蓄積する方針を定めた。この方針にもとづいた作業を、今年度も継続して実施した。

日本近世における政教関係の形成と確立

- 一、研究種目 若手研究
- 二、課題番号 二一K一三〇九〇
- 三、研究期間 二〇二一年度～二〇二四年度
- 四、研究経費 直接経費六〇万円、間接経費一八万円

五、研究組織

研究代表者 林 晃弘

六、研究の概要

近世の政治権力と仏教教団は、中世以前とは異なる新たな関係を形成する。本研究の目的はその過程を政治史的な背景を踏まえて明らかにすることである。二〇二二年度の実績について、(一)幕府と仏教教団の間における組織的関係の形成、(二)藩の寺院行政を組み込んだ分析の二つの面から概要を示すと以下のとおりである。

(一)については、仏教教団側の実態を明らかにすべく、本山・中本山寺院の史料の調査を行った。本課題の経費を用いた現地調査としては葉師寺・泉涌寺・西尾市岩瀬文庫があり、この他に東京大学史料編纂所の写真帳・デジタル画像を用いて、仁和寺・西大寺・金地院の史料の分析を進めた。この

うち、仁和寺所蔵史料を用いて、同寺の近世前期の僧である一音坊顕證の日記の概要を明らかにする研究をまとめた。これは真言宗の教団組織、幕藩領主との関係を検討するうえで有益な史料である。

(二)については、熊本藩と浄土真宗との関係を中心に調査・研究を行った。熊本藩領の関連史料の調査として、宇土市うと学資料室、西宗寺、熊本大学附属図書館、熊本県博物館ネットワークセンター、熊本県立図書館、関連寺院の所在地である堺市中央図書館などに赴き、原本・複製資料の調査を行った。それに加えて、他地域との比較を行うべく、久留米市立中央図書館、佐賀県立図書館、都城島津邸などにおいて九州の近隣諸藩の史料を調査し、また、藩と浄土真宗の研究に蓄積がある加越能地域にも史料調査を行った。以上の調査をもとに、二〇二二年一月の第七二回佛教学会学術大会において、「近世前期における熊本藩の真宗統制」と題した報告を行い、これまで同時代史料による研究が十分になされてこなかった加藤氏の段階における真宗統制の実態と、それが細川氏に継承されるあり様を明らかにした。なお、上記の調査史料のうちの一部はデジタル撮影を行い、許可を得たものに関しては、所属先の東京大学史料編纂所図書室にて研究を目的とする利用者を対象に公開を行っている。

持続性と利活用性を考慮したデジタルアーカイブシステム構築手法の開発

- 一、研究種目 若手研究
- 二、課題番号 二一K一八〇一四
- 三、研究期間 二〇二一年度～二〇二三年度
- 四、研究経費 直接経費七〇万円、間接経費二二万円

五、研究組織

研究代表者 中村 覚

六、研究の概要

今年度は、昨年度に引き続き、静的サイト(Webサイトの構成の一つで、HTMLファイルや画像などの静的コンテンツのみで構成されたサイト。動的な仕組みがないためサイトを設置するサーバ環境を選ばず、セキュ

リテイリスクも低い。)としてデジタルアーカイブシステムを構築する手法を検討し、基盤となるシステム開発を行なった。特に、二〇二二年一月に正式リリースされたNext 3 (オープンソースのWebアプリケーションフレームワーク)の導入を進めている。またインターネット上のメタデータ自動収集のためのプロトコルの一つであるResourceSync機能の実装も行った。これらの機能により、高い持続性と利活用性を実現することを目指している。また上記システムを用いて、以下に示すデジタルアーカイブシステムを構築した。いずれも静的サイトとして構築し、GitHubなどのホスティングサービス上で公開している。

東京大学総合図書館「電子展示『君拾帖』(拡張版)」／浄土真宗本願寺派総合研究所「浄土真宗聖典オンライン検索システム」／東京大学総合図書館「ゲーテ自署付書簡テキストデータ (TEI準拠)」／東京大学史料編纂所「策彦周良文集」

特に後の3つのシステムはTEI (Text Encoding Initiative: 人文科学のテキストの符号化・交換のための規格) に準拠したXML ファイルを入力データとしており、画像やテキストなど多様なコンテンツを対象としたデジタルアーカイブシステムの構築に適用可能なシステムとして開発を進めている。

鎌倉幕府法研究の再始動―書誌学的方法による基礎研究―

- 一、研究種目 研究活動スタート支援
- 二、課題番号 一九K二三一〇四
- 三、研究期間 二〇一九年度～二〇二二年度
- 四、研究経費 直接経費四七万円、間接経費〇円
- 五、研究組織 研究代表者 木下竜馬
- 六、研究の概要

御成敗式目をはじめとする鎌倉幕府法は、日本中世史像を形作る重要な素材である。しかし、その研究は隘路に陥っている。その理由は、既存の『中世法制史料集』の鎌倉幕府法本文に依存しすぎたあまり、幕府法の原史料の

基礎的な検討が不十分だからであると考ええる。本研究は、文献学・書誌学的方法を取り入れ、鎌倉幕府法の新史料を発掘し、既知の諸史料を含め批判・分析して系統立てる。これにより、鎌倉幕府法研究を再始動させ、日本中世史像の見直しにつなげたい。

最終年度となった本年度は、高野山金剛三昧院、富山県宮崎文庫記念館、富山市立図書館中央館山田孝雄文庫、鶴見大学図書館などで鎌倉幕府法関係史料の調査を行った。式目注釈書の研究会もオンラインにおいて継続している。また成果物として、この研究で発見した史料の翻刻を、「史料紹介 翻刻 青山文庫本貞永式目追加 その一」として『鎌倉遺文研究』第四九号(二〇二二年四月)に掲載し、「その二」も掲載が決定した(第五一号、二〇二三年四月)。引き続き発表していく予定である。

サファヴィー朝との合意文書によるオランダ東インド会社外交文書編纂の研究

- 一、研究種目 研究活動スタート支援
- 二、課題番号 二〇K二二〇二二
- 三、研究期間 二〇二〇年度～二〇二二年度
- 四、研究経費 直接経費九〇万円、間接経費二七万円
- 五、研究組織 研究代表者 大東敬典
- 六、研究の概要

本研究は、オランダ東インド会社とサファヴィー朝との間で作成された合意文書の総合的調査を行い、①同文書群の形式・内容・相互関係を明らかにすること、②それを手掛かりに、会社がアジア各地から収集し作成した合意文書集「契約集(Contractboeken)」の性格について史料学的検討を行うこと、③さらに、二〇世紀前半に同史料を基に編纂された、オランダ東インド会社外交に関する基幹史料集Corpus diplomaticum Neerland-Indicum (蘭領東インド外交文書集)について、史学史的検討を加えることを目的とする。二〇二二年度も予定していたインドネシア国立文書館での史料調査を行う

ことができなかつた。新型コロナウイルス感染症が収束に向かい始めた夏から準備を開始したが、調査ビザ取得のための受入機関確保に時間を要し、再度調査を延期せざるを得なかつた。幸い本研究期間を一年延長することができたので、二〇二二年度にこの課題に取り組みたい。

そのため当該年度も『蘭領東インド外交文書集』と、その主要典拠で、オランダ東インド会社のアムステルダム支部に伝わる「契約集」を利用し、会社の合意文書について地域間比較を進めた。

会社の合意文書の地域横断的分析を行う先行研究の多くは、オランダの法学者フーゴー・グロテウィウスの言論活動に関連するもので、主に、会社が現地政権に対して対等以上の立場を有した東南アジアや南アジアの諸地域を対象に、会社による万民法の運用やオランダの植民地主義の発展について論じてきた。その一方で、強力な王権が存在した地域、特に東アジアと西アジアには十分な注意を払ってこなかつた。

こうした研究の偏りによって見過ごされてきた重要な事実として、現地政権が優位に立つ地域では、会社は現地語の勅令をオランダ語訳し「契約」として収集する活動を行っていたことが挙げられる。またそうした勅令／契約の受命者は、必ずしもオランダ人とは限らなかつた。「契約集」に収録されたサファヴィー朝君主の勅令の中には、一六五二年四〜五月にサファヴィー朝君主アッバース二世がバンダレアッパース知事に発給したペルシア語勅令のオランダ語訳が含まれていた。本研究では、それをさらに日本語に翻訳し、解題と必要な注を付して刊行した。(『蘭領東インド外交文書集』(二)―オランダ東インド会社とグロテウィウス―久礼克季・富田暁・松方冬子と共編訳、解題を担当『東京大学史料編纂所研究紀要』三三、二〇二二年三月)

また本研究と関連して、二〇二〇年度に『蘭領東インド外交文書集』研究会を立ち上げ、史料編纂所共同利用共同研究拠点特定共同研究「モンスーン文書・イエズス会日本書翰・VOC文書・EIC文書の分野横断的研究」(二〇一九〜二〇二二年度)「本所所蔵在外日本関係史料の多角的利用のための翻訳研究」(二〇二二〜二〇二五年度)の一環として所収文書の翻訳を進めてきた。研究会には、松方冬子氏(東京大学史料編纂所)、久礼克季氏(川村学園女子大学)、富田暁氏(岡山大学)が参加している。二〇二二年度

はバンダ、アンボyna、セイロン、ペルシアなどの合意文書を対象に、インド洋における会社外交の実態について検討を行った。現在それらの史料について解説論文を準備している。

古記録フルテキストデータベース

- 一、研究種目 研究成果公開促進費(データベース)
- 二、課題番号 二二HP八〇〇五
- 三、研究期間 二〇二二年度
- 四、研究経費 直接経費一七〇万円、間接経費〇円
- 五、研究組織
作成者 古記録フルテキストデータベース作成グループ
研究代表者 遠藤珠紀
作成分担者 尾上陽介・菊地大樹・井上聡
- 六、研究の概要

古記録フルテキストデータベースは、「古記録」の全文データベース化を目的とし、『大日本古記録』所収の日記を中心に入力を行っている。他の科研のご協力も得て(筆跡・花押情報の高度活用研究―収集スキームの錬成と関連歴史情報との統合による―(基盤研(A)代表末柄豊)、データ化を進め、今年度は『大日本古記録 言経卿記』五・六、『大日本古記録 平記』上、『大日本古記録 中院一品記』下のデータ作成・公開を行った。また禅籍史料研究プロジェクトの成果として、本所所蔵「帰周和尚語録」の公開を行った。

絵図の史学―「国土」・海洋認識と近世社会―

- 一、研究種目 研究成果公開促進費(学術図書)
- 二、課題番号 二二HP五〇六二
- 三、事業期間 二〇二二年度(全額を二〇二二年度に繰り越した)
- 四、補助金額 直接経費二二〇万円

五、作成組織

代表 杉本史子

二〇二二年八月一五日、名古屋大学出版会より、『絵図の史学―「国土」・海洋認識と近世社会』（四四〇頁、カラー口絵八頁）を刊行した。

①『近世政治空間論』（東京大学出版会、二〇一八年）の近世近代移行期を海陸の変動期として捉える視点を、もう一歩進め（第Ⅱ部「新たな海洋把握と「日本」の創出」）、②国絵図・日本図を、同時代のアジアのなかに位置付け（第Ⅰ部「国絵図と日本図・近世の「国土」把握」）、③社会のなかの表現する人々と、それになりたいとする身分規制の問題を提示した（第Ⅲ部「表現する人々―社会の中から諸世界を構想する」）。そして、第Ⅳ部「モノと色彩―空間表現を支えるもの」では、学際的共同研究の成果を踏まえ、モノと色彩から近世史料をとらえ直した。

受託研究

人文学・社会科学データインフラ構築推進事業拠点業務（人文学・社会科学データインフラストラクチャー構築推進事業拠点機能におけるデータ共有基盤の構築・強化委託業務）

一、経費種目 日本学術振興会（JSPS）の「人文学・社会科学データインフラストラクチャー構築推進事業拠点機能におけるデータ共有基盤の構築・強化委託業務」

二、業務期間 二〇一九年度～二〇二二年度

三、業務経費 直接経費二四五〇万円、間接経費七三五万円

四、業務実施組織 東京大学史料編纂所

業務実施責任者 本郷恵子（前近代日本史情報国際センター長）

五、運営委員会メンバー（二〇二二年度）

本郷恵子・箱石 大・金子 拓・山田太造・中村 覚・洪谷綾子・渡邊要一郎・平澤加奈子・犬飼ほなみ・茅根

修・清田 盟（以上、史料編纂所）

下田正弘・高橋典幸・大向一輝・山田俊幸（以上、人文社会系研究科）

六、業務概要

二〇一九年一〇月、日本学術振興会（JSPS）の「人文学・社会科学データインフラストラクチャー構築推進事業拠点機能におけるデータ共有基盤の構築・強化委託業務」につき、委託契約を締結して受託事業を開始した。

本事業の目的は「人文学・社会科学研究に係るデータを分野や国を超えて共有・利活用する総合的なシステムを構築すること」にあり、委託業務は「国内・海外に所在する史料の調査・研究や蓄積した史料情報・研究成果の研究資源化に組織的に取り組み、日本史学を中心とした人文学データの共有基盤を整備して、これを長期的に利用可能にするためのデジタルアーカイブ機能の強化」がその目的・意義とされている（業務実施計画書）。

委託業務の遂行には、前近代日本史情報国際センター長（所長兼任）のもとに運営委員会を設置し、同センターと連携する本学人文社会系研究科の人文情報学部門が参加している。業務内容としては、以下のような三つの項目（実施ユニット）と担当責任者を決めて遂行した。

①データアーカイブ機能の強化（共有化ユニット）：OAIS（Open Archival Information System）参照モデルに基づく長期保存・長期利用のためのシステム環境整備／データ利用条件の整備／データ分析環境の提供、担当責任者山田太造准教授

②海外発信・連携機能の強化（国際化ユニット）：海外発信の強化・海外史料保存機関との連携強化／データベース英訳事業の推進・国際交流、担当責任者本郷恵子教授

③データ間の連携を可能にする環境の整備（連結化ユニット）：API（Application Programming Interface）の整備、担当責任者大向一輝准教授（人文社会系研究科）

以下、業務実施ユニットごとに本年度の取組みを整理しておく。

①データアーカイブ機能の強化（共有化ユニット）
・データの長期保存・長期利用のためのシステム環境整備…令和三年度まで

に開発した史料画像デジタル化進捗管理システムの検証を経て、実運用を開始した。また、令和二年度に採択された「JDFC 科研費基盤研究(A)「コンテキストに応じた人文科学データパッケージ化に関する研究」は、写本などの作成過程、史料の伝来・由来、紙質調査など人文科学研究で史料を扱う上で欠かせないデータを目錄データと紐付けて行く手法の確立を行っており、人文科学の研究資源としてさらに重要性の高いデータを作成した。この成果を採訪進捗管理システムに取り入れていく検討を進め、プロトタイプングを進めた。東京大学はデジタル・ヒューマニティーズに関するトップカンファレンスである Digital Humanities 2022 国際会議を二〇二二年七月に開催し、人文科学拠点での成果を世界に向けて発信、日本史料・日本に関する人文科学研究資源の国際的な関心度を高めた。二〇二二年一二月の人文科学とコンピュータシミュレーション「じんもんこん 2022」では、「日本史料データプラットフォーム構築に向けた取り組みと課題」の報告を行うなど、本事業の発信に努めた。

データ利用条件の整備…令和四年度は他機関所蔵史料の画像データ利用条件をさらに広げた。具体的には、和歌山県湯浅町所蔵紀伊国の豪商菊池家史料(菊池海莊関係など幕末維新期研究の重要史料が中心)、神奈川県立金沢文庫史料(国宝、廃棄された鎌倉幕府トップの手紙等)、海の見える杜美術館所蔵岩倉具視関係史料(重要文化財)、京都府立京都学・歴史館所蔵東寺百合文書、日本中世気象災害史年表稿、松尾大社社蔵史料などを対象とし、所蔵機関等との綿密な打ち合わせを経てデータ利用条件を設定、金沢文庫史料(一、〇二四点)、海の見える杜美術館所蔵岩倉具視関係史料(四、一六五点)、松尾大社社蔵史料(四、六九二点)、日本中世気象災害史年表稿(一三、五三八件)のデータを公開した。

データ分析環境の提供とデータカタログ整備…人文情報学部門では SAT 大蔵経データベースにおいてすでに展開されている、IIIF 関連 API による仏典データ連携基盤をさらに整備した。NII が整備を進めている総合的カタログ JDCat やオンライン分析へのデータ提供の観点から、人文科学でのデータカタログの形式やオンライン分析手法の検証を深化させるとともに、すでに JDCat 搭載済の備後福山藩阿部家史料と令和四年度に搭載の

金沢文庫史料に DOI の付与を行った。日本中世気象災害史年表稿による災害データを対象に、時空間分析可能な方法について検証した。

② 海外発信・連携機能の強化(国際化)

多言語対応…「維新史料研究の国際ハブ拠点形成」の成果をもとに、SHHS データベースの一つである「維新史料網要」データベースにてユーザーインタフェースの英語版、およびデータベースの英訳化と史料用語・歴史用語の英訳グロスサリー作成作業を推進した。全一〇巻中六巻、約一八〇〇件の網文(史料タイトル)の英語版を完成、登録約八七〇〇件の英訳データ提供を実現した。この成果を経て日本史用語翻訳グロスサリー・データベースとして公開した。歴史用語の英訳については日々検証を進めており、令和四年度もブラッシュアップされた英訳データの搭載を行った。これに関連し、二〇二二年一二月に国際研究集会を開催、海外の研究者と日本史情報の国際化推進について意見交換を行った。

データ共有・利活用に関するシンポジウム等…二〇二二年七月に、オンラインで行われた Digital Humanities 2022 国際会議では、人文科学拠点の成果を報告するセッションを設け、世界に向けて発信した。九月にオンラインとポルトガル・リスボンのハイブリッド方式で行われた第三二回日本資料専門家欧州協会年次大会(EAITS2022)では、事業報告一本(オンライン)と機関ワークショップ(リスボン)を実施するとともに、期間中は事業を紹介するブースを設け、海外史料保存機関の実務者たちと議論を行った。一月に、第七回東アジア史料研究編纂機関国際学術会議をオンラインで開催し、「東アジア歴史資料編纂の伝統と現代化」をテーマに、日本・韓国・中国からの報告九件と全体議論を行った。二〇二三年二月に行われたデータインフラストラクチャー整備公開シンポジウム二〇二三に参加し、これまでの取り組みを報告するとともに「新時代のデータ利用環境とオープンサイエンス」をテーマにパネルディスカッションを行った。二〇二三年三月にアメリカ・ボストンで行われたアジア研究協会(Association for Asian Studies' AAS 2023)へ参加、海外の研究者たちと意見交換を行った。また横浜開港資料館と協議の上、フランス外交文書館、ドイツ連邦文書館・プロイセン枢密文書館・ドイツ連邦軍事文書館などが所

蔵する日本関係史料データの共有・提供について協議し、公開の準備を進めた。

③ データ間の連携を可能にする環境の整備（連結化）

・API (Application Programming Interface) の整備：APIの整備はフィードバックを得ながら整備・改修を加えた。「史的文字データベース連携検索システム」における文字画像データに関する HTML Presentation APIの利用方法や文字メタデータ基盤の改修を行った。特定のデータベースを紹介することなく、研究素材となるデータを提供できるよう、データセットとして整備を行った。Google Dataset Search など汎用的に提供できる方法の検証を経て、HI Lab サイト (<https://labhi-u-tokyo.ac.jp/>) を構築・公開した。

(本郷恵子)

福岡市域に関わる史料の調査及び研究

一、研究種目 受託研究（福岡市史編集委員会）

二、研究期間 二〇二二年度

三、研究経費 七十七万円

四、研究組織

研究代表者 山口英男

研究分担者 岡本 真

五、研究概要

本研究は、二〇〇六年度から引き続き福岡市史編集委員会から受託し、福岡市史編纂のため基礎研究となる「福岡市域に関わる資料の調査及び研究」を行うものである。福岡市史専門委員を委嘱されている山口・岡本を中心に、本研究費で雇用する支援スタッフ等を加えて研究組織を構成し、史料編纂所に架蔵されている写真帳・影写本・謄写本等から関連史料を調査・研究する計画である。本年度も引き続き古代の未公刊史料類、中世の福岡市外所在史料の調査を実施した。主な内容は次の通りである。

〔古代〕

引き続き福岡市域に関わる史料を蒐集し、内容整理及び年次判定等のための解析を行ない、既蒐集史料と合わせてその成果のデータ化作業を実施した（対象史料 宮内庁書陵部等所蔵の学芸・文学関係史料）。

〔中世〕

記録篇の刊行にむけて、前年度までに蒐集しデータ化したもののうち、対外関係史料について、底本との対校および確認を実施した。また、禪宗史料に関して、史料の性格と内容を検討・解析した。

(山口英男・岡本 真)

賀茂別雷神社氏人発給文書の分析による氏人組織の研究

一、研究種目 受託研究（賀茂別雷神社）

二、研究期間 二〇二二年度（二〇二二年四月～九月）

三、研究経費 四五・五万円（直接経費三五万円）

四、研究組織

研究代表者 金子 拓

五、研究概要

賀茂別雷神社編纂にかかる『賀茂別雷神社史料』編纂のための研究作業の一部について、本所教職員で構成する研究組織が賀茂別雷神社からの研究費を得て実施した。この経費により学術専門職員一名を雇用し、『賀茂別雷神社史料1 氏人置文』『同2 氏人起請文・請文・請状』に収められた史料について、本所撮影の賀茂別雷神社文書画像から、林讓氏代表料研「前近代人物情報論の構築にむけた花押・筆跡の網羅的収集と汎用的利用に関する研究」、末柄豊氏代表料研「筆跡・花押情報の高度利活用研究」により開発された花押収集システムを用い、氏人花押の収集と人物情報の蓄積をおこなった。氏人組織の研究を進めた。これにより今年度までで約三四五〇〇件の花押を切り出し、それにとまなう氏人名比定のための情報蓄積を行い、花押切り出し作業はほぼ終了した。

(金子 拓)

寄付金

山川草木思想の展開に関する歴史資料学的研究

一、鹿島学術振興財団研究助成

二、研究期間 二〇二二年度

三、研究経費 一二十五万円

四、研究組織

研究代表者 菊地大樹

研究協力者 小山聡子（二松学舎大学）・藤井雅子（日本女子大学）

五、研究目的

近代社会における人間の環境へのかかわり方を解明するため、人文学から自然科学まで様々な分野のアプローチが試みられてきた。しかし、目下環境問題はますます深刻となっている。そのためとすれば、今日的な課題解決に即応した科学技術のみに目を奪われがちである。歴史学の立場からは、このような時にこそ人間と環境をめぐる前近代以来の歴史的経緯を具体的に明らかにし、アカデミックな提言をすることで、持続可能な両者の関係の再構築に寄与することが求められている。さいわいこのような問題意識は歴史学においてもすでに広く共有され、日本を含む世界のさまざまな地域史研究において、環境史的方法が大きく前進している。巨視的にはこうした研究動向に触発されたことが、本研究を着想するに至った理由である。

そこで本研究では、申請者の専門分野である中世宗教史から、文献研究により着実な学問的成果を期した研究計画を立ち上げることとした。すでに人文学諸分野が環境問題に果たすべき役割が自覚されつつあるなか、従来の宗教史研究は、とすれば教理思想文献の分析が到達点となり、これが社会的にどのように受容され、歴史的対象として展開していったのかが十分に明らかにされないままであった。たとえば、伝統的景観として注目されてきた里山の歴史的役割を明らかにするため、先行研究において開発技術などさまざまな分野の歴史知識が活用されている。しかし今日に至るまで、宗教の果た

した役割については必ずしも十分論じられてこなかった。そこで拙著『日本人と山の宗教』（講談社、二〇二〇年）においては、かつて里山エリアに多く建立された山林寺院の役割を通じて、前近代における里山の宗教的意義について考えた。本研究では、いっぽうでこの点をさらに宗教史的に展開するための理論的視座を獲得したいと考えている。そのため里山という世俗の場とのつながりを意識しながらも、こうした場において指導的役割を果たした僧たちの修学の場に視点を移して聖教史料に注目することとした。この点に、本研究の大きな意義がある。

すでに、申請者はべつに中世の板碑（石造供養塔）に注目し、調査研究を進めている。中世の在地社会に広く建立された板碑には、がらう寺院の奥深くで伝授されたはずの秘儀にもとづく言説がしばしば刻まれており、一見隔絶しているかのように思われがちな世俗と修学の二つの場は、じつは案外近接していたことが明らかになりつつある。宗教社会史研究においては、どちらかという世俗の場の歴史的展開に目が行きがちであったが、これからは同じ比重をもって、修学の場で生成された聖教史料に注目・分析していく必要がある。この点に注目したことに、本研究の価値がある。

こうした経緯から、本研究では、人間と環境の関わりを長期持続的かつ分野横断的に考察し、いっぽうで宗教社会史研究の理論的支柱としても発展性が期待できる「山川草木思想」に注目した。しかもこの思想を、概説的ではなく着実な研究成果として残していくため、おおむね時代を一〇〜一五世紀に限定し、いままですく調査研究が遅れてきた印信史料群の分析を軸に据えている。調査の中心に据えた密蔵院・長楽寺の聖教については導入となる紹介もあり、これらを手掛かりとしながら、本研究において山川草木思想の解明の基礎となる本格的な史料調査を実現する。日本におけるこの思想の先駆者と位置づけられる安然の研究も漸次進み、研究環境も整いつつある。その思想が実際に展開していく平安時代中期から室町前期にかけての出発点となる皇慶のもと、長期にわたって形成されていった台密谷流諸派の聖教史料群を追跡するなかから、この派に形成された身体論が、人間と環境の媒介として身体を実践的に意識するという特徴を持っていたことを明らかにすることが、本研究の最終目標である。

六、研究の進展状況（これまでの経過・進捗度）

申請者の博士學位論文『中世仏教の原形と展開』（吉川弘文館、二〇〇七年）、その後の著書である『鎌倉仏教への道』『日本人と山の宗教』、ならびに過去の関連執筆論文などをあわせてもう一度総合的に検討し、人間と環境の歴史的關係について長期持続的方法にもつき論じる方法につき考察した。また、研究協力者と打ち合わせを行い、具体的な調査の内容や方法等につき議論した。そのうえで計画に従い、群馬県太田市長楽寺および愛知県春日井市密蔵院の所蔵史料原本調査に着手した。

長楽寺については、五月に予備の原本調査を実施した。「長楽寺聖教」には予想に反して中世の印信群はほとんど伝来しないことが判明、あらたにその意味を考える課題を発見した。同時に、中世の印信関連史料が豊富に残されていることを改めて確認し、継続調査の必要性が明らかになったことから、一月には研究協力者とともに「長楽寺聖教」の調査撮影を行った。

「密蔵院印信群」については、現地を訪れ所蔵者と打ち合わせを行ったが、現時点では事情により原本調査が難しいことが判明した。ただし関係者により、一九七〇年代に大正大学日本史学研究室により撮影されたマイクロフィルム画像の提供を受けることができた。これをデジタル化し、内容について分析することが可能となるとともに、将来の本格的調査に向けた準備を進めることができた。

また、申請者所属機関が奈良文化財研究所と共同で進めている中近世の「薬師寺史料」調査にも参加し、本研究課題に関連する研究を進めた。

一月に申請者所属機関が今年度より本格的に開始した、京都市青蓮院門跡所蔵「吉水蔵聖教史料」調査撮影に参加し、本研究課題に関連する研究を進めた。同聖教史料は国重要文化財の指定を受けており、平安時代中期以来の印信群を豊富に含むことはもちろん、その教理的背景に関する膨大な著作を取めている。同史料群は、皇慶の谷流下で隆盛を誇った三昧流の根本史料でもあり、本研究課題の遂行に大きな貢献が期待される。

以上の理論的考察および現地における原本調査の成果を踏まえ、申請者は講演（東京浅草ロータリークラブ）および研究報告（東洋大学「東洋学研究プロジェクト」（井上助成）主催シンポジウム）を行った。前者は一般の

聴衆に向け、現代における環境問題の解決に歴史文化的背景の考察が不可欠であることを訴えると同時に、草木のような当時は「無生物」と考えられた存在でさえ成仏するという安然の主張から、人間性や環境への責任という現代的課題が読み取れることを指摘した。後者では学術的な立場から、一三世紀にさかんとする禪と天台思想の一致の潮流に注目した。「境智冥合」という思想が当時の仏教において環境と人間の関係を結ぶ基本にあり、そのかために人体が重要な役割を果たすという点から、安然・皇慶以来の思想を受け継ぐ天台僧であるとともに、禅僧でもある東福寺円爾や痴兀大慧の思想を論じ、印信群の文献資料としての活用の可能性を論じた（「環境と身体を結ぶもの」『東アジア仏教学術論集』一一号、二〇二三年三月）。

以上の調査研究成果の整理・入力等のため、年度後半には学術専門職員を週一日雇用し、有効活用できるよう準備を進めた。

なお、本研究遂行の過程で従来から利用してきたノートPCが突然故障した。さいわい、本研究により蓄積してきたデータの救出には成功したが、あらたなノートPCの購入・セットアップと合わせ、当初計画にない労力・予算執行を余儀なくされた。ただし、全体の研究進行上に大きな支障はなく、おおむね計画通り順調に進捗した。

「南蛮貿易」で結ぶモノのデジタル・マップ構築と地域史研究支援 社会への還元の取り組みとして

- 一、研究種目 鹿島学術振興財団研究助成
- 二、研究期間 二〇二二年度～二〇二三年度
- 三、研究経費 直接経費一五五万円
- 四、研究組織
- 五、研究の概要

本研究では、いわゆる「南蛮貿易」と称されてきた、十六世紀の日本と世界の関わりが、日本の産業発展や人々の価値観にどのような変容をもたらしたのかを、その前後の時代との連続性を軽視することなく、多細目に渡る

「モノ（遺構も含む）」についての最新研究成果を組み合わせることで明らかにする。大きな特徴は、アカデミアの研究者と関係地方自治体の研究者の協働で研究が進められることである。

本年度は、四月に共同研究者のミーティングを開催した。当初の予定では、長崎県、大分県などが想定されていたが、自治体側の担当者が極めて多忙な状況にあることが判明し、まずはモデルケースとして石見銀山を擁する高根県および大田市の自治体研究者の協力を得て、石見銀山遺跡並びに周辺の温泉津、浜田などの日本海側の港町と中世日本最大の港湾都市博多を結ぶルート上の交易史跡、十六世紀の発掘成果物などを対象に必要なデータの収集を開始した。

九月に石見銀山世界遺産センターにおいて関係自治体担当者、本共同研究のメンバーが集い研究会を開催した。すでに自治体として史跡、出土品の情報公開において優れた実績を挙げている大分県大分市文化財課長の坪根伸也氏（共同研究者）が豊後府内遺跡の発掘と市民への情報公開の実績を発表した。また高根県側からは石見銀山資料館館長の仲野義文氏（共同研究者）が石見銀山遺跡の世界遺産としての文化財活用を取り組みを紹介し、大田市教育委員会の新川隆氏がこれまでの発掘調査の成果概要を紹介した。石見銀山遺跡ならびに石見銀の積み出し港であった温泉津からは大量の貿易陶磁（東南アジア、中国、朝鮮産）が発掘されているが、その成果はほとんど公開されていないことを再確認し、データを整理の上でオンライン情報として公開することの有益性を再確認できた。またこの会議ではデータ収集にあたっていただく三人の元文化財担当者（自治体退職者）に作業の手順を説明し、デジタルマップを作成する上での具体的なテーマについて検討を重ねた。

和紙を科学する

一、研究種目 受託研究（令和四年度加速器科学総合育成事業加速器科学育成プログラム）

二、研究期間 二〇二二年度

三、研究経費 一三二万二千元

四、研究組織

研究代表者 高島晶彦

研究分担者 渋谷綾子・山口悟史・平澤加奈子（以上史料編纂所）・丹羽尉博（大学共同利用機関法人高エネルギー加速器研究機構）

構物質構造科学研究所放射光実験施設

五、研究の概要

本プログラムでは、(1) 古文書料紙に対する成分分析技術の開発、(2) 人材の育成、(3) 地域連携・還元という三つを軸とする。このうち(1) 料紙の成分分析技術の開発については、①高エネルギー加速器研究機構（KEK）付属分析機器を用いた各種料紙の成分分析、②原本史料の非破壊調査に向けた計測環境の整備・効率化、③製紙技術の復元、④史料の現況に即した保存科学の方法の検証・実践、を柱として設定し実施した。

①・②については、各種料紙の構成物・成分に対する実験的な解析を行い、計測環境の整備・効率化の検討を進めた。対象とした料紙は、実験製作した楮・米粉入り楮・雁皮・米粉入り雁皮・三椶の紙サンプル、東京大学史料編纂所所蔵「中院一品記」の紙片二点、関義城「古今紙漉紙屋図絵」の見本紙六〇点である。「古今紙漉紙屋図絵」は関義城が収集した見本紙、天平時代から江戸時代を主体とし、明治大正などの和紙、中国・朝鮮・オランダ・フランス・ドイツ・イギリスの古い手漉き紙一七五種、パーチメント（羊皮紙）、タラハ、パピルス茎、楮・三椶・雁皮の繊維などが添付されたものである。

また三次元X線顕微鏡（X線CT）による内部構造の解析（担当・丹羽）では、サンプルの大きさとしてどの程度まで解析可能か（計測環境の整備・効率化）を検討するとともに、料紙の科学情報をどこまで獲得できるのか、フーリエ変換型赤外分光装置（FT-IR）を用いた分析とともに比較・検証を行った。FT-IR分析（担当・高島・渋谷・山口・平澤）では、特に「古今紙漉紙屋図絵」の中から六〇点を抽出して成分比較を行い、紙の種類・地域・時期的な特徴がどう現れるのかを検討した。なお、FT-IRの結果については、KEK環境安全管理室石田正紀氏らが統計解析を行ったところ、紙質の特徴を明瞭に識別できることが判明した。二〇二三年度の日本

分析化学会年会で報告する予定である。

③・④については、富山県や茨城県など料紙研究に関する関連プロジェクトで協働している研究協力者に分析用試料の採取や技術復元等の協力をあおぐとともに、文化財修復の関係者と協力して、保存科学の方法の検証を行った。さらに、他の関連プロジェクトで進めてきた料紙分析により獲得された情報をふまえて復元製作実験を行い、古文書料紙の「モノ」としてのさまざまな特性を検討することができた。聞き取り調査を行った研究機関には今後とも研究・調査の協力をお願いしており、多様な古文書料紙の分析の可能性を拡げることができた。

(2) 人材育成、(3) 地域連携・還元については、科研費等の共同研究の成果とあわせて、合同の公開研究会を開催した(「茂木文書と科学の出会い」二〇二三年三月五日、ハイブリッド開催)。特に、研究協力をお願いしている栃木県茂木町で研究会を行うことにより、地域(茂木町)・KEK・本所のネットワーク構築を進めることができた。研究会には現地・オンラインにて一〇九名の参加があり、学生・研究者・一般の方がたと「古文書の科学的研究」という視点や今後の可能性を共有することができた。

本事業で料紙の構成物・成分を物理化学の視点から注目するとともに、他の関連プロジェクトで行われた料紙分析の結果を比較したことによって、料紙の製造手法や地域的・時期的特性を中心とした情報抽出を進めることができた。調査データの利用・公開に向けた議論も進めており、今後学術誌への論文投稿等の成果発信も予定している。

(高島晶彦・渋谷綾子・山口悟史・平澤加奈子)

前近代の那覇港における航路と聖地

- 一、研究種目 JFE二一世紀財団アジア歴史研究助成
 - 二、研究期間 二〇二三年(一月～二月)
 - 三、研究経費 期間中の直接経費一五〇万円
 - 四、研究組織
- 研究代表者 黒嶋 敏

五、研究の概要

本研究は、複数の画像史料を読み込んだうえで、前近代における那覇港の航路と聖地の関係を復元的に考察し、アジア海域の交易拠点となった港湾の実態に迫ろうとするものである。周囲にサンゴ礁が広がっていた那覇港では、船は狭く屈曲したサンゴ礁の切れ目を利用して出入りしていた。航路を進む船は、陸上の建造物や山の稜線を目印にしていたが、とくに那覇港では、天久台地・小緑台地や崎原岬などといった海岸部の高台に、航海安全を祈る御嶽などの聖地が見られることが特筆される。航路を進む船と聖地との対応関係は、前近代の港湾機能を支える重要な要素であったにもかかわらず、現在の那覇港は景観が一変しており、それを復元することは困難である。

そこで本研究では、那覇港における航路と聖地について、関連する絵図・史料に加え、一九世紀の海図・水路誌などを用い復元的に検討を試みていく。とくに現地調査によって、観測調査機器を利用して海図の正確な描画地点を確認しつつ、航路上からの見え方に留意して聖地との関係性を探る。

また、関連する絵図として注目されるのが、一六四〇年代に製作された正保の琉球国絵図である。この国絵図では、江戸幕府による鎖国政策推進という時代背景のもとで海岸線や港湾を詳細に描画しており、一九世紀の海図・水路誌との比較検討を可能とする情報量を持っている。そのため、まず二〇二三年一月より、正保の琉球国絵図と関係が深い「琉球并諸島図」(都城島津邸所蔵)のデータ構造化に着手し、一六四〇年代に製作された絵図における那覇港描画の特徴を析出していく作業を続けている。

以上の調査・作業を、二〇二三年一二月までの研究期間において継続し、課題の遂行に取り組んでいきたい。

行動する人の歴史―力はどこからくるか―

- 一、研究種目 東京大学ヒューマニティーズセンター(HMC)企画研究
- 二、研究期間 二〇二〇年七月～二〇二二年六月
- 三、研究経費 総額二〇〇万円
- 四、研究組織

研究代表者 松方冬子（史料編纂所）

研究分担者 井坂理穂（総合文化研究科）、稲田奈津子（史料編纂所）、

後藤春美（総合文化研究科）、永井久美子（総合文化研究

科）、三枝暁子（人文社会学系研究科）、水野博太（HMC / 人文社会学系研究科）

五、研究の概要

本研究は、人間とは何をして生きるものかという素朴な疑問から出発し、日本・アジアから新しい世界史を構想する。動詞をキーワードとして用いることにより、従来歴史学を縛ってきた時間・空間設定（「近世日本」など）から個々の事象を解き放ち、多角的な議論と歴史の動態的把握を可能にすることを目的とした。

二〇二二年度には、Humanities Center Booklet Vol. 16, *Royal Letters, Imperial Documents: A Japanese, Korean and Thai Triologue for a Global History of Inter-State Relations*, (二〇二二年六月) を刊行した。

本研究については、以下のウェブサイトを参照されたい。http://www.hi-tokyo.ac.jp/personal/fuyuko/kaken/koudou_reishihml

金石文資料からみた東アジアの墓葬文化―墓誌・買地券を中心に―

一、研究種目 東京大学ヒューマニティーズセンター(HMC)公募研究(A)

二、研究期間 二〇二〇年度～二〇二二年度

三、研究経費 五八〇万円(期間総額、海外招聘費・研究専念経費含む)

四、研究組織

研究代表者 稲田奈津子

国外招聘研究者 王海燕(浙江大学歴史学院教授)

五、研究の概要

当初、東アジアの墓葬関連金石文について、現物調査や出土地踏査を通じて東アジアを見渡す視点からの比較研究を予定していたが、COVID-19の影響により当初計画の実行が難しくなったため、二〇二一年度中に研究計画を練り直した。その結果、研究対象を買地券に絞り、中国・朝鮮・日本の事例

について精細な画像データを収集・分析し、その成果を一書にまとめることにした。今年度になり、延期が続いていた王海燕氏の来日が四月二八日～九月一日に実現した。

そこで榑佳子氏(史料編纂所・学術専門職員) およびJSPS科研費(22K00837)「東アジア墓葬文化の伝播と展開―金石文資料の形態的分析を中心に―」(研究代表者・稲田)の研究協力者もまじえて、五月に宮ノ本遺跡出土買地券(九州国立博物館)、六月に矢田部益足買地券(倉敷考古館)の実物調査・撮影、および現地踏査を実施した。また十一月には兎山郡買地券(韓国東谷博物館)の実物調査を実現した。

並行して中国・韓国・日本の各所蔵機関から精細な画像データを手入れ、それをもとに分析を進め、稲田・王・榑の三名での議論を重ねるとともに、稲田「新出高麗買地券の紹介と釈読」(金石文科研二〇二二年度第一回研究会、五月二四日)、王「浙江・江蘇両省の買地券事例の紹介と釈読」(金石文科研二〇二二年度第二回研究会、八月二日)など、関連する研究会で中間成果を報告し、諸分野の専門家から多くの教示を得た。またHMC第六九回オープンセミナー「黄泉の国との契約書―東アジアの買地券―」を開催し(六月三日)、王「中国の買地券―呉越地域の事例を中心に―」、稲田「朝鮮と日本の買地券」と題して報告した(主催はHMCおよび本所、共催は前記科研費、参加者一八名)。

最終的な成果は、稲田・王・榑編著「黄泉の国との契約書―東アジアの買地券―」(勉誠出版、三月)として刊行した。本書では中国一件、朝鮮四件、日本二件の合計一七件の買地券を中心に、精細な画像とともに釈文・現代語訳・解説を示し、コラムや総論とあわせて、東アジアの買地券文化を一覧できるものを目指した。銘文だけでなく考古遺物として、その素材や形態も伝わるよう配慮した画像を多く掲載している。韓国での調査経緯については、稲田「兎山郡買地券の「発見」―新出資料調査記―」(「東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信」一〇〇、二〇二三年四月)にも紹介している。

オランダ東インド会社による「宮廷旅行」の比較研究―日本、マラバール、ペルシア―

- 一、研究種目 「IX」潮田東アジア人文研究拠点・東京大学ヒューマニティーズセンター公募研究(A)
- 二、研究期間 二〇二一年度～二〇二二年度
- 三、研究経費 直接経費四三七万円(海外招聘費四〇〇万円)
- 四、研究組織
- 研究代表者 大東敬典
- 五、研究の概要

長崎出島のオランダ東インド会社商館長一行が江戸に赴き、將軍に拝謁し貿易許可の礼を述べ、献上品を呈する、いわゆる「江戸参府」は、近世日本の対外関係を規定する主要行事の一つとして精緻な研究が積み重ねられてきた。しかし、会社が一連の活動を「江戸への宮廷旅行 *hofreis naar Jedo*」と呼んでいたことには、なお注意を要する。会社の代表による政治的支配者の「宮廷 *hof*」への旅はアジアの他地域でも見られ、詳細な記録が残されたにもかかわらず、この共通点について、これまで十分に検討されてこなかったからである。そこで本研究は、「江戸参府」を「宮廷旅行」というオランダ語史料の文脈から再検討することを目的とした。

オランダ東インド会社の「宮廷旅行」を比較する試みは、日本においては行われることはなかったが、これまでオランダを中心に海外の研究者によって行われてきた。近年では、異文化理解、物質文化の問題としても論じられている。しかし、そうした研究の多くに共通する視座は、オランダの「外交 *diplomatie*」であり、主たる関心は、オランダ(ヨーロッパ諸国)のアジア進出の成否および性格を明らかにすることにあつた。したがって、「江戸参府」「外交」という日蘭両国の伝統的な問題関心や研究成果を踏まえつつ、新たな比較の観点を探ることが、本研究の重要な課題となつた。

上記の課題を克服するため、申請者はヒューマニティーズセンターの支援を得て、オランダ・ライデン大学から、南インドにおける会社の外交活動を研究するレナルト・ベス氏を招聘し、日本人とオランダ人の研究者が初めて

共同して会社の「宮廷旅行」の比較研究を行うという貴重な機会を得た。申請者とベス氏はそれぞれ、比較的研究が乏しいペルシアとインド・マラバール地方を対象に、研究に取り組むことにした。

史料編纂所における共同研究には、オランダ国立文書館のホームページで電子公開されているオランダ東インド会社関係史料を活用した。比較の観点から江戸参府研究を参照し、以下の三点の検討を行った。

- ① 関係史料の所在
- ② 「宮廷旅行」という用語
- ③ 旅の基礎的事項

研究成果の概要については、ヒューマニティーズセンター・ホームページで公開されている成果報告書をご覧ください。 <https://hmc.u-tokyo.ac.jp/ja/open-research/a/>

二〇二三年三月二十九日、ヒューマニティーズセンター第九〇回オープンセミナー「オランダ東インド会社の「宮廷旅行」―日本、インド、ペルシア―」を東京大学とオンラインのハイブリッド形式で開催し、共同研究の成果報告を行った。セミナーには、ヒューマニティーズセンターの支援により、イギリス・ウオーリック大学からヒド・ファン・メルスベルヘン氏も招聘することができた。メルスベルヘン氏は、ムガル朝インドの事例から、会社の宮廷旅行の比較分析のための様々な提案を行った。平日昼間の開催にもかかわらず、現地参加約二五名、オンライン参加約五〇名と多くの参加者に恵まれ、総合討論では、登壇者との間で一時間におよぶ充実した議論が行われた。学術的にも国際交流の面でも実りある会となった。冒険的な企画にもかかわらず、本研究をご理解、ご支援くださったヒューマニティーズセンターの皆様は、心より感謝申し上げます。

(大東敬典)

所内研究プロジェクト

荘園絵図プロジェクト活動報告

一、プロジェクトメンバー

稲田奈津子・井上 聡・榎原雅治（『日本荘園絵図聚影』積文編第四冊責任者）・遠藤基郎・及川 亘・川本慎自・菊地大樹・末柄 豊・高橋慎一朗・高山さやか・谷 昭佳・鶴田 啓・藤原重雄・前川祐一郎・村井祐樹・村岡ゆかり・山口英男（第一冊責任者）・山家浩樹・鈴木沙織（学術専門職員）・堀本一繁（画像史料解析センター客員教授）・高橋敏子（共同研究員）

二、活動概要

(1) 予算

画像史料解析センター経費、共同利用・共同研究拠点経費（特定共同研究・複合領域）「荘園絵図調査方法論の高度化と調査関連情報の学術資源化に関する研究」（代表者 井上聡）、科学研究費基盤研究(A)「荘園絵図調査・解析方法に関する総括的研究と汎用的な歴史地理情報への応用研究（研究代表者 井上聡）」によって活動を行った。

(2) 活動内容

①『日本荘園絵図聚影積文編四 中世三』（二〇二三年度刊行予定）に収録する絵図のうち前年度までに校正ゲラの出校していた積文図について校正を進めた。また未入稿となっていた「播磨国鶴荘絵図一」、「播磨国鶴荘絵図二」、「出雲大社及び近郷絵図」、「筑前国観興寺縁起絵」、「越中国鳴戸村壘田図」のトレース図、積文および積文貼込図を作成した。現在、いずれについても念校が出校し、図版についてはほぼ完了している。

②同書に収録予定の慶應義塾図書館所蔵「山城国上野荘差図案」「山城国上野荘坪付差図写」「山城国桂川用水差図」を借用し、本所史料保存技術室で修理、撮影した。

③大分県宇佐市宇佐神宮・大分県立歴史博物館、香川県善通寺市善通寺に出

張し、「豊前国宇佐宮境内絵図」、「豊前国野仲郷絵図」、「讃岐国善通寺・曼荼羅両寺領絵図」に描かれた地域の現地調査を実施し、結果にもとづいてトレース図、積文図に修正を加えた。

④『日本荘園絵図聚影積文編四 中世三』に収録予定の絵図の解説文の執筆を進めた。

地震史料プロジェクト

一、プロジェクトメンバー

榎原雅治 杉森玲子 及川 亘 山田太造 荒木裕行 林 晃弘

二、活動概要

(1) 予算

①東京大学デジタルアーカイブズ構築事業経費「歴史地震火山活動データベースの構築・分析」

②地震火山噴火予知研究協議会史料・考古部会課題「文献史料による歴史地震に関する情報の収集とデータベースの構築・公開」（代表者榎原雅治）／防災リテラシー部会課題「近代以前の地震・火山災害に関する多角的研究」（代表者杉森玲子）／長期予測部会課題「地震関連史料に基づく近代以前の地震活動の調査」（代表者榎原雅治）

(2) 日記史料に基づく有感地震のデータベース化

一九世紀前半の日記史料を全国的に調査し、一八〇〇年から一八六七年までの有感地震に関する記事を収集している。現在、青森県から鹿児島県に至る五九件の日記史料の調査を完了しており（本年度七件追加）、既刊地震史料集に収録されていない記事や、修正が必要な記事を多数発見することができた。このうち、一九世紀中頃の巨大地震・大地震が多発した時期の有感地震及び無感の情報については、GIS（地理情報システム）を用いた「日記史料有感地震データベース」に収録し、二〇一八年より試作版を地震火山史料連携研究機構のサイトで公開している。このデータベースは、有感地震を発生時間ごとに集計・表示する機能や、有感地震の記録場所と時間と大きさの推移を図示する機能を有している。この取組みのために本年度に実施した

史料調査は下記のとおりである。

熊本県博物館ネットワークセンター・熊本市立図書館所蔵「瀬井家資料」の調査と撮影（七月、二月）／佐伯市歴史資料館所蔵「佐伯藩家老日記」（天保一四年～嘉永五）、「佐伯藩郡方日記」（文政一三～弘化二）の調査と撮影（九月）／都城島津邸所蔵『安山松巖記年代実録』『和朝年代記』の調査・撮影（十一月）／宮崎県立図書館・宮崎県文書センターにおける高鍋町立図書館所蔵文書ほか宮崎県下史料の事前調査（一月）／熊本県博物館ネットワークセンター所蔵高森町「瀬井家資料」の撮影・調査（二月）／山口県立文書館所蔵「中島市郎兵衛日記」「浦日記」の調査・撮影（三月）

(3) 既刊地震史料集のテキストデータ化と校訂作業
既刊地震史料集の全文テキストデータ化は昨年度に完了し、データベースを正式公開した。本年度は既刊地震史料集に収録されている史料本文について、原本による校訂作業を進めた。作業は学術専門職員によった。

(4) 情報付与のための研究

昨年度地震史料テキストデータベースを公開したが、ここに収録した史料中に記された地名を地図上に表示させるシステムを構築するために、自然言語処理を専門家とする情報工学研究者と連携して、AIによる史料中の地名表現の自動抽出、および、地名表現のマークアップに取り組んだ。『新収日本地震史料』第二巻に対して、AIによる地名表現自動抽出を行ったところ、F値として約〇・七七五だったことから、人手による抽出には及ばないが、利用可能な性能と判断した。この結果を自動抽出した結果に対して人手で地名表現の修正を行い、フィードバックさせることで、さらなる自動抽出の性能向上を図っている。また、自動的に緯度経度を付与する手法についても検討を開始した。

(5) 個別の地震・火山活動に関する分析

① 昨年度に引き続き、一八〇〇年から安政東海・南海地震に至るまでの期間の九州を中心とした西日本における記録を調査し、以下の新知見が得られた。
・弘化元年五月九日の被害地震を検出した。この日昼頃に発生した地震によって、日向都城と延岡で建物被害が生じていた。また日向小林、豊後臼杵でも新たな有感地震記録がみつきり、日向灘付近を震源とする地震であ

ると考えられる。同日には佐賀付近でも強い震動の記録が複数みつきり、同日のうちに二つの地震が前後して発生していたと考えられる。

・熊本県博物館ネットワークセンター所蔵「瀬井家資料」を調査し、文政九年～明治元年にいたる熊本県高森町の有感地震情報を収集した。安政元年の阿蘇地方での地震についてはこれまで簡略な記録しか知られていなかったが、「瀬井家日記」によって、一月五日発生した安政南海地震と、一月七日に発生した豊予海峡地震のそれぞれの地震による、阿蘇南郷谷の被害状況が具体的に知られるようになった。また同年三月に、阿蘇山中中央火口付近で、突然熱水が噴出し、死者が出たことが確認できた。

② 寛永一七年北海道駒ヶ岳噴火の関係史料を調査、分析した。従来参照されてきたものより噴火に近い時期の同時代史料から噴火に関する記述を見出すとともに、編纂物についても典拠に遡って記述を精査し、記述の一部に対しては火山的な検討を加えた。その結果、降灰で暗闇になったのは概ね一昼夜というのが松前での認識であり、従来の理解よりも短かったこと、これまで「火砕流を示唆する古記録はない」とされてきたが、同時代史料の中には、プラスチックや火砕流など、噴火中に起きた高温の流れ現象を示す史料に相当する可能性があるものが含まれていること、北海道駒ヶ岳からの火砕物が美濃や尾張にまで達して降下した、とする従来の理解には再検討の余地があること、噴火から二〇年あまり経っても火山活動が継続していたことを示唆する史料の記述があること、などを明らかにした。

③ 宝永四年富士山宝永噴火により、江戸でも火山灰（砂）が降ったことはつとに指摘されているが、江戸で記された関係史料を読み直した結果、屋内にも砂が入り、砂のためか病人も多く、月次登城した大名衆の人数は例月の三分の一に減少するなどの影響が出たこと、降砂が止んだ後も、風で吹き上げられた砂で視界が悪くなるほどであったが、噴火が終息した翌日には砂の吹上げが抑えられた可能性があること、砂は江戸城の堀にも投棄されたこと、などを明らかにした。

(6) 教養学部学術フロンティア講義の開講

① 教養学部前期課程Sセメスターに学術フロンティア講義「歴史史料と地

震・火山噴火」を開講し、榎原、杉森が講義を担当した(地震研からは竹健治教授と加納靖之准教授)。履修登録者八〇名(文系三六名、理系四五名)。単位認定に必要なレポートの提出者六五名であった。授業はすべてオンラインで行い、担当者以外の教員も視聴した。

(7) 文京アカデミー特別公開講座への出席

文京アカデミー特別公開講座として、二〇二二年一月一九日に文京シビックセンター文京シビックホール小ホールで東京大学史料編纂所特別講演会「歴史のなかの災害―史料から読み解く―」が開催され、榎原、杉森が講師を務めた(受講者二二六名)。

(8) 地震史料シンポジウムⅡの開催

一二月三日、地震史料シンポジウムⅡ「災害史料研究が拓く歴史学の新たな方法」を開催した。オンライン形式で実施し、当日は一三九名の参加を得た。趣旨、プログラムは下記のとおりである。

主催・東京大学地震火山史料連携研究機構 共催 東京大学史料編纂所／東京大学地震研究所／東京大学地震・火山噴火予知研究協議会 史料・考古部会

趣旨・近年の地震・火山史料研究の中で、地誌や年代記など、これまで評価の定まっていなかった史料や、外国語史料・金石文史料なども災害史料として活用しようという動向が生まれている。災害研究が歴史学の新たな方法を提起しているといえる状況をうけ、意見交換したい。

プログラム・趣旨説明 榎原雅治(史料編纂所)／地震史料のデータベースの現在 加納靖之(地震研究所)／安政東海地震の発震時刻―外国語史料の活用― 杉森玲子(史料編纂所)／一九世紀西日本の広域有感地震―近世日記の活用― 水野嶺(地震火山史料連携研究機構)／慶長奥州津波の実相―地誌の史料学と活用― 蝦名裕一(東北大学)／板碑に残る享徳地震の記録 佐々木淳(石巻専修大学)／年代記の史料学的研究と災害研究 片桐昭彦(新潟大学)／津波堆積物から見る南海トラフ地震 藤原治(産業技術総合研究所)／考古資料による歴史地震・噴火研究 村田泰輔(奈良文化財研究所)

(9) 鳥取県災害アーカイブ事業への協力

鳥取県で予定されている災害アーカイブ事業に協力した。

(10) 著書・論文・学会報告など

それぞれのプロジェクトメンバーの研究業績を参照されたい。

維新史料研究国際ハブ拠点形成プロジェクト

二〇一九年度より開始のプロジェクトで、本所の「維新史料綱要データベース」の英訳研究を推進し、かつ海外研究者との国際的な研究ネットワーク(ハブ拠点)の構築をおこなっている。

維新史料綱要データベースに登録している網文データについての英訳が、本事業の中核をなす。英文への翻訳については引き続き、外国人特任研究員トラビス・サイフマン氏が従事した。またデータの整備等に関しては、及川将基氏および加藤絵里子氏の参加を得ている。犬飼ほなみ氏には、研究支援の上でさまざまな協力をいただいている。

核心的な成果としての英訳網文データについては、引き続き登録と更新をすすめている。データベースの機能について大幅な改修を施し、入力校正の局面での機能を拡張したことにより、以前よりも作業効率の改善や進捗をみた。データ内容については、共通理解の高度化にもとづき、関連のグロッサリー構築をすすめている。今年度は、所内の「日本史用語翻訳グロッサリー・データベース」グループとの連携も開始し、登録データの一部共有も試みている。

国際研究会の開催については、長引くパンデミック状況に鑑み、今年度もオンラインでの開催とした。またメンバーの保谷徹が代表をつとめる科学研究費による研究とは、引き続き本事業との緊密な連携をとりつつ、相乗的な研究の進捗を期している。昨年度に続き、本所所蔵の特殊蒐書コレクションである史談会本の撮影・データ化をすすめ、成果をあげている。

今年度開催の国際研究会(二月一七日)では、ウエブ会議システム(Zoorn)を用いて報告および討論をおこない、合衆国からは研究者兩名(ロバート教授ならびにヘリヤー教授)を招聘して開催した。JSPS人文学・社会科学データインフラストラクチャー構築推進事業、および科研費基盤研

究(A)「在外日本関係史料の調査と貴重史料の研究資源化による維新史料研究国際ハブ拠点の形成」との共催である。今回の研究会では、本プロジェクトの開始以来、多々協力いただいているロバーツ教授とヘリヤー教授によるそれぞれの著作につき、日本語の訳書が上梓されたのを受けて、学術上の翻訳の諸問題に焦点を合わせて検討する機会を設けた。研究会の内容は次の通りである(使用言語は日本語)。

①ルーク・ロバーツ著『泰平を演じる 徳川期日本の政治空間と「公然の秘密」をめぐる』

・ルーク・ロバーツ(カリフォルニア大学サンタ・バーバラ校歴史学学位)「政治空間と言説空間——『泰平を演じる』の翻訳に関わる一考察」

・友田健太郎(放送大学博士課程)「『泰平を演じる』の翻訳について」

②ロバート・ヘリヤー著『海を越えたジャパン・ティー 緑茶の日本交易史と茶商人たち』をめぐる

・ロバート・ヘリヤー(ウェイクフォレスト大学歴史学学位)「ミルク&砂糖入りの緑茶…日本がアメリカのカップを満たした時代」

③コメント

・三谷博(東洋文庫、東京大学名誉教授)本研究集会の開催後には、ロバーツおよびヘリヤー両教授が出席しての、英訳データについての検討会も実施している。

従来から継続の横浜開港資料館との連携については、仏国外務省史料収集史料(データスキャン)につき、公開に向けての環境整備をすすめた。本所の図書室で公開している在外史料画像(HiCAT Plus)とあわせ、さらに包括的な検証をめざしてゆきたい。

なお、プロジェクトメンバーのサイフマン研究員は、二〇二二年度末をもって本所を退職された。同氏による多大な努力への感謝を附記させていただきたい。

天皇家・公家の「知」の体系としての文庫・宝蔵研究拠点創設プロジェクト

本プロジェクトは、二〇二〇年度より二〇二四年度までの五か年計画で、古代史料部門第三室が中心となって担当する。二〇二二年度は三年目である。二〇〇七年度以来、大型科研究費により遂行してきた天皇家・公家の文庫・宝蔵に関する研究を継承する研究拠点を創設することを目標とする。具体的には、①史料画像の蒐集・公開(国際発信)、②京都御所・同離宮等関係資料による文理融合型の学際的研究、③関係史料群の調査研究とその成果を論文や公開講座などで発信することを柱とする。

①史料画像の蒐集・公開 前年度に引き続き、東京大学史料編纂所のHiCAT Plusより、前年度に引き続き、(A)宮内庁書陵部図書寮文庫所蔵「家分け本」…九、六二三点・五六〇、九二三画像(①九条家本…二、八六一点・八四、九〇一画像、②伏見宮家本…二、〇九八点・六七、三八八画像、③桂宮家本〔日記〕…二二三点・八五、〇八四画像、④三条西家本…六五五点・九三七画像、⑤壬生家本〔函号F9〕…五三六点・五五、一三〇画像、⑥柳原家本…二、八六二点・一三八、〇一五画像、⑦白川家本〔日記〕…二二〇点・四一、一五三画像、⑧平田家本〔日記〕…一七九点・四二、六八〇画像、⑨続群書類従本〔旧御歌所本〕…七七九点・四二、六三五画像)、(B)山口県立山口図書館所蔵萩藩明倫館旧蔵今井似閑本…四三一点・三二、三七二画像、(C)⑩愛知県西尾市岩瀬文庫所蔵柳原家本…五一八点・七〇、七三〇画像、を本所DB (SHIPS) のうちHiCAT Plus から安定的にWeb公開すると共に(累計Web公開数…六六四、〇二五画像)、新たに二〇二二年九月より、(A)宮内庁書陵部図書寮文庫所蔵の(I)⑫内匠寮本「中井家文書」の内、①「寛政度」京都御所造宮関係文書〔函号E2-III〕・②「安政度」京都御所造宮関係文書〔函号E2-III〕約二万画像の高精細デジタル画像と、同文庫所蔵⑬「近世公家日記類」とその他図書寮文庫本(中井家文書を除く)約一三万六千画像(有栖川宮家本・阿波国文庫本・桂宮家本(③)・久我家本・御所本・青蓮院本・白川家本(⑦)・鷹司家本・土御門家本・庭田家本・野宮家本(⑭)・橋本家本・葉室家本・日野家本・日野西家本・平田家本・松岡家本・壬生家本(⑤)・函号に家わけ記号のないもの〔山科忠言卿記・泰重卿記他〕)のWeb公開を開始した。これにより、Web公開した天皇家・公家文庫関係資料のデジタル画像の

累計は約八二万画像となった(本所閲覧室の情報端末PCで公開している⑭京都御所東山御文庫所蔵禁裏本・⑮同別置本、⑯陽明文庫所蔵近衛家伝来本〔累計約三二万画像〕を含めると総計約一二三万像を公開中)。

なお、⑰「寛政度」京都御所造営関係文書」の残りの帳簿類約二万画像のデジタル画像の蒐集を完了し、平井聖編著『中井家文書の研究―内匠察本図面篇』全一〇巻(中央公論美術出版 一九七六―八五年)刊行の為に撮影後、同部に寄贈・保管されていた4×5モノクロフィルムを、同部の許可を得てスキヤニングしたデジタル画像二、三四四点も蒐集し、併せて⑱公開の準備をしているので、近世公家関係・内裏造営研究の為の研究環境は大きく進展することが予想される。

更にこの他のデジタル画像の蒐集に関しては、新規撮影及びマイクロフィルムからのスキヤニングにより、(A)宮内庁書陵部図書寮文庫所蔵の⑲柳原家本(『統史愚抄』・『基量卿記』・『禁裏番衆所日記』・『柳原紀光日記』他)・⑳野宮家本(『野宮定晴日記』・『野宮定之日記』・『野宮定功公武御用記』・『野宮定功公武御用記』・『野宮定功修理職奉行備忘』他)・㉑壬生家本(『孝亮宿禰記』・『于恒宿禰記』・『忠利宿禰記』・『敬義宿禰記』他)等を三〇、五一―八画像、(D)京都御所東山御文庫⑳別置本を三四、〇五六画像、合計で六四、五七四画像を蒐集した。

②京都御所・同離宮等関係資料による文理融合型の学際的研究

デジタル画像により蒐集した安政度御所造営関係資料を用いて、建築史学研究者・大学院生を中心とした「中井家文書」研究会により研究を進め、その成果として、二〇二二年一月一〇日には、京都府立京都学・歴史館に日本史や建築史の研究者・大学院生等約七〇名が集い、第三回国際研究会「御所(宮殿)・邸宅造営関係資料の地脈と新天地」を開催し、「報告集」三も刊行した(後掲国際研究会の項)。建築史学と文献史学とが融合し、上記デジタル画像等を活用した研究報告ができた(『建築史学』八〇号 二〇二三年三月所収の田島公「学界短信」も参照)。また、同じく歴史館では、二〇二二年二月五日に開催を予定しながら、新型コロナウイルス感染症第六波の拡大により延期した「第一二回陽明文庫講座」を同年五月一四日に開催した。引き続き、二〇二三年二月四日には「陽明文庫資料からの新発見Ⅲ」

をテーマに「第一三回陽明文庫講座」を開催し、約二八〇名の聴講があった。平安・鎌倉期の古写本が多く含まれる宮内庁書陵部図書寮文庫所蔵九条家本を中心に、未刻史料の翻刻および既往翻刻の入り・校訂を行い、陽明文庫所蔵近衛家伝来本に関しては、名和修・尾上陽介・田島公企画・監修「陽明文庫講座図録」四(東京大学史料編纂所・公益財団法人陽明文庫)に「陽明文庫資料からの新発見(三)」を刊行し、一三点の史料に関して新見解を発表した。

この他、古代史料部3室編担当の大日本古記録「陽明文庫本 勘例」下(岩波書店 二〇二三年三月)の刊行により、学界待望の陽明文庫本「勘例」七巻が、断簡も加え、その全容が活字本として初めて公開されたことは、長年の本研究プロジェクトの大きな成果でもある(「勘例」の当初の書名も「類聚雜例」であることが判明した)。更に、国内講演会としては、金鶏会館連続公開講演会(於金鶏会館・県立長野高校同窓会館)で、合計一三回の公開講座を対面で行い、延べ約七七〇名の聴講があった(後掲研究会の項)。

また、プロジェクト期間内の刊行を目指し『新訂増補日本古代人名辞典』上・中・下(吉川弘文館)の編纂も行っている。

研究会・講演会、刊行物、発表論文

【本研究プロジェクト主催・共催・講座】四件(内、国際研究会一件を含む)

- ① 公開講座「統・古典を読む―歴史と文学」全一三回
- ② 第三回 国際研究会「御所(宮殿)・邸宅造営関係資料の地脈と新天地」
- ③ 連続講座「中井家文書からみる近世内裏造営体制の特質」二回
- ④ 第一二回・第一三回「陽明文庫講座」

【編著書】二件

- 1 田島公、海野聡企画・監修『国際研究会「御所(宮殿)・邸宅造営関係資料の地脈と新天地(3)」報告集』(東京大学史料編纂所)、全九二頁、二〇二二年
- 2 名和修・尾上陽介・田島公企画・監修『陽明文庫講座図録4―陽明文庫資料からの新発見(3)―』(東京大学史料編纂所・公益財団法人陽明文庫)、全三三頁、二〇二三年

【研究論文・翻刻等】三五件

- 1 田島公「第七章 三川・穂・三野・科野・越の地域と社会」吉村武彦・川尻秋生・松木武彦『シリーズ 地域の古代日本 東国と信越』（KADO KAWA）、二四一―二八七頁、二〇二二年四月、査読無
- 2 田島公「京・難波における外交儀礼」広瀬和雄・山中章・吉川真司編『講座 畿内の古代学』第IV巻 雄山閣、一八四―二三五頁、二〇二二年九月、査読無
- 3 田島公「三川国造の時代」新編西尾市史編さん委員会編『新編西尾市史 通史編1 原始・古代・中世』（愛知県西尾市）第四章第一節、一八四―二〇四頁、二〇二二年一〇月、査読無
- 4 田島公・永井邦仁「三川国」と「波豆評」の成立」前掲書第四章第二節、二〇五―二二六頁、二〇二二年一〇月、査読無
- 5 田島公・永井邦仁・加藤安信「律令国家の成立と参河国波豆郡（播豆郡）」前掲書第五章第一節、二二八―二四六頁、二〇二二年一〇月、査読無
- 6 渡辺奈穂子・馬場基・田島公・松井直樹・金田章裕「平安時代前期の参河国と播豆郡」前掲書第五章第二節、二四七―二六四頁、二〇二二年一〇月、査読無
- 7 田島公・渡辺奈穂子・鈴木正貴「律令国家の時代」前掲書第五章第三節、二六五―二七七頁、二〇二二年一〇月、査読無
- 8 藤田佳希・村瀬貴則・田島公「院政期の参河国」前掲書第六章第二節、二九四―三三三頁、二〇二二年一〇月、査読無
- 9 藤井恵介「平安時代の宮殿建設システムと建築様式「和様」」編著書2、一一―一六頁、二〇二二年一二月、査読無
- 10 詫間直樹「後三条天皇と大嘗宮・太政官庁」編著書2、一七―三〇頁、二〇二二年一二月、査読無
- 11 上野勝之「文献史料から見た承明門の地鎮祭遺構―延久三年説の検証―」編著書2、三一―三七頁、二〇二二年一二月、査読無
- 12 堤淳也「安政度内裏築地移築工事における仮設物の復元的考察」編著書2、四二―四五頁、二〇二二年一二月、査読無
- 13 妹背伊織「安政度内裏の築地移築工事における大工小屋施設と作業現場の配置について」編著書2、四六―五二頁、二〇二二年一二月、査読無
- 14 海野聡「歴史資料としての日本の大工道具と工匠史料」編著書2、六三―六六頁、二〇二二年一二月、査読無
- 15 近藤奈史「平安宮内裏跡の発掘調査」編著書2、六八―七五頁、二〇二二年一二月、査読無
- 16 名和修「金瑠瑯」編著書1、二―三頁、二〇二三年二月、査読無
- 17 山本登朗「近衛家と『伊勢物語』―近衛信尋の『伊勢物語』関係自筆資料三点―」編著書1、四―五頁、二〇二三年二月、査読無
- 18 尾上陽介「僧綱補任」下」編著書1、七―九頁、二〇二三年二月、査読無
- 19 尾上陽介「寺田無禪書状」―近衛家七代に仕えた人物―」編著書1、一〇―一頁、二〇二三年二月、査読無
- 20 尾上陽介「寓記」―寺田無禪に贈られた春日社神楽の記録―」編著書1、一二―一三頁、二〇二三年二月、査読無
- 21 島谷弘幸「伝藤原俊忠筆「六条斎院歌合断簡（二条切）」」編著書1、一四―一五頁、二〇二三年二月、査読無
- 22 遠藤珠紀「近衛信尹書状土代」―関が原合戦前夜の近衛家と島津家―」編著書1、一六―一七頁、二〇二三年二月、査読無
- 23 田島公「長寛二年十二月某日付「野口御牧下司住人等解」（兵範記）仁安二年夏巻紙背文書」―「郡寺」と明記された史料―」編著書1、一八―二三頁、二〇二三年二月、査読無
- 24 小塩慶「丞相以下官位昇進雑例」（『類聚雑例』巻九中・下抜書）」編著書1、二四―二五頁、二〇二三年二月、査読無
- 25 藤原重雄「勘例」紙背文書―「城南寺競馬絵」に関する四条隆持書状―」編著書1、二六―二七頁、二〇二三年二月、査読無
- 26 新井重行「三長記」編著書1、二八―二九頁、二〇二三年二月、査読無
- 27 佐竹朋子「忠房公日記」―鳥羽・伏見の戦いに見る近衛家当主の危機意識―」編著書1、三〇―三三頁、二〇二三年二月、査読無
- 28 木村真美子「小朝拝関白宣下条々問答」編著書1、三四―三七頁、二〇二三年二月、査読無

〇二三年二月、査読無

(藤原重雄・小塩 慶・田島 公)

29 末柄豊「天文七年飛鳥井家蹴鞠記」編著書1、三八―三九頁、二〇二三年二月、査読無

三年二月、査読無

30 末柄豊「近衛植家書状案(香取民部丞宛)」―將軍の直臣になった問丸― 編著書1、四〇―四一頁、二〇二三年二月、査読無

31 藤原重雄「国立歴史民俗博物館所蔵『聆涛閣集古帖』所収「二条良実似絵写」―列影図の伝来に関連して―」(『画像史料解析センター通信』九八、二〇二二年一〇月、一〇一―一四頁)

32 藤原重雄「国立歴史民俗博物館所蔵『聆涛閣集古帖』所収「小野道風像写」―木村兼葭堂と吉田家―」(『画像史料解析センター通信』九九、二〇二三年一月、一六―一八頁)

33 藤原重雄「光格天皇が造らせた二つの輿」(『聆涛閣集古帖』と版本『聆涛閣帖』・手鑑『聆涛閣帖』)「近代における吉田家蒐集古文書の調査」(『吉田家旧蔵手鑑』『聆涛閣帖』内容略目録)(国立歴史民俗博物館編『いしえが、好きっ! ―近世好古図録の文化誌―』(二〇二三年三月、全二五五頁) *分担執筆

34 藤原重雄「高野大師伝絵 断簡「二人弟子」」(『国華』一五二九、二〇二三年三月、二七、二九―三一頁)

35 藤原重雄「天理大学附属天理図書館所蔵『春日社行幸記』(弘安九年中臣祐春記)」(『東京大学史料編纂所研究紀要』三三、二〇二三年三月、一一五―一三四頁)

本研究プロジェクトは、特任研究員佐竹朋子氏、学術専門職員太田克也・芝崎有里子・高橋宙暉の各氏の協力を得ており、画像史料の蒐集には新井重行氏(古代史料部2室)、公開の為のメタデータの付与に関しては遠藤基郎氏(古文書・古記録部)の指導・協力による。更に、『新訂増補日本古代人名辞典』上・中・下(吉川弘文館)の編集は、学術専門職員榎佳子・渡辺奈穂子の両氏の協力による。また、本プロジェクトには、一般社団法人深江郷土資料館代表理事で(株)イシカワの石川健二会長、(株)深江商事の石川智也代表取締役社長、一般社団法人長野野教育文化振興会の田島至理事、の各氏からの奨学寄付金も使用している。

「原本史料情報解析」の方法による南九州関係文書の保全と研究プロジェクト活動報告

一、プロジェクトメンバー

尾上陽介(図書部長)・小瀬玄士・渋谷綾子・高島晶彦・高山さやか・谷 昭佳・寺尾美保(学術専門職員)・西田友広・畑山周平・本郷恵子(代表)・松澤克行・宮崎 肇・村井祐樹(幹事)・村岡ゆかり・山口悟史・山田太造

二、活動概要

本プロジェクトは、二〇一五―一九年度の五年間にわたる「原本史料情報解析による複合的史料研究の創成事業」を継承し、同プロジェクトで実施した原本史料研究の方法を用いて、鹿児島県を中心とする南九州地域に関わる原本史料の保全・研究・社会還元事業を行うものである。

本プロジェクトは二〇二〇年一〇月に発足した。発足の経緯は以下の通りである。「原本史料情報解析による複合的史料研究の創成事業」は、国宝『島津家文書』の修理・研究をおもな内容としていたが、同プロジェクト遂行の過程で、鹿児島県の島津興業および鹿児島銀行の二つの企業とご縁がなくなり、奨学寄付金を受領する運びとなった。島津興業からは「島津家文書研究のため」、鹿児島銀行からは「鹿児島県の歴史遺産の保存状態の改善/鹿児島県の歴史・文化等の研究事業への貢献」という目的で、それぞれ奨学寄付金を受けている。そこで両社からの寄附金を活用する新たな研究事業として、本プロジェクトを立ち上げた。実施にあたっては、科研の基盤研究(B)「原本史料情報解析」の方法による中世西国武家文書の研究と展開(代表・本郷恵子)のグループと連携する体制で進めている。

本年度は、科研グループと連携して、鹿児島市の①黎明館所蔵中世史料②谷山文書③霧島神宮文書④三角文書⑤柏原文書等の調査・撮影を行った。

また本所では、文化庁の「国宝重要文化財等保存・活用事業費補助金」の交付を得て、本年度から二〇二六年度までの五年計画で、『島津家文書』の

うち「歴代亀鑑」「宝鑑其一」「宝鑑其二」の手鑑計四帖の修理を実施することになった。修理前撮影や解体時の調査等について、技術部・図書部等と協力して進めている。

(本郷恵子)

研究発表会

第二八九回その1 二〇二二年六月三〇日 担当…中世史料部門

「皇室制度史料」と写本研究」

新井重行

本発表はオンライン形式で行われた。はじめに『皇室制度史料』の書式上の特徴について、編纂の意図をどのように表現しているかという視点から、いくつかの具体例を示しつつ説明を加えた。

次に、写本の検討結果を翻刻にどう生かすかということについて、事例を示しつつ説明した。とくに『貞観儀式』の「元正受朝賀儀」について、写本には参照すべき善本がなく、研究には版本が利用されているが、版本の本文には後人の書入れが混入しているなど問題点が多いことを指摘し、混入した部分を除くためには、流布本とは別系統である陽明文庫本を参照することが有効であることを紹介した。ただし、その陽明文庫本も、「元正受朝賀儀」として伝わる別写本の影響を受けた可能性があり、それが『貞観儀式』の本文であるかは検討を要するという見解もある(神戸航介「押小路本『即位式』と『儀式』の写本系統」『書陵部紀要』七二、二〇二〇も参照)。

最後に、写本研究の課題として、宮内庁書陵部図書寮文書所蔵柳原本『御即位部類』(柳一六一八)の構成を紹介した。この写本はいくつかの写本を合冊したものであるが、そのうちの多くが中御門本である。奥書に見える桂昭房・中御門宣順は、ともに後西天皇に藏人として仕え、東山御文庫本の書写・校合に関わった人物であり、これらの写本は、東山御文庫本と親近性の高い、良テキストを伝える写本と評価できる。しかし、このようなことは「家わけ」による蔵書群の把握からは分かりにくい情報であり、今後、目録やデータベース等を充実させていくに際しては、個別の情報をもとのように拾

い上げられるかを検討する必要がある。また筆跡の判定など、ある程度の経験を要する技術を、いかに共通のデータとして蓄積していくかも重要な課題であると考えられる。

第二八九回その2 二〇二二年七月一四日 担当…中世史料部門

「室町殿主催行事」と室町殿家司・伝奏」

林 遼

足利義満以後の將軍家家督(室町殿)は、幕府の長であると同時に公家としての側面を持ち、自らの昇進儀礼や武家祈禱・武家八講に公家衆や権門寺社を動員した。これは鎌倉・南北朝期までとは異なる室町期將軍家独自の性格である。

先行研究では、義満の室町殿家司編成を論じる中で、義満期における昇進儀礼や武家祈禱・武家八講の運営体制が明らかにされている。しかし義持期以降になると、室町殿自身の朝廷公事への参加の実態は論じられる一方、昇進儀礼などの運営体制はあまり注目されていない。そこで本報告では、公家としての室町殿が主催する諸儀礼をまとめて「室町殿主催行事」と呼称し、義教期を事例として、その運営体制の構造的把握を試みた。

まず本報告における「室町殿主催行事」の定義を示すと、①公家衆ないし権門寺社を動員すること、②行事担当者として奉行家司や伝奏が設置されること、③義満公家化以前の幕府將軍が実施していないか、実施していても規模・性格が異なること、の三点である。続いて上記の定義に当てはまる行事を提示すると、概ね四種類に区分することができる。

A…室町殿の官位昇進儀礼

任右大将拝賀や任内大臣拝賀、任大臣節会・大饗、任左大臣拝賀・着陣など

B…武家祈禱

室町第における修法、寺社における祈禱、陰陽道祭など

C…武家追善仏事

武家八講(等持寺八講)、將軍家周忌仏事(八講堂結縁灌頂、曼荼羅供など)

D…室町殿の寺社参詣、晴の行事

石清水放生会上卿下向、南都や石清水八幡宮への寺社参詣、邸宅の移徙、蹴鞠会、和歌会

右のA～Dの区分に従い、義教期における諸行事の運営体制を分析した結果、以下の特徴を見出した。まずいずれの行事においても伝奏が設置されており、伝奏は行事参加者の人選や行事遂行上の決定事項を室町殿に伺い、その指示を奉行家司や下家司・幕府奉行人に伝達する役割を果たす。また行事参加者に対し、経費支給を命じる伝奏切符を発給している。次に奉行家司は、昇進儀礼(A)とDのうち石清水放生会上卿参向にのみ設置されており、それ以外の行事では設置が確認できない。一方で幕府側の担当者を見ると、義教近習赤松満政や政所執事伊勢貞国ないし幕府奉行人が、伝奏切符をうけて公方御倉に対し経費支出を命じていたことがわかる。

そこで注目したのは、こうした「室町殿主催行事」の経費支出手続きが、室町期の朝廷における公武共同執行方式による公事用途支出方式と類似することである。公武共同執行方式とは、儀式伝奏を公家側の財政担当者、摂津氏の務める惣奉行ないし政所奉行人を武家側の財政担当者として、公事用途支出がなされる制度だが、同方式における儀式伝奏と惣奉行・政所奉行人の役割は、「室町殿主催行事」における伝奏と、室町殿近習・幕府奉行人のそれにちょうど対応する。加えて重要なのは、「室町殿主催行事」の伝奏は、いわゆる「武家伝奏」と人的に重複することである。ここから「武家伝奏」は、従来公武交渉の仲介者として理解されてきたが、「室町殿主催行事」専任の儀式伝奏という性格も併せ持ったことを明らかにできる。

最後に「室町殿主催行事」の運営体制を論じる際に有用な史料群として、中山定親・親通関係史料を紹介した。義教・義政期に「武家伝奏」を務めた中山定親・親通父子は、「室町殿主催行事」で伝奏を務めるとともに、行事についての別記や切符案を執筆し、行事に関する先例も蓄積・保存した。こうした史料群は現在醍醐寺文書や宮内庁書陵部に伝来しているが、その全貌や伝来過程は部分的にしかわかっていない。中山定親の日記「薩戒記」の伝来過程を整理した研究に学びながら、中山家伝来の「室町殿主催行事」関係史料を収集・検討することを今後の課題としたい。(参加者数・四六名)

第二九〇回その1 二〇二三年三月三〇日 担当 古文書・古記録部門

「室町期の国衙領の本来について」

榎原雅治

中世後期の国衙領については特定の公家や寺社に相伝される国があったことが村田正志氏や田沼睦氏の研究によってよく知られている。地域史の通史で言及されることも少なくなく、播磨のように内部の知行体制が知られている国もある。しかし全国的に見た場合、鎌倉末期の院宮や鎌倉殿の分国と中世後期の国衙領の領有のあり方の間にどのような連続性があるのか、そもそも中世後期に相伝される国衙領がどのくらいの広がりをもっているのか、そうではない国衙領とはどのような違いがあるのかなど、基本的なことは未解明となっている。

本報告では、最初に国衙領を相伝する公家や寺社の権利は、史料上「国務」「吏務職」「国衙職」などの名称で呼ばれ、基本的には治天によって給国されるものであること、鎌倉時代の知行国主の系譜をひくものであることを確認した。そのうえで、いくつかの国においては、治天以外の人物によって「国務」「国衙職」が補任されていること(治天以外が給国権が保持されていること)に注目した。給国権の保持者別にみると、a 伏見宮(播磨)、b 青蓮院門跡(能登)、c 足利家(駿河・越後・武蔵・相模・伊豆・下総・三河)、d 在位中の天皇(和泉)、e 後亀山上皇(紀伊・因幡・若狭・越前・讃岐)に分類できる。このうちaは後深草院以来の持明院統の分国、bは後伏見院からその皇子に譲られた分国、cは三河を除き鎌倉殿の分国、dおよび三河は花園院の分国が萩原宮直仁を経て後小松天皇やその准母北山院裏松康子(足利義満室)に伝わった国、eは後醍醐天皇とその生母の分国で、後醍醐の吉野出奔後は北朝に接収され、南北朝合一後、後亀山の没後、足利義持(北山院の猶子)に接収され、その生母勝曼院(藤原慶子)の菩提所に寄進されたとみられる。このように中世後期に治天以外が給国権を保持している国について検討すると、いずれも鎌倉末期の分国からの継承関係を想定することが可能である。本報告では、給国権の保持者を国衙領の本来と呼んだ。

次に「国衙職」の保持者に注目し、保持に至る経緯が複雑な信濃、甲斐、

美濃について検討を加えた。信濃は室町期には室町殿の料国となっていたことが知られているが、南北朝期には久我家の知行国であった。しかし、源氏長者だった久我通相が信濃を氏社東大寺八幡宮に寄進したことによって、信濃は東大寺八幡宮を本家、久我家を国衙職とする国となった。さらに応永九年、源氏長者が久我具通から足利義満に交替すると、信濃は義満の料国とされた。義満の信濃料国化の内実は守護職の不設置に加え、最大の国衙領春近領の領有も含んだものであり、義満は信濃国衙職を取得したものとみられる。その背景には信濃新守護小笠原氏の入国に対する信濃国人たちの抵抗運動（大塔合戦）を、幕府自ら封じ込めようという政治的な意図があったと考えられる。

甲斐は鎌倉後期には大覚寺統の分国であり、本家の地位は龜山院からその皇女昭慶門院を経て後醍醐皇子の世良に譲られた。世良の早世後は後醍醐が回収したと思われるが、後醍醐の出走後は北朝に接収されたらしく、両朝分裂後もなく、光厳院より洞院家に知行権が安堵されている。

美濃も鎌倉後期には大覚寺統の分国であり、本家の地位は龜山院からその後宮昭訓門院に譲られた。しかし昭訓門院は所生の皇子恒明の登極を望んで後宇多院と対立し、幕府と持明院統の伏見院に接近する。その代償として美濃を伏見院に譲ったらしく、南北朝後期には北朝・後光厳院によって崇賢門院（後光厳院後宮）と西園寺家が国衙職に補任されている。その後、崇賢門院のもつ国衙職はその猶子大慈院聖久（義満女）を経て、尼門跡大慈院に伝えられる。西園寺家の国衙職保持も一五世紀後半まで確認できる。

次に中世後期に確認できる国衙職保持の開始時期と保持者の共通性を検討した。開始時期をみると、鎌倉期から継続するのは寺社の造営料国が多い。これに対し、建武政権崩壊後、新たに補任された国衙職保持者は、足利家分国における今川・上杉氏・千葉氏のほか、醍醐寺・広橋家・万里小路家への集中がきわだっている。特に義満の権威確立期に開始するものが多く、義満によって登用された側近公家への経済的な優遇策として採用された政策の結果であろうと考えられる。

一方、中世後期を通じて国衙職を確認できない国も二〇か国にのぼるが、このうち一一か国が九州・西中国に集中している。これは国衙職の新たな設

定が盛んに行われた義満執政初期、征西將軍府や足利直冬党の勢力が優越した地域にあたる。経済的利得の見込めないこの地域では、新たに国衙職を設定することが行われなかったものと考えられる。

第二九〇回その2 二〇二三年三月三〇日 担当…古文書・古記録部門

「日本史料としてのオランダ語文書―日本商館文書とその周辺―」

松井洋子

海外史料室では、『日本関係海外史料』を日本史料として使うに足る史料集とするため、厳密な校訂、正確で過不足のない逐語翻訳に努めてきた。編纂の際に欠かせないのが対象史料についての史料批判であることは、外国語史料であっても同様である。

本報告では、定年退職にあたって、報告者がこれまで編纂に携わってきた「オランダ商館長日記」を中心に、日本と関わるオランダ語文書について、文書群の構造、その中の文書類型とその機能などについての史料学的検討の一端を披露した。

まず、オランダ東インド会社が日本に商館を開設して以降の、日本をめぐる船と情報の流れを確認し、その中で作成された膨大な文書が、主に「日本商館文書」と「オランダ東インド会社文書」という文書群として、オランダ国立中央文書館に伝存する経緯を紹介するとともに、平戸に置かれ長崎出島へ移転した在日本オランダ商館の概要を示した。

次に、日本商館文書について、どのような種類の文書があり、そこから何がわかるのかを論じた。

中でも代表的なのが、商館長あるいはその代理が記帳する公務日記である。日本商館の日記は一六三三年から一八六〇年まで二〇〇年以上にわたるものが十数年分を除いて残っている。日記は、商館の記録、引継・参考のための情報源という機能とともに、商館と商館長の上司への業績報告の側面を持ち、そのことは、記載事項にも影響を与えている。

日記の始期、作成・伝達・受領・保管過程については、完全に解明されてはいない。報告では、東インド会社各地商館における日記作成の始期と終

期、日本商館の日記の複本の数と送付のあり方、商館長による自署の有無、見出しと目録の付与の状況などについての検討課題に触れた。こうした分析は、史料編纂所が蓄積してきた『日本関係海外史料目録』とその後継の目録情報のうえにはじめて可能になるものである。

日記に加え、商館長と上級職員そして船の船長を構成員とする商館の評議会の決議録、商館の受発信書翰の控簿が残っており、それらを合わせて読むことで、バタフィアからの命令、各地商館からの情報、日本の当局とのやりとりを受けて、商館としての行動が決定されていく様子を追うことができる。

オランダ東インド会社の経理は複式帳簿によって行われ、各商館でバタフィアを本店とする支店帳簿が作成されていた。その基幹帳簿が「仕訳帳」と「総勘定元帳」であり、日本商館では一六二〇年代から一八〇八年までのものが、おおむね残っている。この両帳簿に集約される多くの補助的帳簿類については現存するものは限定的であるが、報告では、「船荷送状」「注文書」「参府経費及び贈物経費計算書」について、史料の画像を提示しつつ、その書式と記載内容及び基幹帳簿との関係等について述べた。

最後に、十八世紀末から十九世紀、オランダ東インド会社の解散と、ナポレオン戦争期のオランダ連邦共和国のフランス併合からオランダ王国の成立に至る本国の変化に伴う、日本商館の主要文書の変化について展望した。

「日本商館文書」は、商館の業務構造を反映する多様な文書が系統的に残存しており、バタフィアの東インド政庁の出先機関の文書群としては、質量ともに最大のものといえる。また、東インド会社時代と会社解散後の文書が連続的に残っている点でも稀有の文書群である。日本史研究の幅を広げる大きな可能性を持つその多様な文書への関心が、さらに広がることを期待したい。(オンライン開催)

国際研究集会

「第七回東アジア史料研究編纂機関国際学術会議」

二〇二二年一月一日・一日

二〇二二年一月一日・一日、第七回東アジア史料研究編纂機関国際学術会議をオンラインで開催した。この学術会議は史料編纂所(日本)、国史編纂委員会(韓国)、社会科学院近代史研究所(中国)を幹事機関として、各国の史料研究・編纂及び利用に関わる機関・研究者等が集まり、二年に一度、回り持ちで開催しているもので、第七回は国史編纂委員会が主幹事となり二〇二〇年五月頃に韓国で開催の予定であったが、新型コロナウイルス感染症流行のため、延期(複数回)を経てオンライン開催となったものである。

今回は「東アジア歴史資料編纂の伝統と現代化」をテーマに各国が三報告を用意し(従来は五報告であったがオンラインのため縮小)、主幹事の韓国側において事前に三か国語四二八ページの予稿集を作成、会議当日は三か国語同時通訳ありで進行的。最大アクセス数は六三であった。ただし日本と中国は、メイン会場の一アクセスに三〇五名の参加があった。

発表者と発表のタイトルは次の通りで、中国における史料収集・史料利用の幅広い取り組みや韓国におけるデジタル技術を活用した史料活用急速な進展について知ることができ、有意義であった。

「報告1」張恩晶(韓国国立中央博物館)「歴史資料のデジタル復元とコンテンツ活用」

「報告2」徐莉(中国第一歴史档案馆)「満州語本『清実録』全文検索データベース構築とその価値」

「報告3」末柄豊(東京大学史料編纂所)「『大日本史料』の編纂」

「報告4」谷昭佳(東京大学史料編纂所)「オーストリアハンガリー帝国東アジア遠征隊古写真史料集の編纂」

「報告5」朴ナヨン(韓国国学振興院)「人工知能(AI)による伝統記録遺

産の現代化作業」

〔報告6〕 馬忠文（中国社会科学院近代史研究所）「文献競売図録と稀少史料の収集」

〔報告7〕 羅敏（中国社会科学院近代史研究所）「デジタル人文と中国抗日戦争史研究」

〔報告8〕 黒嶋敏（東京大学史料編纂所）「画像史料による台湾の復元的研究」

〔報告9〕 金玄鍾（ソウル市立大）「韓国歴史地理情報システム（HGIS）の構築動向と課題」

（鶴田 啓）

「黄泉の国との契約書―東アジアの買地券―」

二〇二二年六月三日

本セミナーは、HMC公募研究A「金石文資料からみた東アジアの墓葬文化―墓誌・買地券を中心に―」の成果と課題を、一般の方々にもわかりやすく紹介すべく、オンライン（Zoom）で開催したものである。

第一報告の王海燕氏（東京大学史料編纂所外国人研究員／浙江大学歴史学院教授）「中国の買地券―呉越地域の事例を中心に―」は、買地券の発祥の地である中国、そのなかでも出土例が多くメッカと言える呉越地域の事例を中心に紹介しつつ、買地券に記される内容や素材・形体、その時代的变化について論じた。最新の研究動向にも触れつつ、出土状況の特徴や墓誌との関係、買地券文化の伝播からみる人の移動や地域間交流、土地所有の問題など、様々な論点を提示する、示唆に富む報告であった。

第二報告の稲田奈津子「朝鮮と日本の買地券」は、朝鮮半島と日本列島で現在までに確認されている六事例のすべてについて、その概要を紹介するとともに、買地券文化が周辺諸国に伝播する経路とその限界について論じた。

紹介した事例のなかには、今回の公募研究による実物調査・出土地踏査の結果、またCOVID-19のため実物調査は叶わなかったものの、所蔵館の協力により新たに入手した精細な画像を用いた検討の成果も含まれている。

質疑応答では、墓地の相続権についての質問を糸口に、買地券と現実の土地所有権との関係について意見交換をおこなった。一七時半から一九時半ま

での予定のところを、五分ほど超過して終了した。

当日は、日本各地および海外から一八名の参加を得た。事後アンケートからは、買地券という耳慣れないテーマであったが大変興味深かった、中国・朝鮮半島・日本にかかわる文化現象をその類似点や相違点とともに学ぶことができた、といった感想が寄せられた。

東京大学ヒューマニティーズセンター第69回オープンセミナー

東京大学ヒューマニティーズセンター（HMC）・東京大学史料編纂所主催、JSPS科研費（22K00837）「東アジア墓葬文化の伝播と展開―金石文資料の形態的分析を中心に―」（研究代表者：稲田奈津子）共催

（稲田奈津子）

「17-18世紀のインド洋―日本をめぐる海域史研究の広がりのために―（パート2）」

二〇二二年六月二四日

二〇二二年一月二六日に開催されたパート1に続き、パート1と同じくZoomウェビナーによる完全オンライン、同時通訳付きで開催された。事前登録数一五四名、当日の参加者は八八名（うち外国人三四名）だった。

日本史学においては、一九八〇年代以降、14-18世紀の東アジア海域史が盛んになり、漢文史料の本格的な利用が始まった。その流れは田中健夫・村井章介など東京大学史料編纂所の研究者によって牽引され、豊富な成果を上げてきた。しかし、現在では、用いる史料・テーマなどの面で行き詰まり感が指摘されている。

本研究集会では、東シナ海・南シナ海域（以下、シナ海域）と比較し、シナ海域との連関を明らかにするために、インド洋を視野に入れることを提案した。シナ海域とインド洋は、マラッカ海峡+スンダ海峡によって隔てられているとはいえず、そこで展開された活動は実際のところ互いに連動していたからであり、また、インド洋史研究で行われている問題の立て方や、用いられている史料や手法は、シナ海域研究においても援用可能なものが多いと考えるからである。

パート1が、法や儀礼など、政治・社会的なテーマに光を当てたのに対し、パート2では船の動き、貿易、消費文化といった経済・社会的な側面を扱った。

松方冬子による趣旨説明・登壇者紹介につづき、大東敬典氏が「Rethinking the Dutch Decline in the Persian Gulf: An Analysis of VOC Shipping Lists」と題して報告を英語で行った。大東報告は、サファヴィー朝衰退によりペルシア湾における砂糖貿易が衰退したとされていた従来の通説を批判し、オランダ東インド会社（VOC）文書「異国船リスト」の分析に基づいて、衰退したのはVOCであって、砂糖貿易ではないことを主張するものであった。それに対し、岡本真氏がコメント・話題提供を行い、日明貿易の研究においても史料を用いる際の注意点など、大東氏の研究との共通点を指摘した。

休憩をはさんで、Martha Chalkin氏が、「Ivory in the Bay of Bengal」と題して、前近代から近代にかけてのベンガル湾における象牙の生産と消費のあり方について包括的な展望を示した。それに対し、櫻庭美咲氏が17-18世紀シナ海域における磁器の流通について、詳細な紹介を行った。両氏の報告においては、豊富な図版が提示され、視覚的にも豊かな内容であった。

最後に、1時間の総合討論が、Q & Aに寄せられた質問を司会のTravis Seifman氏が紹介し、登壇者が答える形で、活発に行われた。

海外を含めた多くの参加者を得ることができ、新しい一歩を踏み出したという手ごたえを得ることができた。共催をいただいた諸機関にも、この場をお借りしてお礼申し上げる。

東京大学史料編纂所共同利用共同研究拠点共同研究（海外史料領域）
「本所所蔵在外日本関係史料の多角的利用のための翻訳研究」（モンスーンⅡ）主催。東京大学HMC、東京大学史料編纂所、維新史料研究国際ハブ拠点と共催。

（松方冬子）

国際ワークショップ「人文学研究データ管理の最前線 (Frontiers in Humanities Research Data Management)」 二〇二二年七月二五日

二〇二二年七月二五日～二九日の間、デジタル・ヒューマニティーズにおけるトップカンファレンスである国際会議「Digital Humanities 2022」がホスト開催された。本会議は東京大学がホストした。アジアでは初めての開催となった。会場は東京都市センターホテルだったが、COVID-19の影響のため、報告の多くはオンラインにて行われた。本会議では、開催校のイベント (Local Organizer's Session) が設けられた。その一つがワークショップ「人文学研究データ管理の最前線 (Frontiers in Humanities Research Data Management)」である。本ワークショップは、本所ならびにJSPS科研費18H03576 (基盤研究(A)「統合史資料画像データの生成と駆動方式の確立による人文科学研究基盤の創出」(研究代表者：山田太造)) が主催した。

本ワークショップは、データ駆動社会を実現していく上で「データ」は「石油」に相当する社会インフラとして位置づけられている状況の中、研究データ公開・管理ポリシーの策定を含む研究データ管理は重要な課題として位置づけられるが、人文科学研究におけるデータとその管理について実践的取り組みをベースに議論することが目的である。第六期科学技術イノベーション基本計画(二〇二二年三月) 統合イノベーション戦略推進会議による「公的資金による研究データの管理・利活用に関する基本的な考え方」(二〇二一年四月) などから、特に科研費など公的資金を補助に実施して研究では、研究データ管理は避けられない課題になった。京都大学では「研究データ管理・公開ポリシー」を二〇二〇年三月に公開し、その後、名古屋大学・東京工業大学・東北大学などが公開した。本学は、京都大学の公開から約三年後の二〇二三年二月ようやく公開に至った。多くの研究データ管理・公開ポリシーは研究データの定義・帰属・管理・利活用・機関による支援について定めている。研究分野や研究データの特性に応じてデータの管理・保存・利活用を進めていくことは避けられないことから、人文学もしくは歴史学などの分野もしくは機関ごとに検討を進めていくことが求められているため、本ワークショップはその契機となるべく開催した。また、日本では初めての人

文学研究データに関するイベントとしても位置づけられる。

本ワークショップは、実践的なデータ管理に関わる五本の報告を行った後、デイスカッションを行った。報告者は次のとおりである。

- ・後藤真氏（人間文化研究機構国立歴史民俗博物館 准教授）
- ・馬場基氏（国立文化財機構奈良文化財研究所 上席研究員）
- ・山田太造（東京大学史料編纂所 准教授）
- ・原正一郎氏（京都大学東南アジア地域研究研究所 教授）
- ・青木学聡氏（名古屋大学情報連携推進本部 教授）

後藤氏、馬場氏および山田はそれぞれの所属機関におけるデータの性質・収集方法・管理方法・管理システム・データの利用条件・活用といった、実践的な研究データのフローを示した。原氏はそれ以外にも、京都大学における研究データ管理・公開ポリシー策定のメンバーについても報告があった。青木氏は、大学ICT推進協議会研究データマネジメント部会（AX IES）の主力メンバーであることから、特定の分野に依存しない広い範囲での研究データ管理の課題や支援手法について報告があった。

デイスカッションでは関野樹氏（人間文化研究機構国際日本文化研究センター 教授）を司会に、五名の報告者によるデイスカッションを行った。この際、川口洋氏（帝塚山大学文学部 教授）より、「ご自身がこれまで実践してきた人文学研究データの収集や管理方法について紹介があった。人文学研究データの多様性や性格について議論したが、時間の制約上、十分な議論とは言えなかった。しかしながら、人文学研究データ管理という新たな研究課題については認識されていく契機としては十分な成果をあげたと考えている。本ワークショップにとどまる議論ではないことから、継続してこの議論を進めていきたい。

（山田太造）

「幕末維新史研究と井伊家史料」

二〇二二年一〇月一日

二〇二二年一〇月一日（土）、本所主催、JSPS科学研究費補助金基盤研究(B)「日本近世史科学の再構築―基幹史料集の多角的利用環境形成と社会

連携を通じて」及び本所維新史料研究国際ハブ拠点形成プロジェクトとの共催、JSPS科学研究費補助金基盤研究(A)「在外日本関係史料の調査と貴重史料の研究資源化による維新史料研究国際ハブ拠点の形成」の協力により、国際研究集会「幕末維新史研究と井伊家史料」を開催した。

この研究集会は、『大日本維新史料 類纂之部 井伊家史料』（以下『井伊家史料』）の出版が二〇一九年の第三十巻で完結したことを記念して企画された。もともとは二〇二〇年三月に開催を予定していたものの、新型コロナウイルス感染症の拡大によって中止を余儀なくされ、今回オンラインに形式を変更して開催したものである。

『井伊家史料』は、現在国指定の重要文化財として彦根城博物館に所蔵されている「彦根藩井伊家文書」を編纂・出版したものである。「彦根藩井伊家文書」は、江戸時代を通じて彦根三〇万石を領した井伊家に伝来した文書群であり、江戸時代中期から幕末を中心として、井伊直弼大老在任中の文書のほか、藩主家文書、彦根藩政文書といったものからなる約二万七千点の文書が残されている。長らく未公開であったが、一九五九年から刊行が開始された『井伊家文書』によって井伊直弼関係史料が、そして一九七八年度から彦根市が行った史料調査報告書によってその全体像が、学会・社会に共有されることとなった。

この研究集会は、『井伊家史料』についての理解を深め、広く活用されることで、幕末維新史研究の発展につなげていくことを目的として、二部構成とした。第一部では、『井伊家史料』をはじめとする幕末の諸史料から十九世紀半ばの日本政治のありよう及び特質を問い直し、第二部では『井伊家史料』について編纂者としての立場、及び井伊家・彦根藩研究者としての立場から見つめるものである。第一部では北海学園大学名誉教授の菊地久氏とソウル大学校人文大学東洋史学科教授の朴薫氏に、第二部では東京大学名誉教授の宮地正人氏と京都女子大学文学部教授の母利美和氏に、それぞれご講演いただいた。司会は本所教授の箱石大氏が担当した。

研究集会の冒頭では、本郷恵子所長からの挨拶、本所教授の杉本史子氏による趣旨説明が行われたのち、各講演が行われた。

まず第一部の菊地氏による「幕末の幕府政治と井伊直弼」では、研究史を

整理しながら自身の研究の出発点、問題意識に触れたのち、第一に、表方における合議分掌と奥向きでの裁可是認という多極分権的な幕府の意思決定システムにおいて、井伊直弼やそれに先行する阿部正弘・堀田正睦がどのような政治的リーダーシップを発揮したのか、第二に、諸侯諮問に見える合議分掌という幕府の政治システムの間口開放は、政治課題に対する最適解抽出方法ではあっても繰り返されるとかえってリーダーシップの弱体化を招きかねず、その性格をどう評価するのか、という二つの論点が提示された。そして、井伊直弼について、そのリーダーシップの発揮方法が、既存の制度を前提としてその枠内でできることを追求する制度的リアリズム、そして制度が崩壊しつつあり残骸となりつつある中で発揮される状況下のリアリズムという政治的リアリズムの二類型のどちらでも評価できないことを指摘した。

続く朴氏の「幕末期幕府権力をどう見るか―「幕閣」という謎」では、一般に変革期においては開明派と守旧派との対立構造が暗黙裡に設定され、歴史の勝者となる前者に注目しやすい傾向があり、幕末維新期についても、開明派が幕政に参与する機会を得て改革を試みたものの、守旧派の反発によって失敗したことで明治維新を迎えるという叙述が多くみられ、薩長に代表されるいわゆる雄藩や井伊直弼については研究蓄積が多くみられるのに対して彼らを挫折させた幕閣に関する研究が薄いという課題が提示された。そのような挫折の具体例として徳川斉昭の幕政参与や井伊直弼の老就任を挙げ、立場や意見は異なるものの、共に幕閣に対して意思を押し通すことが難しい状況が繰り返されていたことが指摘される。こうした「守旧派」幕閣が強固に存在し続けたことの一因は、藩政と比較すると主君親裁がなく、激論が度々交わされるような御前会議もなかったことに求めうるのではないかと見通しが示された。そして大身の家門や譜代大名、雄藩の外様大名を差し置いて、小身の譜代大名が老中として幕政を専断する体制自体、中国や朝鮮と大きく異なっており、小身の老中集団の手に余る国家的危機に際して幕政参与や大老、政治総裁職が幕政に参加するものの旧来の幕閣が権力を維持できた事情を明らかにすることで、東アジアの諸国家と異なる近世日本権力の特徴が見いだせるのではないかと論じた。

休憩をはさんで行われた第二部の宮地氏による「『井伊家史料』編纂と

私」では、実際に「井伊家史料」の編纂に携わられた経験から、新たな近世国家論や幕府像を持つに至った経緯、そして今後の課題が提示された。史料編纂所入所前に近代史を専攻し、近世における天皇・朝廷を古代の残滓、或いは単なる宗教的権威と見ていたところに、近世政治史でも最も難しい諸課題が噴出して安政五年の「井伊家史料」編纂の担当を命じられたことで、それまで幕末特有の問題と認識していた公武合体というあり方が、幕末に限定されるものではなく、幕府は朝廷と合体することによって国家権力たり得ていたのではないかと考えるようになり、自身の近世史研究の出発点となったことが紹介された。そして、公家史料にあたり、そこから公武合体を考えていくなかで、全国の社寺への位階受領の事例から、朝廷は一つの国家を成り立たせる不可欠の要素であり、最幕末に分裂していくまで、朝幕関係を前提として初めて幕府が国家として存在していたという考えに至ったこと、さらに「井伊家史料」編纂に従事するなかで、幕府が情報収集・集約するシステムの強固さに触れ、「幕藩制国家論」が提示する二重国家論に疑問を抱くようになり、幕府そのものが国家権力であるという見方をするようになったことが示された。そのうえで、幕末に公議輿論という考え方が広まっていくなかで、幕府がどのように最後まで権力を維持しようとしたか、そのためにどのような形を展開していかうとしていたか、そこに幕臣・旗本のどのような層がリーダーシップをとって遂行しようとしていたかが残された課題として提示された。

最後の母利氏による「『井伊家史料』と明治維新」においては、十八年間彦根城博物館の学芸員として「彦根藩井伊家文書」に携わられた経験から、明治維新以降の伝来過程とそこにおける改竄のあり方が明らかにされた。まず「彦根藩井伊家文書」の概要や大まかな伝来過程、直弼関係史料における文書の切り取りや断簡について紹介されたのち、明治十四年以降の井伊直弼顕彰運動の盛り上がりや建碑挫折によって、直弼の事績を編纂物として世に広める方針が定められたこと、そこで「直弼伝」の略伝として編纂された「磯打浪」で孝明天皇や三条実美、松平忠固罷免に関わる史料・記事が削除・改竄されていること、「磯打浪」の脱稿後まもなく明治政府の修史館に提出された「公用方秘録」や編集写本史料にも同じ改竄が見られることが紹

介された。そして、直弼没後や直弼伝編纂の過程で収集・筆写された文書が「彦根藩井伊家文書」の一部として今日に伝来していることで、本来藩主家ではなく藩士家に伝来していたであろう文書も一体的に見ることができ、さらに「彦根藩井伊家文書」に井伊直弼の受給文書だけでなく直弼が文書を発給するにあたっての草稿も伝来していることから、これらを収録する『井伊家史料』は幕末の政治過程について双方のやり取りを明確に分析することが可能な史料集であるという意義を有することも示された。

第一部の最後には発表者同士での質疑が、第二部の最後には発表者同士に加え参加者からも質疑が行われた。第一部においては、菊地氏発表に關して井伊直弼権力の評価について専制・専断の内実があつたかどうかや、阿部正弘政権以降の幕府の対外政策決定過程の評価をめぐって議論されたほか、林氏発表について東アジアの中で幕府権力を見る際に、「家門」の政治への関わりをどう捉えるのかについて、特に朝鮮と中国の支配層が家門として同一視されるのか、中国では科挙によって支配層に上昇していくが、その母体の郷紳層は朝鮮の如き家門といえるのが議論された。第二部においては、まず発表者同士の質疑として、宮地氏発表における幕府や近世国家の位置づけについて、及び母利氏発表における井伊直弼顕彰運動の論理に關して基礎的な確認が行われたのち、安政の大獄における意思決定過程や大老就任前の井伊直弼からの老中への交渉ルートについて議論が行われた。続いて参加者から、史料編纂所における史料集編纂と江戸時代の和学講談所以来の伝統との関わりについてや、井伊直弼顕彰運動における史料改竄問題に關連して修士館への史料提出の経緯や顕彰運動前後での井伊家側での記述の差異について、それぞれ疑問が提示され、発表者が応答した。

最後に、長く『井伊家史料』の編纂に携わってきた維新史料第一室教授の杉本氏より閉会の挨拶が行われ、本研究集会で示された『井伊家史料』の意義をより発展させることのできるツールとしての本所データベース「近世史編纂支援データベース」を紹介し、『井伊家文書』のさらなる多面的活用を願って研究集会を終えた。

本研究集会は、四時間半にわたる長丁場であつたにもかかわらず、当日は一三八名もの参加者を得ることができたうえに、発表者同士の活発な議論が

行われ、さらには全てを取り上げられない程に参加者から多くの質疑が寄せられ、大変に充実した研究集会となった。

(立石 了)

「Strong Asymmetries in Social Relations Compared: The Mamluk Sultanate, Medieval Japan and Beyond」社会関係の非対称性の比較：マムルーク朝と中世日本 二〇二二年一〇月一五・一六日

東京大学史料編纂所および Bonn Center for Dependency and Slavery Studies (ボン大学「奴隷・依存関係」研究センター)・公益財団法人東洋文庫の三者の主催、基盤研究(A) (一般)「神社所蔵文書・社家文書の一体把握による中近世賀茂別雷神社の総合的研究」(研究代表者・金子拓・基盤研究(A) (一般))「断片的史料情報の集積と歴史知識情報の相互参照体制の確立による新たな史料学構築研究」(研究代表者・西田友広)の協力により、標記の国際研究集会を開催した。

当初、対面・オンラインの併用を検討し、準備を進めたが、報告者に新型コロナウイルス感染症の陽性者・濃厚接触者が発生したため、一部の人員が史料編纂所大会議室から参加したほかはオンラインでの参加とした。参加者は最大時点で二五名であつた。

マムルーク朝や中世日本の支配体制や社会構造は、社会関係が異なるレベルや社会の異なるサブシステムにおける依存関係によって特徴づけられる階層的なシステムであるという基本的な類似性を示している。そして、このようなヒエラルキーは力関係を伴っており、一方の側が他方の側の行動に影響を与える可能性がその逆よりもはるかに大きいという、強い非対称性をもつ。こうした見方を前提とし、この研究集会では、①マムルーク朝および日本中世の研究者が、同時代の政治・社会体制について、相互の理解を深め、新たな研究の視角を得る、②ボン大学側の研究プロジェクトのテーマである「非対称的関係」は、一方的な従属・支配ではなく、多様かつ柔軟で活力をもっていたのか、③一六世紀以降(近世)との違い・移行のあり方、について検討することを目的として開催された。

当日は三浦徹（東洋文庫）、ベサニー・ウォーカー（ボン大学）、伊藤隆郎（神戸大学）、シュテファン・コーネルマン（ボン大学）の各氏を司会とする四つのセッションにおいて、アンナ・コラツツ、アフメド・アルギザワー、アブデルカデル・アルグーズ、ベサニー・ウォーカー、デトレフ・タランチュフスキ、フロリアン・ザールフェルト、シュテファン・コーネルマン（以上、ボン大学）、五十嵐大介（早稲田大学）、伊藤隆郎（神戸大学）、高橋一樹（明治大学）、中町信孝（甲南大学）、金子拓、西田友広、堀川康史（以上、史料編纂所）の各氏による報告が行われた後、三浦徹氏の司会による総合討論が行われた。

（西田友広）

「第三回 御所（宮殿）・邸宅造営関係資料の地脈と新天地」

二〇二二年二月一日

二〇二二年二月一日（土）、東京大学史料編纂所（所長・本郷恵子）、東京大学史料編纂所「天皇家・公家の「知」の体系としての文庫・宝蔵研究拠点創設」プロジェクト（担当・古代史料部）、京都府立京都学・歴史館（館長・金田章裕）、科学研究費・基盤研究(A)「東アジアにおける工匠関連史料にもとづく建築生産史の再構築と技術蓄積・伝播の解明」（研究代表者・海野聡）、東京大学史料編纂所二〇二二年度一般共同研究「中井家文書」を中心とする建築関連史料の高度資源化と活用」（所外研究代表者・海野聡）を主催、公益財団法人陽明文庫（理事長・近衛忠輝、文庫長・名和修）を共催として、第三回 国際研究集会「御所（宮殿）・邸宅造営関係資料の地脈と新天地」を、京都府立京都学・歴史館小ホール（京都府京都市左京区）において対面で開催した。

第三回目として、今回は午前部の「平安期の宮殿（大極殿・内裏、大内裏）造営研究の最先端」、午後の部「宮内庁書陵部図書寮文庫所蔵「中井家文書」の新知見と東アジア工匠史料と道具の展望」というテーマを立てた。

当日は、まず、藤井恵介東京大学名誉教授の「開会の挨拶」があり、続いて田島公が午前部の趣旨を行い、午前部が開始された。報告者・報告タ

イトルは次の通りである。藤井恵介「平安時代の宮殿建設システムと建築様式「和様」、詫間直樹（前宮内庁京都事務所長）「後三条天皇と大嘗宮・太政官庁」、上野勝之（国際日本文化研究センター機関研究員）「文献史料から見た承明門の地鎮遺構―延久三年説の検証―」、対談（藤井・詫間、司会・田島）「後三条天皇と造営事業」。

午後は、Ⅰ部・Ⅱ部に分かれ、Ⅰ部は基盤研究(S)プロジェクトがデジタル撮影を行った内匠寮本「中井家文書」のうち安政度造営関係帳簿（簿冊）類の研究報告を柱とし、「宮内庁書陵部所蔵図書寮文庫内匠寮本「中井家文書」を中心とした近世内裏造営の研究」をテーマとして、Ⅱ部は「東アジアにおける建築生産史と工匠史料」と題して、ZOOMを用いた国際シンポジウムを行った。最初に石原秀樹（宮内庁京都事務所長）の「冒頭の挨拶」があり、海野聡准教授から趣旨が説明された。まず、Ⅰ部の報告者・報告タイトルは次の通りである。堤淳也（東京大学大学院工学系研究科建築学専攻修士課程）「安政度内裏築地移築工事における仮設物の復元的考察」、妹背伊織（東京大学大学院工学系研究科建築学専攻修士課程）「安政度内裏の築地移築工事における大工小屋施設と作業現場の配置について」。次にⅡ部の報告者・報告タイトルは次の通りである。李暉（奈良文化財研究所アソシエイトフェロー）「营造法式」からみた中国宋代の大工道具」、金碩顯（明知大学客員教授）「韓国の大工道具」、海野聡「歴史資料としての日本の大工道具と工匠史料」。報告後、三者を中心に議論が交わされた。

「中井家文書」について報告二件は、藤井名譽教授・海野准教授主催の大学院工学研究科建築学研究所所属の大学院生を中心に二〇一九年一月より研究会を組織して行ってきた研究成果の一部である。更にZOOMでの金碩顯氏の参加により、中国、韓国と日本の建設関連の歴史資料の国際比較をすることができ、「中井家文書」の史料的な性格をとらえることができたという点からも重要な機会となった。討論終了後、主催者を代表し、主催者の京都府立京都学・歴史館の金田章裕館長より「閉会の挨拶」があり、終了した。新型コロナウイルス感染症の蔓延拡大により、開催が危ぶまれる中、幸いにも、当時は感染者も少なかったため、十分な感染防止の対策をした会場に六四名（ZOOM参加二名）もの建築史学・日本史学の研究者の参加を得

て、対面での国際研究集会を開催できた。第三回の国際研究集会は、第一回を継承し、研究史上、デジタル画像の「大公開時代」の幕開けと共に新局面を迎えた日本史学と建築史学の協業、文理融合研究の理想型として位置付けられよう。なお、報告内容を反映した「報告集」3を当日会場で配布した。内容は大学運営費禁裏公家プロジェクトの項を参照。なお、前日の二月九日（金）にエクスカッションとして、午後一時から四時まで、宮内庁京都御所の調査を行った。参加者二十七名。ご協力いただいた宮内庁京都事務所石原秀樹所長、同所満田さおり氏に感謝申し上げます。

(田島 公)

「維新史料研究と国際発信」

二〇二二年二月十七日

二〇二二年二月十七日（土）、本所と本所維新史料研究国際ハブ拠点形成プロジェクト（以下維新ハブプロジェクト）との主催、JSPS人文科学・社会科学データインフラストラクチャー構築推進事業とJSPS科学研究費補助金基盤研究(A)「在外日本関係史料の調査と貴重史料の研究資源化による維新史料研究国際ハブ拠点の形成」、同じくJSPS科学研究費補助金基盤研究(B)「日本近世史科学の再構築 基幹史料集の多角的利用環境形成と社会連携を通じて」との共催により、国際研究集会「維新史料研究と国際発信」を開催した。二〇一九年度から開始された維新ハブプロジェクトでは、本所維新史料網要データベースの英訳化と、そのための歴史用語・史料用語の英訳グロッサリー研究とを実施している。この研究集会は、同様のタイトルで過去三回開催した国際研究集会に引き続き、同プロジェクトの成果を発信するとともに、海外研究者の視点から意見を得るために開催したものである。なお、本研究集会は、予断を許さない感染症状況を考慮し、ウェブ会議システムZOOMを用いたオンライン開催とした。

この研究集会では、維新ハブプロジェクト開始当初よりご助言を賜っていただき、カリフォルニア大学サンタバーバラ校教授のローク・ロバーツ氏、及びウエイク・フォレスト大学教授のロバート・ヘリヤー氏お二方のご著書の邦訳が、ともに二〇二二年に出版されたことをうけて、英語圏の研究者として

日々日本語史料に取り組まれてきたご経験や、ご著書を日本語版で出版する際に意識なさったことなどから、翻訳における工夫・苦労について共有していただき、本プロジェクトでのデータベース英訳事業やグロッサリー研究に活かしていくことを目的とした。具体的には、ロバーツ氏のご著書『泰平を演じる 徳川期日本の政治空間と「公然の秘密」をめぐって』、ロバーツ氏ご本人と、邦訳作業を担当なさった友田健太郎氏（放送大学大学院博士後期課程）に、またヘリヤー氏のご著書『海を越えたジャパン・ティー 緑茶の日米交易史と茶商人たち』をめぐってヘリヤー氏ご本人にご報告いただき、ロバーツ氏・ヘリヤー氏と親交も深く、ロバーツ氏のご著書邦訳にあたって監訳を務められた三谷博氏（東京大学名誉教授）にコメントを頂戴した。司会は本所准教授の小野将氏が担当した。小野氏による開会の挨拶と本郷恵子所長の挨拶が行われた後に、各報告が行われた。その後、全体について三谷氏からコメントが寄せられ、最後に質疑応答が行われた。

まずロバーツ報告「政治空間と言説空間―『泰平を演じる』の翻訳に関わる一考察」では、著書執筆の出発点の一つとして、明治初年に「藩」が大名支配地域の正式名称として採用されたことを地域の視点から検討した際に、地域内部では江戸時代からの「お国」・「お家」意識が継続していたことに注目し、そこから將軍と大名、大名と家臣、家臣と陪臣といったそれぞれの「政治空間」によつて独自の言説があり、秩序が成立していたこと、すなわち近世日本では封建的な入れ子構造の政治空間があり、それぞれに言説空間が成立して秩序が形成されていたことを著書で描いたことが紹介された。そのうえで、歴史学という学問自体、過去の言説空間で成立していた史料用語を近現代の言説空間に適した現代語に翻訳し、歴史家自身によつて意味づけする営みであること、従つて史料用語がどのような政治空間・言説空間で用いられたものであるかに注意しなければならないこと、さらに翻訳において単語の意味が一对一で対応するものなどないことから、翻訳作業によつて史料で用いられている言葉の一面を強調し、他の側面を捨象してしまうことに注意が必要であることの指摘があった。さらに、維新ハブプロジェクトが進める維新史料網要データベース英訳事業については、維新史料網要の網文における言葉遣いと引用史料の史料用語とのズレに注意するだけでなく、

明治初期に天皇中心の統一国家・国民国家という空間にふさわしい言説を意識して綱文が書かれていることにも留意すべきで、その英訳に当たっては維新史料綱要編纂者の意図も汲んだ英語で翻訳することが望ましいという提案がなされた。

続く友田報告「『泰平を演じる』の翻訳について」では、「泰平を演じる」で多くの近世史料が引用されていることから、江戸時代の史料を英訳したものをさらに現代日本語に翻訳する、という作業になることとなり、日本語訳して著者のロバーツ氏や監訳者の三谷氏と議論のうえ内容を確定できる本文部分と異なっており、史料原文と英訳文（ロバーツ氏の解釈）を照らし合わせたいえで、著者・監訳者との議論を行うという複雑な作業になったこと、他方で翻訳作業の開始とコロナ禍の襲来が同時期になり、史料文言の照合作業が非常に困難になったことがまず紹介された。そのうえで、邦訳版の訳語選定にあたって、著者自身が注意を払った史料用語と歴史用語との関係性を重視して、「幕府」や「藩」、「朝廷」や「天皇」といった現在の歴史叙述で一般に用いられている用語を避けたことが示された。そして、日本語でも多様な意味を持つことから原著でそれぞれに即して訳し分けられている言葉を再度日本語訳する際の工夫について、「国」を例に紹介され、他方で原題の「Performing the Great Peace」で用いられている「perform/performance」が「演技」と「遂行」との両義的意味を活かして原著では叙述されているのに対して、ロバーツ氏も指摘するように一対一対応の単語が存在しない以上、その両義性をうまく反映する翻訳が難しかったという苦労が示されたうえで、日本近世史をいったん英語というフィルターを介して見ることで、史料用語の持つ多義性を改めて意識し、厳密な議論が可能になったという利点が明らかにされた。

ヘリヤー報告「ミルク&砂糖入りの緑茶 日本がアメリカのカップを満たした時代」では、ヘリヤー氏が日本茶に興味を持つきっかけとなった自身のルーツ、すなわち日本茶を商っていた父方の祖父母や緑茶を特別なお茶と認識していた母方の祖母について紹介したのち、一九二〇年代までアメリカでは緑茶が好まれていた一方で、日本国内のお茶市場においては番茶が主に流通していたことを指摘した。そのうえで、幕末維新期の日本において、アメ

リカ市場向けに緑茶の生産・輸出が強化されていたこと、そうした製造・輸出が主に欧米の貿易商によって主導されたことで、彼らが中国で行っていた製茶技法が輸入されて、現在のいわゆる日本茶（煎茶・抹茶）とは異なり、アメリカ人の好みに合わせて緑色に着色されていたことが示され、これを著書において「Japan Tea」（日本茶）としてしまうと現代の認識と齟齬が生じるために、「中国式の日本の緑茶」としたことが紹介された。こうした欧米での緑茶市場は、南アジアで十九世紀末からお茶の生産量が飛躍的に拡大したことから変化し始め、第一次世界大戦後に欧米から中国産や日本産の緑茶を駆逐することとなり、日本の製茶業者は国内需要に目を向けざるを得なくなったことで、それまで番茶を健康的とみなして好んでいた上流階級に着目し、ビタミンC含有量の訴求や贈答イメージの強化といったマーケティングによって、日本国内における緑茶需要を掘り起こしていたことを示し、いわゆる「日本茶」が、比較的最近に成立したことや、中国・欧米といった対外的要素と深くかかわる形で形成されたことを明らかにした。

コメントの三谷氏からは、ロバーツ氏の著書の翻訳に関わるようになった経緯を紹介した後、翻訳という過程、特に史料用語の英訳→現代語訳といった二重の翻訳を経ることで、史料や論理を厳密に解釈できるようにするという側面が強調された。そのうえで、維新史料綱要データベースの英訳についても、幕末維新史のインデックスの英訳としては英語圏の研究者にとって意義あることだが、日本の研究者が自身の研究を国際的に発信していくためにも、訳語の選定を行う上で重要な手がかりにもなり、大変に意義のある事業であること、また史料編纂所が公開している「応答型翻訳支援システム」と合わせて、翻訳のしやすい環境が整えられていることから、自身の史料解釈や論理展開を鮮明にとらえられるようにするためにも、日本の研究者は論文の翻訳作業を進めていくべきではないかと提起した。そして、編纂所がデータを英訳して全世界に提供するだけでは不十分で、個々の研究者が史料を解釈して新たな概念を生み出し、研究そのものを翻訳して全世界に発信していく必要があるという課題が示された。

質疑応答では、まず発表者相互での応答が行われた。ロバーツ氏からは改めて翻訳の難しさを認識したということと、日本での充実した研究蓄積が日

本語を勉強していない英語圏の研究者に共有されていないことの損失が大きく、三谷氏が示したように日本の研究書の英訳が進められていくことが望ましいという指摘があった。ヘリヤー氏からは、これからの研究に際しては扱っている史料用語・歴史用語がどのように翻訳できるか意識しながら行うことで、三谷氏の提起したような研究の翻訳・発信につなげられるだけでなく、これまで無意識に使用してきた用語をとらえ直す重要な機会にもなることが指摘された。

その後参加者からの質疑応答においては、まず事実確認として、ロバーツ報告に関しては、『泰平を演じる』で描写されているように例えば老中と公用人のように同じ当事者であっても、表座敷と賄い方といった会話の行われる空間が異なるだけでも、話し合われる内容が変わってくるという前近代において儀礼の果たす役割の大きさについて、近代と前近代とは儀礼の役割に違いがあるのか、それが質的なものなのか量的なものなのかという質問がなされて、ロバーツ氏からは儀礼自体の前近代から近代への連続性はあり、著書においては近代と前近代との違いを強調したものの、より詳しく検討するとそれほど異なる可能性はある、ただそうした空間での言葉遣いが近代と前近代とは大きく異なっているという返答があった。

またヘリヤー報告に対しては、横浜や長崎といった開港地での製茶工場の建設は、お茶の発酵を止めて緑茶のままとするための加熱作業が必要だったということかという事実確認があり、ロバーツ氏からはその通りだが、中国では焙煎まで含めて中国人の手で行われたのに対して、日本では欧米の貿易商が緑茶製造を主導し、中国人技術者を雇い入れたことに特徴があるという説明があった。

その他、ロバーツ氏に対して近世史料を英訳する際に具体的に注意した点や法則があったのかという質問があり、史料用語の英訳に当たってはむしろ自身の重視するニュアンスや解釈を反映した用語を選択するように意識したこと、史料で用いられている単語自体が多義的であるので、むしろ英訳することで意味を限定し、一側面を強調することができたということ、したがって翻訳に当たってはこの史料用語にはこの英単語といった画一的なものを設定するよりも、自身の解釈やニュアンスを的確に表現する単語を選択すること

とが望ましいという意見を持っている、といったことが返答された。

参加者からは、翻訳とは解釈であるということを変更して認識したという発言があったほか、歴史学の翻訳が極めて難しい作業である一方、英訳の一例として維新史料網要データベースを翻訳し、学会に提供することで、より広範な議論を呼び起こし、研究を活性化させることができるのではないかとという期待が示された。

維新ハブプロジェクトが英訳化を実施している維新史料網要データベースは、もともと日本国内においても幕末維新期の詳細な政治年表として日本史研究者に限られない幅広い人々に活用されてきたものである。今回の国際研究集会では、本データベースの英訳事業は、英語圏における活用を期待できるだけでなく、英訳例を学会に広く提示することで、幕末維新期研究のみならず、日本史研究自体も深化させることができ、国際化という点でも議論を活発化させることにつながることを改めて確認することができた。さらに、今後翻訳作業を進めていくうえで意識すべき具体的な注意点も得ることができ、これらの成果を英訳作業やグロッサリー構築へつなげ、維新ハブプロジェクトをより一層発展させていきたいと考えている。

なお、新型コロナウイルス感染症の先行き不透明な状況から、今回の研究集会は発表者や主催者は一ヶ所に集まったものの、参加者にはウェブ会議システムZOOMによるオンライン参加をお願いすることとした。しかしながら、八四名もの申し込みをいただき、オンライン開催としたことで、アメリカや中国、韓国からのご参加も得て、大変充実した研究集会となった。

(立石 了)

「海外所在日本関係古写真の史料学研究」

二〇二三年三月七日

二〇二三年三月七日(火)、東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター・同画像センター古写真研究プロジェクト(代表者・箱石大)・JSP(S)科研究費(P19K00934)「高精細デジタル画像解析による幕末明治初期ガラス原板写真の史料学研究」(代表者・谷昭佳)の共催により、海外に所在する古写真史料をめぐる国際研究集会「海外所在日本関係古写真の史料学研究

究」をオンライン（ZOOM）と対面とによるハイブリッド方式により開催した。この研究会では、古写真研究プロジェクトを中心にして、この間取り組んでいる、幕末明治期を中心とする海外所在の日本関係古写真史料の調査・研究から、イタリアとオランダにおける成果の一端を紹介した。あわせて来日中のイタリア・トリノ大学のステファノ・テュリナ（Stefano Turina 対面参加）氏と、オランダ・ライデン大学のマーチャ・ファン・デン・フール（Martje van den Heuvel オンライン参加）氏の両名から、イタリアとオランダに所在にする日本関係古写真に関するご講演をいただいた。

当日は、まず谷昭佳（史料編纂所）から「海外所在日本関係古写真史料の調査研究の概要―在イタリア、在オランダを中心に―」の報告を行った。史料編纂所が海外においてデジタル画像により収集した日本関係古写真のうちから、一八六六年に来日したイタリアの外交使節団メンバーが収集したコレクション、一八六二年にオランダを訪れた日本の遣欧使節団メンバーが現地で撮影されたコレクションなどを示し、写真からみえてくる幕末外交に関する視点を紹介した。続いて、ステファノ・テュリナ氏から「Phon's sine fotografie di vedute e costume」―イタリア初の日本・中国外交使節団（一八六六年）エンリコ・ヒリエ・ジリオールの写真コレクション概要」と題する英語報告（事前に日本語翻訳レジュメ配布）があった。日本の絹産業と欧州との結びつきを写真から解き明かす興味深い内容であった。最後に、マーチャ・ファン・デン・フール氏から「日本の初期写真―日本とオランダが共有する歴史」と題する英語報告（事前に日本語翻訳レジュメ配布）があった。日本での写真術導入とオランダの関係について、またライデン大学図書館所蔵日本関係古写真コレクションのデジタル化とデータベース構築による研究資源化に関して紹介された。

対面での会場となった史料編纂所演習室とオンラインによるZOOMサイトには、国内外の大学・研究機関だけでなく、博物館・美術館・図書館・文書館、また保存修復関係者・出版社など、様々な専門分野からの六八名（事前申込六九件）の参加があり、国際的かつ学際的な研究会集会成为となり、盛況であった。

（谷 昭佳）

研究会

シンポジウム「広がる！対馬歴史研究―対馬藩から見る江戸時代の日本―」

二〇二二年二月一〇日

JSPS科学研究費補助金基盤研究(A)「分散型大規模大名家史料群の高度学術資源化と地域還元」(21H00535) 主催、長崎県対馬歴史研究センター・東京大学史料編纂所共催にて、標記のシンポジウムを対馬市交流センター大会議室（長崎県対馬市厳原町今屋敷）で開催した。オンラインにて同時配信も実施した。

「分散型大規模大名家史料群の高度学術資源化と地域還元」は二〇二二年度が研究最終年度となるので、その成果報告を主な目的として実施した。また本研究は、歴史学の研究成果を研究者以外に公開するための効果的な方法を実践的に検討し、現在の課題への歴史学の貢献方法の構築を目指すことを目的としている。そのため、本シンポジウムは研究者以外の方々を主な対象とした。報告内容は以下の通りである。

丸山大輝（対馬歴史研究センター）

「宗家文書データベースの構築とその意義」

古川祐貴（弘前大学人文社会科学部）

「対馬に帰ってきた宗家文書」

木村直樹（長崎大学多文化社会学部）

「目撃された朝鮮の人々―長崎・長崎街道―」

荒木裕行（東京大学史料編纂所）

「対馬藩史料から解明する綱吉將軍就任の政治変動」

当日は合計五四名の参加者を得た。また二月二〇日に、テレビ長崎にて「対馬に残る「宗家文書」のデジタル化とオンライン公開進む【長崎県】」として報道された。

（鶴田 啓）

「災害史料研究が拓く歴史学の新たな方法」

二〇二二年二月二三日

東京大学地震火山史料連携研究機構では、二〇二二年一月二三日（金）、地震史料シンポジウムⅡ「災害史料研究が拓く歴史学の新たな方法」をオンラインで開催しました。研究者、自治体や企業の関係者、市民など一三九名の参加を得ました。

近年の地震・火山史料研究の中で、地誌や年代記など、これまでその性格について評価が定まっていなかった史料や、外国語史料・金石文史料なども再評価し、災害史料として活用しようという動向が生まれています。今回のシンポジウムは、災害研究が歴史学の新たな方法を提起しているといえる状況を受け、二〇一八年一月の地震史料シンポジウム「地域史料から地震学へのアプローチ」に続いて開催したものです。

シンポジウムでは、地震学、歴史学、地質学、考古学の各分野で歴史地震および地震史料研究に取り組んでいる研究者の発表八本の後、総合討論が行われました。発表では、様々な史料を活用した研究の成果が報告され、各分野の連携に伴う研究の進展が確認されました。討論では、史料のさらなる調査・分析と異分野連携によって地震像を明らかにすること、地震のほか水害などの災害にも研究の対象や方法を広げていくことへの期待などが示されました。

地震火山史料連携研究機構では、地震史料集データベースなど、いくつかのデータベースを公開しています。今後も研究基盤の整備に寄与し、分野融合型の研究を推進するとともに、シンポジウム等を通して研究成果の普及につとめたいと思います。

主催 東京大学地震火山史料連携研究機構

共催 東京大学史料編纂所／東京大学地震研究所／東京大学地震・火山噴

火予知研究協議会 史料・考古部会

（榎原雅治）

公開研究会「茂木文書と科学の出会い」

二〇二三年三月五日

茂木文書は、秋田に移った茂木家から家臣の子孫である吉成家に譲られた中世文書であり、学界から高く評価されている貴重な歴史資料である。科学研究費補助金基盤研究(C)「中世東国武家本領の構造的特質に関する復元的研究」では、この一〇〇通以上の古文書を用いて中世東国武家の本領の構造的特質の研究を行っており、関連の共同研究プロジェクトでは、茂木文書の料紙に対してデジタルマイクロスコープなどの機器を用いた科学的な分析を実施している。この料紙の科学研究に関連して、令和四年度加速器科学国際育成事業加速器科学育成プログラム「和紙を科学する」では、古文書や古記録などの料紙に対して、非破壊で物理化学分析の実践を進めている。

本研究会は、古文書学・歴史学・文化財科学・物理化学の学際的な研究成果について紹介するとともに、双方の研究の発展を企図して開催した。昨今の新型コロナウイルス感染症の状況を鑑み、報告者は茂木町まちなか文化交流館ふみの森もてぎで報告を行い、一般参加者はZoomを用いたオンライン参加というハイブリッド形式で行った。参加人数は会場の報告者・関係者を含め一〇九名であった。当日の流れ、発表者、発表題目は下記の通りである。

総合司会 天野真志（国立歴史民俗博物館）

開会挨拶 関栄二（茂木町教育委員会教育長）

「茂木文書とは何か」 高橋修（茨城大学）

「茂木文書の発給者―料紙分析の前提として―」

大山恒（茂木町教育委員会）

「料紙分析で何がわかる？ マクロ・ミクロの視点から」

渋谷綾子（東京大学史料編纂所）

「FTIRを用いた料紙の分析結果」 山口悟史（東京大学史料編纂所）

「和紙をCTスキャンするとどう見える？」

丹羽尉博（高エネルギー加速器研究機構物質構造科学研究所）

質疑応答・総合討論

報告者…高橋・大山・渋谷・山口・丹羽、モデレーター…天野

閉会挨拶 金子拓（東京大学史料編纂所）

各報告の後、参加者からの質疑回答とともに総合討論を行い、その中で、「古文書の料紙」という材料に対して、異分野からのアプローチに対する期待とともに、取り組むべき課題・方向性などが話し合われた。特に、分析データの読み解き方、データの蓄積から今後の研究にどうつなげていくのかなど、報告者からも質疑が複数出され、意見交換が活発に行われた。

【主催】科学研究費補助金基盤研究(C)「中世東国武家本領の構造的特質に関する復元的研究」(JP21K00838、研究代表者：高橋修)、令和四年度加速器科学総合育成事業「和紙を科学する」(研究代表者：高島晶彦)

【共催】東京大学史料編纂所、茂木町教育委員会、茨城大学中世史研究会、科学研究費補助金基盤研究(A)「国際古文書料紙学」の確立」(P19H00549、研究代表者：渋谷綾子)、東京大学史料編纂所二〇二二年度一般共同研究「中近世古文書の料紙に関する総合的科学研究」(研究代表者：貫井裕恵)、大学共同利用機関法人高エネルギー加速器研究機構 (渋谷綾子)

陽明文庫講座 二〇二二年五月一日(土)・二〇二三年二月四日(土)

公益財団法人陽明文庫、京都府立京都学・歴史館、東京大学史料編纂所(担当：古代史料部、「天皇家・公家の「知」の体系としての文庫・宝蔵研究拠点創設」プロジェクト)を主催として、京都府立京都学・歴史館 大ホールにて開催した。

本講座は、東京大学史料編纂所に研究拠点を置いた二〇〇七～一一年度科学研究費・学術創成研究費、二〇一二～一六年度・二〇一七～二一年度科学研究費・基盤研究Sで開催してきた市民向け公開講座を継承し、東京大学史料編纂所古代史料部を中心に行ってきた研究活動の成果の紹介、東京大学が掲げるSDGs(持続可能な開発目標)一七のうち目標4「質の高い教育をみんなに」(すべての人々に包摂的かつ公平で質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進する)の達成を目指す。

新型コロナウイルス感染症蔓延のため延期した第一二回陽明文庫講座「陽明文庫資料からの新発見2」を二〇二二年五月一日(土)に実施した。前

記の主催の他、共催：科学研究費補助金(基盤研究(S))「天皇家・公家文庫収蔵史料の高度利用化と日本目録学の進展―知の体系の構造伝来の解明」(研究課題番号：17H00617、研究代表者：田島公)、科学研究費補助金(基盤研究(A))「撰覧家伝来史料群の研究資源化と伝統的公家文化の総合的研究」(研究課題番号：17H00926、研究代表者：尾上陽介)を共催とする。講演者：題目は次の通り。参加者は計二〇二名。

名和修(公益財団法人陽明文庫常務理事・文庫長)
「金球郷について」

藤井讓治(京都市立歴史博物館館長)

「近衛前久書状と秀次事件」

松澤克行(東京大学史料編纂所准教授)

「勘返状の世界」

二〇二三年二月四日に開催した第一三回陽明文庫講座「陽明文庫資料からの新発見3」の講演者・題目は次の通り。参加者は、計二七五名。

名和修(公益財団法人陽明文庫常務理事・文庫長)

「千聲について」

尾上陽介(東京大学史料編纂所教授)

「陽明文庫所蔵史料のあれこれ―科学研究費・基盤研究(A)の成果と今後の課題―」

山本登朗(関西大学名誉教授)

「近衛家と伊勢物語―近衛信尋の『伊勢物語』関係自筆資料三点―」

尾上陽介が陽明文庫講座で取り上げた「無禪書状」は、二〇二三年二月一日(月)京都新聞夕刊の一面でも取り上げられた。講座参加者の約半数から得たアンケートの意見には、「専門家の話は面白い」「講座を続けてほしい」「陽明文庫所蔵資料について、知りたい」といった意見が多く、好評であった。また、陽明文庫所蔵史料のデジタル画像の公開等について知らなかったと答えている参加者も多いことから、研究成果が公開されていることを広く伝えるための機会としても講座を活用していくことが必要といえるだろう。

(尾上陽介・田島 公)

二〇二二年度 金鶏会館連続公開講座（新） 古典から読み解く歴史学

東京大学史料編纂所（担当：古代史料部、「天皇家・公家の「知」の体系としての文庫・宝蔵研究拠点創設」プロジェクト）を主催、県立長野高校を後援、一般社団法人長野教育文化振興会・一般社団法人長野高校金鶏会の協力を得て、金鶏会館（県立長野高校同窓会館）「登録有形文化財」にて連続公開講座を実施した。

本講座は、東京大学史料編纂所に研究拠点を置いた二〇〇七～一一年度科学学研究所費・学術創成研究費、二〇一二～一六年度・二〇一七～二一年度科学学研究所費・基盤研究(S)で開催してきた市民向け公開講座を継承し、登録有形文化財の建物を会場に、対面で地元地域の要望・関心に則しながら、東京大学史料編纂所古代史料部を中心に行ってきた研究活動の成果の紹介、東京大学が掲げるSDGs（持続可能な開発目標）一七のうち目標4「質の高い教育をみんなに」（すべての人々に包摂的かつ公平で質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進する）の達成を目指す。

前期は、善光寺御開帳・諏訪大社御柱・「鎌倉殿一三人」に関連した古代・中世の信濃国の話題、「天皇家・公家の「知」の体系としての文庫・宝蔵研究創設プロジェクト」の典籍・写本研究、古代史料部門が関わる特定共同研究課題（小川八幡神社大般若経）、一般共同研究課題（『信濃史料』古代編（二・三巻）未取史料）の調査研究成果の他、地元の研究者の協力を得て講演を行った。講演者・題目は以下の通り。参加者は計四二〇名。

第一回 五月二一日（土）

近藤成一（放送大学教養学部教授・東京大学名誉教授）

「北条義時と信濃―「鎌倉殿の一三人」に寄せて―」

第二回 五月二八日（土）

田島 公（東京大学史料編纂所教授）

「諏訪大社の創祀と善光寺の創建―大祝家旧蔵「神氏系図」・阿蘇神社所蔵「異本阿蘇氏系図」所引「科野国造氏系図」と中院家旧蔵十巻本「伊呂波字類抄」所引「善光寺古縁起」―」

第三回 六月四日（土）

本郷真紹（立命館大学文学部日本史研究学域教授）

「平安仏教二つの巨星―最澄と空海―」

第四回 六月一日（土）

傳田伊史（県立長野西高等学校教諭）

「善光寺信仰の流転と遍歴―善光寺三尊像を中心に―」

第五回 六月一八日（土）

山口英男（東京大学史料編纂所教授）

「和歌山県小川八幡神社大般若経と信濃国佐久郡大坂氏願経」

第六回 七月九日（土）

西 一夫（信州大学学術研究院教育学系教授）

「書簡表現からみる空海と最澄の交流―表現分析と文化受容―」

後期は、前期に引き続き、科学研究費の研究成果および地元に関連する史料（古文書・古典籍）や新たに発見された遺跡を話題に七回の講演を行った。参加者は、計四五五名。

第一回 一〇月二二日（土）

近藤成一（放送大学教養学部教授、東京大学名誉教授）

「中野能成と北条氏」

第二回 一〇月二九日（土）

西 一夫（信州大学学術研究院教育学系教授）

「萬葉集の雅と俗―巻一六の歌の世界―」

第三回 一一月五日（土）

北川 央（九度山・真田ミュージアム名誉館長、前大阪城天守閣館長）

「西国巡礼の歴史と善光寺信仰」

第四回 一一月二二日（土）

福田千鶴（九州大学基幹教育院人文社会科学部部門教授）

「松平忠輝とその生母河村茶阿―長野市立博物館に寄託されている花

第五回 一一月二六日（土）

井家文書を中心に―」

西山良平（京都大学名誉教授）

「新発見！ 弘徽殿・登華殿などからみた平安宮内裏」

第六回 二〇二三年一月二一日（土）

柳澤 亮（長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター調査部調査
第二課課長補佐）

「考古学で探る！ 武田信玄の築城「幻の長沼城」」

第七回 一月二八日（土）

田島 公（東京大学史料編纂所教授）

「近衛家伝来史料から読み直す古代の地域史——一五年間の大規模科学研
究費の成果の一端——」

なお、第六回の講演会は、武田信玄が築城したとする幻の長沼城の発掘に
関する、一般市民向けには初めての講演で、『朝日新聞』長野版などで大き
く取り上げられた。

（田島 公）

連続講座「中井家文書からみる近世内裏造営体制の特質」

二〇二二年八月二日・十一月二日

二〇二二年八月二日（火）一八時〜二〇時、二〇二二年十一月二日（水）

一四時半〜一六時に京都府立京都学・歴史館小ホールにて、京都府立大学文
学部歴史学科（担当者：准教授・岸泰子）、東京大学史料編纂所（担当：古
代史料部門「天皇家・公家の「知」の大系」としての文庫・宝蔵研究拠点創
設）プロジェクト）を主催、京都府立京都学・歴史館（館長・金田章裕、担
当者：副館長・森下衛）、京都工芸繊維大学デザイン・建築学系（担当者：
准教授・登谷伸宏、教授・清水重敦）を共催とし、科学研究費・基盤研究(A)
「東アジアにおける工匠関連史料にもとづく建築生産史の再構築と技術蓄
積・伝播の解明」（研究代表者：東京大学大学院工学研究科准教授・海野
聡）、東京大学史料編纂所共同利用・共同研究拠点二〇二二年度一般共同研
究「中井家文書」を中心とする建築関連史料の高度資源化と活用」（所外研
究代表者：海野聡）の協力で、連続講座「中井家文書からみる近世内裏造営
体制の特質」を開催した。参加者は、第一回が三〇名、第二回が二五名であ

った。

第一回は、佐竹朋子氏（東京大学史料編纂所・特任研究員）による「近世
公家社会の構造とその特質について」と題した講義、第二回は、山本琢氏
（京都府立京都学・歴史館資料課副主査（古文書・古典籍特別資料担当））に
よる「京都学・歴史館所蔵中井家文書の世界」と題した講義が行われ、報
告後、京都学・歴史館所蔵の中井家文書の見学会が実施された。参加者はへ
ラ書きの方形グリッドが施された料紙の質感や墨の色など、資料原本でなけ
ればわからないような細かい箇所の閲覧もできた。

本講座の趣旨は、京都府立大学文学部歴史学科と東京大学史料編纂所との
共同主催で、科学研究費・基盤研究(S)プロジェクト（代表：田島公）の事
業・研究を継承し、学際的で文理融合型の研究を進展させ、それに携わるこ
とができる若い世代の研究者の育成を目的として、「中井家文書」を中心に
近世の内裏造営体制の特質を考える、というものである。

（田島 公）

外国人研究員研究成果報告

「七世紀〜一〇世紀における中日書写文化比較研究」

田 衛衛

北京外国語大学

二〇一九年九月一日〜二〇二二年八月三一日

本課題は、七世紀から一〇世紀における中日の書写文化の比較を行うこと
をめざす。筆者は現在著書の刊行を準備しており、そのために敦煌と奈良の
古文書を調査し、東西シルクロードを結ぶ筆写文化の検討を行った。

近年、敦煌文書における習字・習書などの学書材料が注目され、歴史文献
学や社会学などの成果も現れている。純粋な言語文字学の研究のほか、歴史
文献学、社会学などの分野でも優れた研究が現れている。筆者も先行研究を
用いつつ英・仏・露と日本蔵敦煌文書「秦婦吟」の断簡を検討し、敦煌地域
における児童習字の進級習慣など書写風景を論じた。

正倉院文書の中にも中国典籍に関する記録は多数存在し、いずれも唐代に相当する時期の作品である。そこで筆者は、これを敦煌文書に類出する習字内容と関連させ、正倉院文書に見られる典籍資料を整理し、「日本正倉院文書所見漢籍習字資料考述」と題する論考を刊行し、中国の敦煌文書研究者に正倉院文書に見られる典籍の書き方を紹介した。正倉院文書と敦煌文書は、ともに王羲之の書法を学ぼうとする姿勢が見えるため、これに注目し、双方が王羲之の書法を学ぶ状況に関する材料を多方面から検討し、「唐長安書写文化的日本流布―以王羲之書跡為中心」を刊行し、七世紀―一〇世紀の東アジアにおける奈良と敦煌の両地の書写の内容と書法などに見える異同を検討した。その結果、正倉院文書に見られる典籍は、基本的に敦煌文書にも出現しており、経史の分布には法則があることが分かった。その成果は、別途「道は異なるが行き着く所は同じ―正倉院文書と敦煌文書に見られる典籍の書く文化の違同」という論文で詳細に論じている。

このほか、史編所の研修期間中、「朝臣備―李訓墓誌」所見遣唐使姓名の書写問題」など文章も発表した。中国の出土文献を利用して、正倉院文書及び他の伝世史料と関連し、唐時期の中日の書写文化のつながりと違いを検討した。

正倉院文書と敦煌文書に関する研究は、唐時代の中日両国間の書写文化の交流と相互作用を直接観察することができる貴重な研究成果となっている。これらの文書を研究することにより、唐および奈良朝時代の日本の書写文化・教育制度、そして当時の社会生活をより深く理解できると考えられる。

今後の研究では、正倉院文書と敦煌文書の情報をさらに掘り下げ、これらの文書を他の歴史的文献や考古資料と組み合わせ、新たな視点や方法論を導入することで、唐代時代の中日間の文化交流・書法の伝承、書写教育および唐代の歴史や文化、そして東アジア地域全体の歴史的相互作用と発展などの問題をより包括的に探求したいと考えている。

「中世儀礼に見る武家棟梁の正当性」

バルデウッチ・ポリーナ

ケンブリッジ大学

二〇二二年三月―四日／二〇二三年二月二八日

本研究は、室町時代から戦国時代にかけて、儀礼という観点から武家棟梁の政治的実像を分析することを課題にしている。在籍期間の研究の課題は、大きく二つに分かれている。まず、戦国期の三好長慶政権について考察を加えた。そのため、『戦国遺文三好氏編』の文書を研究し、単独での京都支配の時期と將軍足利義輝との共同支配の時期における儀礼的行動の事例を探し、比較を行った。三好長慶の歴史像に関しては、「下剋上」の説と「天下人の先駆者」の説を見直し、構造化理論という視点から三好氏の中央政権構造を再考した。この調査の結果は、二〇二二年五月、第一回北欧・日本韓國研究学会 (NAJAKS) で報告し、二〇二三年年度の『*Studia Orientalia Electronica*』誌に論文を掲載した。

もう一つの研究課題は、室町時代の足利將軍家と「王権」の関係の歴史である。博士論文執筆のために、三代將軍義満から六代將軍義教にかけての朝廷儀礼における武家棟梁の行動を研究し、内裏や官庁などの朝廷儀礼空間で実施された儀式の記録を検討した。特に、即位式の一部をなす仏教儀礼である「即位灌頂」に焦点を当て、天皇・上皇・関白・足利將軍それぞれの地位の分析を行った。そして『実時公記』、『良賢真人記』、『後小松院御記』、『満濟准后日記』、『建内記』の中の関係史料について、解釈付きの英訳の原稿を作成した。また、史料編纂所架蔵「東山御文庫所蔵史料」の写真帳を参照し、二条家に伝来した即位灌頂儀礼に関する史料（伝授者交名など）を翻刻し、英訳も行った。この調査の結果は、二〇二二年九月、英国日本研究協会 (BAJS) と二〇二二年一〇月、室町研究会で報告した。

さらに、二〇二二年一〇月「社会関係の非対称性の比較―マムルーク朝と中世日本」のシンポジウムと二〇二二年一二月『沙汰未練書』翻訳ワークショップに参加し、討論や史料の英語の翻訳に携わった。

【後記】研究滞在の一年間、史料読解や調査にあたって、榎原雅治先生と金子拓先生のご指導、海上貴彦様のご協力を賜り、お礼申し上げます。

「オランダ東インド会社による「宮廷旅行」の比較研究―日本、マラバル、ペルシア―」

レナルト・ベス

ライデン大学講師

二〇二二年四月二日～九月五日

史料編纂所における私の研究は、大東敬典と開始した、いわゆる「宮廷旅行 *hofreisen*」を対象とする研究プロジェクトの一部として行われた。この「宮廷旅行」という言葉は、オランダ東インド会社によってアジアの君主の宮廷やその他の政治的中心地に派遣された外交使節を指す。日本では、將軍の宮廷への毎年の旅行は、「江戸参府」としてよく知られているが、オランダ東インド会社が他のアジア地域の宮廷にも使節を送っていたことを知る人は多くない。

大東がペルシアへの宮廷旅行を調査する一方、私は南インドにおける事例を検討した。日本滞在中、とくにマラバル地方としても知られる、インドのケララ地域に注目した。会社がケララに拠点を有した一七世紀中葉～一八世紀、同地域は、規模や権力の点で実に多様な四〇から五〇の王国によって構成されていた。オランダ人はそのうち数十の王国と商業・外交関係を維持し、その多くに使節を数回派遣した。

私はオランダ東インド会社文書の中に、そうした使節に関する日誌ないし報告書を五〇点以上発見した。長さは極めて多様であるが、多くは約二、三〇頁である。滞在期間中、そのうち、私の研究対象の一六六〇年代～一七四〇年代から四〇点を翻刻し、要約を作成した。加えて「商館長引継書 *nuum-orie van overgave*」二点の部分的翻刻、さらに会社内およびケララの支配者たちと交わされた三〇点の文書の翻刻を行った。作成したデータは、帰国時にはワードファイルで計四五〇頁に達した。

会社文書の調査により、一七～一八世紀のケララにおけるオランダ人の立場や地域の勢力との関係だけでなく、同地の政治、王朝、宮廷、戦争や諍い、外交、儀礼、寺院など、未知の情報が多く得られた。さらにケララに由来する会社文書の特異な性格も明らかになった。同地に関する情報が、非

常に直接的な経験から得られたものであること、ケララの政治情勢をもっぱら記録した「現地に関する日誌 *inlandse dagregisters*」という、珍しい形式の文書が大量に作成されたことなどである。

加えて五月二六日、東京大学ヒューマンニティーズセンターのオンラインセミナーにおいて、ジンナ・スミット氏（駐日オランダ王国大使館）と大東とともに研究報告を行った。報告では、日本の將軍と南インドの支配者への宮廷旅行を比較し、両者の間に多くの違いがあることを示した。さらに史料編纂所において、ネイティブスピーカーの立場から『オランダ商館長日記』一六五五～一六五六年の翻刻原稿の校閲作業を行い、編纂を補助した。

二〇二三年三月末に再び東京大学に戻り、ヒド・ファン・メルスベルヘン氏（ウォリック大学）と大東とともにワークショップに参加する予定である。そこでも日本、ペルシア、インドの宮廷旅行の様々な側面について議論するだろう。

（大東 訳）

「墓誌・買地券からみた古代東アジアの墓葬文化」

王 海燕

浙江大学歴史学院

二〇二二年四月二八日～二〇二二年九月一日

外国人研究員として史料編纂所に在籍していた期間は四か月半強である。今回の来日は、東アジアの買地券をめぐる調査や研究を目的としており、主にこの目的に沿った活動をおこなった。具体的な研究活動をまとめると、下記の通りである。

① 日本における買地券の調査。稲田奈津子氏をはじめ研究チームのメンバーとともに五月に九州国立博物館において宮ノ本遺跡出土買地券を、六月に倉敷考古館において矢田部益足買地券を実物調査した。あわせて買地券の出土地における踏査や、周辺の遺跡・史跡を見学した。

② 研究会等での口頭発表。六月三日に東京大学HMC第69回オープンセミナー「黄泉の国との契約書―東アジアの買地券―」で、「中国の買地券―呉

越地域の事例を中心に」をテーマとして発表した。また、八月二日に金石文科研究会にて「浙江・江蘇両省の買地券事例の紹介と釈読」という題目で報告し、当該分野の専門研究者からの指摘を受けることができた。

③史料・資料の蒐集・調査。中国において日本古代史研究を行う際の問題点として、史資料、とくに貴重史料の入手や閲覧の難しさがある。今回、古代日中交流史の史資料を中心に、史料編纂所所蔵の『伝教大師行業記』『行歴抄』など、入唐僧に関する貴重な史料を調べることができた。

④その他。この課題の研究成果として、稲田奈津子氏・榎佳子氏と『黄泉の国との契約書―東アジアの買地券』を共同で編著することになった。そのため、三人で研究会を重ねて検討を行った。また観音山古墳や真脇遺跡など、日本国内の数多くの遺跡・史跡を見学した。

以上のように、短い滞在期間ではあったが充実したものとなり、多くの収穫があった。その成果は今後の研究活動にも資するものと考えている。

最後に、新型コロナウイルス流行の最中に来日を実現できたのは、事務職員の方々をはじめ、ご尽力いただいた皆様のお蔭である。あらためて感謝申し上げます。

「叡尊の諸信仰と中世南都仏教」

デイビッド・クインター David Quinter

アルバータ大学

二〇二二年六月一日～二〇二二年八月三十一日、十一月五日～二〇二三年一月九日

二〇二二年度、史料編纂所において、私は日本中世における叡尊（一一〇一～一二九〇）と諸信仰についての専門書のための研究に集中して仕事を進めた。予定されている専門書は、カナダ社会科学・人文学研究委員会（SSHRC）の助成金による「諸信仰と中世奈良仏教」に生きた宗教」における発見」（二〇二二～二〇二六）というより広範囲のプロジェクトの部分をなす。

パンデミックのために、私は二〇一九年夏以降、日本に戻ることができなかった。よって、二〇二二年度の調査旅行は、史料編纂所において最新の

研究書・論文や展示図録を調べることができるという意味で特に価値あるものとなった。末尾の参考文献はほんの一例にすぎない。この研究を完成させるため、私は現在、さらに「日本中世における叡尊・説法・行為」(Oxford Handbook of Lived Buddhism 掲載予定)を執筆している。私はこのように、将来的にも史料編纂所に研究のために滞在し、その間に今回の研究を論文、叡尊についての専門書、そしてより広範囲にわたるSSHRCのプロジェクトである「諸信仰と中世奈良仏教」に発展させたいと思っている。

〔史料編纂所で使った主な史料〕

a 律宗戒学院編『唐招提寺の伝統と戒律：覚盛上人御忌記念』律宗戒学院、二〇一九年

b 松尾剛次『鎌倉新仏教論と叡尊教団』法蔵館、二〇一九年

「金光教の二〇世紀歴史と体験談」

ヘザー・ハインバック

プリンストン大学宗教学部

二〇二二年七月一日～八月二〇日

現在の学界には、二〇世紀日本の新宗教と神道宗派の歴史を中心にした研究は少ない。私の研究テーマは金光教の近代の歴史とそれに関連する信奉者の体験談である。この研究を通じて、二つの問いに答えたい。一つは、金光教の信奉者が二〇世紀の発展をどう体験したのかであり、もう一つは、現代においてその歴史をどう理解しているのか、である。しかし、アメリカには、金光教についての資料が非常に少ない。研究を進めるため、菊地大樹先生の指導の下、東京大学史料編纂所外国人研究員として六週間の間、資料収集を中心にした研究に取り組んだ。

短期だったが、その間、史料編纂所・東京大学・国立国会図書館などを利用し、研究を深めることができた。二〇二二年の夏に史料編纂所の外国人研究者として行った研究と史料編纂所の方々から受けた指導は、私の今後の研究と研究者としての成長に、非常に不可欠な経験となった。将来、研究を完成するため、また岡山と日本の様々な地域へ訪問する予定である。

「中近世移行期京都における日蓮宗の本山会合の盛衰」

ダン・シアア
ヘブライ大学

二〇二二年七月二二日～八月一三日

右の期間、東京大学史料編纂所で「中近世移行期京都における日蓮宗の本山会合の盛衰」というテーマの研究を行った。具体的に、二つの研究活動があった。まずは資料を集めることであった。コロナウイルスの影響で、エルサレム・ヘブライ大学に就職してから来日できなかった。さらに、世界的に運送が乱れ、運送費用が急になくなったため、入手できないものも少なくはなかった。そこで史料編纂所では、図書室にて資料の調査収集を行った。研究対象が京都の日蓮宗本山の会合であるので、特に調査が必要だったのは頂妙寺所蔵「京都十六本山会合用書類」であった。活字刊本はあるが、間違いがいくつもあり、また活字化されていない部分もある。そこで高解像度の画像を史料編纂所の図書閲覧室の端末からHi-CAT Plusにて閲覧し、研究に役立てることができた。そのほか図書室では、史料集・雑誌などの調査も行った。国外にいる時と比べれば研究のペースが倍になったと思う。

史料調査に加え、日本にいるうちに必要だったのは研究者との相談であった。会合と織田信長との関係が研究の焦点の一つなので、史料編纂所の金子拓氏の指導が特に研究の展開を促進した。金子氏は史料編纂所の受け入れ教員であって、本当にお世話になった。史料編纂所以外の研究者数人にも相談し、例えば天理大学の天野忠幸氏の相談も役立った。

今回の史料編纂所での研究成果を論文などとして発表する予定である。まずは、本山会合・織田政権の関係に関する論文を上智大学出版の雑誌『Monumenta Nipponica』に提出し、只今修正中である。また、関連の織田信長の宗教的行為に関する研究については、一二月の発表会で発表し、論文を書いていて、来月提出する予定である。また、来年まで日蓮宗本山会合に関する本を書く予定で、その本では不受不施派の研究についても論じるつもりである。今回の史料編纂所での滞在期間は短かったが、研究に良い影響を与え

たと思う。

「清朝を中心とした近世東アジアの国際関係史」

林 慶俊

東国大学 文化学院 助教授

二〇二二年九月二八日～一〇月六日

十五世紀半ばに遣明船の從僧として明代中国に訪れた笑雲の見聞録である、いわゆる『笑雲入明記』にかかわる関連資料を調査した。同書は、村井章介・須田牧子の訳注をつけて『笑雲入明記…日本僧の見た明代中国』（平凡社・二〇一〇）というタイトルで出版されている。私も韓国にて同書を韓国語に訳注する作業に取り組んでおり、史料編纂所で滞在の際には、その作業のために明代の入明記である『戊子入明記』や『壬申入明記』を閲覧し、また韓国では入手しがたい研究論文や著作をコピーした。また、訳注者の須田牧子氏に直接会い、関連資料と情報を提供していただいた。今後、これを下敷きにし、『笑雲入明記』の韓国語版を出版する計画である。

また、お手伝いをしている、一般共同研究「明清中国関係文書の比較研究」の会議に参加した。代表者の渡辺美季氏をはじめ、共同研究員の須田牧子・黒嶋敏・岡本真氏と面談し、台湾調査に引き続き韓国調査について、スケジュール・訪問先・資金調達など、実務の調整に取り掛かった。

東京大学史料編纂所研究成果報告一覽

二〇二二年度

番号	書名	研究費名	責任者
1	多久家文書の「読みなおし」	共同利用・共同研究拠点（特定共同研究）	小宮木代良
2	山の寺念仏寺所蔵史料調査報告書	共同利用・共同研究拠点（一般共同研究）	藤原重雄
3	龍興山大慈寺所蔵史料	共同利用・共同研究拠点（一般共同研究）	小瀬玄士
4	国際研究会「御所（宮殿）・邸宅造営関係資料の地脈と新天地」報告集（3）	研究拠点創設プロジェクト	田島公
5	陽明文庫講座図録4―陽明文庫資料からの新発見（3）―	研究拠点創設プロジェクト	田島公
6	訳注『再渡集』（稿）	科学研究費補助金基盤研究(C)	須田牧子
7	明治太政官文書を対象とした分散所在史料群の復元的考察に基づく幕末維新史料学の構築	科学研究費補助金基盤研究(B)	箱石大
8	日本中近世寺社（記録）論の構築―日本の日記文化の多様性の探究とその研究資源化	科学研究費補助金基盤研究(B)	遠藤基郎